

こへ参るにや又月末にて懐中甚だ不如意ならんと思はる全體いくら位かゝるのですか一寸御しらせ下さい君の手紙と行違に小生の手紙は横濱へ参り候事と存候蘭の儀出来得るなら頂戴仕度候御出京の節は御立寄待上候 以上

三月十八日

金

渡邊様

座下

一三八

三月二十二日

午後一時四十分

本郷區駒込千駄木町五十七番地より

横濱市元濱町一丁目一番地渡

邊和太郎へ

御手紙拜見今日ことによると御出の由御待申上候二十九日芝居見物の儀は月末にて少々多忙ことに小生近來芝居杯申すのんきな量見にならず乍残念御断り申上候いづれ其内落付候へば御供致し度と存候先は御返事迄 草々不一

二十二日

金

渡邊様

一三九

三月二十三日

午後一時四十分

本郷區駒込千駄木町五十七番地より

横濱市元濱町一丁目一番地渡

邊和太郎へ

華墨拜誦仕候小生在宅の時日はほとんど不定なれど先不精ものといふ前提より論理的に結論を下す時は大抵うちに寝て居ると云ふ命題を得ることかと存候此頃は一定の職業なき爲毎日々々飄箏の化物然と消光致居候只御光來の節は一寸端書を御つかはし被下候へば御待ち可申上候拙寓偏鄙にて何の風情も無之加之貧居御馳走も致しがたく候先づ一日田舎へ遠足する積で御出かけなさい 以上

二十三日

金

太良様

俳榻下

一四〇

四月九日

午後一時四十分

本郷區駒込千駄木町五十七番地より

鹿兒島市下龍尾町百七十六番戸落

合爲誠へ

尊書拜見仕候春暖之候愈御清適欣賀此事に御座候下て小生碌々無異消光罷在候間乍憚御休神被下度候借御惠與の石硯一枚昨七日小包にて正に到着御厚意の段篤く御禮申上候右は時代も古く光澤發墨の具合大によろしく小生如き俗字を弄し候者には惜しき逸品と存候裏面の彫刻及び銘亦頗る趣味に富み居候やに見受候右は新しく御手に入候や又は從來より御所持の逸品に御座候や石硯に關する歴史詳細相分り候へば朝夕摩挲愛翫の際興味一層深からんと存候へば御序の節御承知の

歴史丈御報被下候へば幸甚と存候先は右御禮まで勿々不一

四月八日

東郭先覺
坐下

金

一四一

四月十三日 月 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 熊本第五高等學校奥太郎へ

尊書拜見仕候春暖の候愈御清穆御精勤奉賀候小生歸朝後碌々消光今に何事も成さず慚汗の至に候御地英語部内の状況逐々御報知被下先々無事に進行致居候模様安心致候殊にスキート氏非常の熱心にて職務に盡力被致居候由甚だ満足の至に不堪實は同氏傭入の當時より小生は別段の知己に無之候へば幾分かの危険を冒して周旋致候次第はからずもかゝる熱心家を得て學校は勿論他の諸教員迄其利益を享候段意外の仕合に候小生は其時より一回の書信も不仕御面會の節はよろしく小生より感謝の意を御傳被下度候猶英語部内の件其他とも遠山君と共に御盡力被下度小生如きもの参り候とても別段學校の爲にも相成間敷かと存候小生は是より餘暇を得て多少研學の便宜を得度と希望致居候へども人事不如意の世の中なれば如何になり行くや自身にも見當相つき兼候遠方にて容易に御目にかゝる事も出来ず御話も承はり兼候残念に存候其内何等かの時機に御上京にも相成候へば久々にて警咳に接し度と待居候御承知の菊池謙氏上京明日同氏の爲に會を開く筈に候先は右御返事迄 勿々頓首

四月十三日

奥様

金之助

一四二

五月九日 土 午後七時三十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 熊本縣球磨郡湯前村井上藤太郎へ

拜啓貴俳並びに白扇會集御送被下難有奉謝候

小生は目下大多忙にて近來俳句とは全く絶縁の有様に候へば評選等の儀は到底御依頼に應じがたく候いづれ近日虚子碧梧桐兩君の内にでも依頼致し見るべくと存候

先は右御返事迄 勿々頓首

十日

夏目金之助

井上藤太郎様

一四三

五月二十一日 木 午後七時三十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 久留米市築嶋町小畑方菅虎雄

御書拜見仕候愈御出發の期にせまり嘸かし御多忙の事と存候小生は存外閑暇にて學校へ出て駄辯を弄し居候大學の講義わからぬ由にて大分不評判 俳人時々來訪又々邪道へ引き入れさうなり藤代先日より病氣本日承り候へば肺炎の由しかし最早全快の事と存候第一高は遙かにのんきに

候熊本より責任なく愉快に候大學の方は此學期に試験をして見て其模様次第にて考案を立て考案次第にては小生は辭任を申出る覺悟に候もし左様なれば小生の目的通の研究をなす積に候大塚の三女病氣にて死去夫が爲同人よりの借錢返却の爲め貧乏なる山川を煩はし候山川は不相替に候先日一寸訪問自轉車の稽古をして戻り申候近頃晝寢病再發何にもせず寢て居り候不平でも病氣でもなく只寐たいから寐る次第甚だ意味なき寐方に候眼野の父死去の由氣の毒の至に存候同人今回も亦落第の事と存候支那へも一寸参り度候然し教へるものがないから困却致候日本語を二時間許教て三百元くれるわけには参りませんか先ハ御返事迄 勿々不一

二十一日

金

虎 雄 様
座下

一四四

六月八日 月 午前十一時二十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 熊本縣球磨郡湯前村井上藤太郎

拜啓白扇會報第九號わざ／＼御送被下難有存候右會報は活版ならぬ處大に雅味あるやに虚子とも申合候内容も面白く拜見仕候

近頃地方俳句會の吟什見るべきもの多く却つて本場の東京を凌ぐ佳句もまゝ見受候様に存候ほとゝぎす杯にても地方俳句會の句の中には大にふるうて居るのがあると先日四方太と話し申候

小生は先日申上候通最早俳界中の人に無之新しき句杯もほとんど作り不申頃日來ほとゝぎす關係の人にせめられて又々邪道に陥りかけて居候其内蕪句相認め御送御笑覽に可供候 以上

六月八日

夏日金之助

微笑先生

座下

一四五

六月十四日 日 午後十一時五十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 清國南京三江師範學堂菅虎雄

尊翰拜誦無事御着の段奉賀候目下ゴタ／＼デ休暇のよし珍重存候可成ゴタ／＼ヲ長クシテ休ム算段ヲスベシ教授ナンカ何デモイ、サ僕ガ教ヘル生徒ニ支那人ノ何トカ云フノガアル僕ハスキナ男ダヨ朝鮮人モ居ル是モスキダ高等學校ハスキダ大學ハヤメル積ダ一方案ヲ立テナケレバナラン何ノカンノツテ一學期立ツテ仕舞ツタ僕モ一度神社佛閣ノ様ナ家ニ住ンデ見度イ學問ナンカスルナ馬鹿氣タモンサネ骨董商ノ方ガイ、ヨ僕ハ高等學校へ行ツテ駄辯ヲ弄レテ月給ヲモラツテ居ル夫デモ中々良教師ダト獨リテ思ツテル大學ノ講義モ大得意ダガワカラナイソウダ、アンナ講義ヲツマケルノハ生徒ニ氣ノ毒ダ、トイツテ生徒ニ得ノ行ク様ナハ教エルノガイヤダ、試験ヲシテ見ルニドウシテモ西洋人デナクテハ駄目ダヨ

近來晝寢病再發グ／＼寐ルヨ博士ニモ教授ニモナリ度ナイ人間ハ食ツテ居レバソレデヨロシ

イノサ大著述モ時ト金ノ問題ダカラ出来ナケレバ出来ナイデモ構ハナイ天勾踐ヲ空フスルト云フ
譯カネ近來南隣ノハツチヤン北隣ノ四郎チヤン背後ノ學校ノ生徒諸君日課ヲ定メテ色々ヲツテ居ルヨ是モ一學期結了ト云フ譯サネ

其外何モカクヲガナイ御留守宅ヘハ其後伺ハナイ御變モアルマイヨ大塚ノ三女ガ先達テ病氣デ
死ンダ僕ハ見舞ニ鯛ヲヤツテ笑ハレタ

僕ハ切角調ヘカケタヲ丸デ忘レテ仕舞ツタ愚ナ話シダ(ノート)ナンカ焚テ仕舞フト思フ
君ノ状袋ト半切ハ氣ニ入ツタサスガ支那的ダネ

今常公ガ泣イテ居ルヨアイツハ泣テ仕方ガナイ、山川不相變デ困ル僕モ相變ラズデ困ル
右早速御答迄實ハ少々氣取ツテ夏目ハ字ガ上手ニナツタト云ハレタカツタガソナ山氣モナク
ナツタカラ天真爛漫タル處デ御免蒙ル 左様ナラ

六月十四日

金

虎 雄 様

座下

君ガ居ナクナツテ悪口ヲ圖ハス相手ガ居ナクナツテ甚ダ無聊ヲ感ズルヨ

一四六

六月十七日 水 午後五時(以下不明) 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 熊本縣球磨郡湯前村井上藤太

郎へ

啓白扇會投稿用紙わざ／＼御送被下候につき別紙蕪句數首御笑覽に供し申候近頃俳句杯やりた
る事なく候間頗るマヅキものばかりに候右用事迄 勿々頓首

六月十七日

金

微笑 様

愚かければ獨りすゞしくおはします

無人島の天子とならば涼しかろ

短夜や夜討をかくるひまもなく

更衣同心衆の十手かな

ひとりきくや夏鶯の亂鳴

蝙蝠や一筋町の旅藝者

蝙蝠に近し小鍛冶が鎚の音

市の灯に美なる莓を見付たり

玻璃盤に露のしたゝる莓かな

能もなき教師とならんあら涼し

蚊帳青く涼しき顔にふきつける

更衣沂に浴すべき願あり

薔薇ちるや天似孫の詩見厭たり

七月三日 金 午後十一時五十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 清國南京三江師範學堂菅虎雄へ
 七月一日第二ノ手紙が來々色々ナ珍事ガ書テアツテ面白カツタ車ト酒ト間違ツタリ驢馬デ落ち
 カ、ツタリ頗ル支那的ダカラ妙ダ日本ニ面白イ事ハナイヨ京坂合併相撲位ナ者ダ大學モ高等學校
 モ試験ハスンダ昨日ハ點數會議テ朝カラ晩迄引張「ラ」レル只黙ツテ名説ヲ謹聽スル許リダガ中々
 草臥ルモンダナ明日カラハ入學試験トクルカラ又厄介ダドーモ人間ハ生キタイ爲ニ生キテ居ツ
 テソーンテ生キタイ爲ニ苦勞スルイクラ骨ガ折レテモ生キテ居ル方ガ善イノト見エル夫ガ高ジ
 ルトイクラ骨ガ折レテモ名譽ガトリタクナル學問ガ出來タガル金ガ欲シクナル實ニ變ナ奴サネ
 君ノ御母サンハ病氣ダツテ君ノ一家ハ郷里ヘ引上タ相ダナ昨日藤代カラ聞タ君又心配ガ一ツ殖
 タナ家族ハ當分國ヘ置クガイ、可成金ヲタメテ半世ノ落托ヲ回復スルサ世ノ中デハ貧乏ヲ不名譽
 ト思ツテ居ルカラ君モコ、デ名譽回復ヲスルサ骨董ノ掘出物ノト云フテ矢張りイカサマ物ヲツカ
 マサレルノダラウ假令然ラズトスルモ貯蓄ヲ廢シテ骨董ニ打込ンデハ所謂名譽回復ガ出來ンヨ
 發句ナンカ下火極マルマルデ作ル氣ニナラン然シ退窟^原凌ギニ時々ナル是ハ得意ノ餘ニ出ルノデ
 ハナイ一時ノ鬱散ト云フ資格サ時ニ僕近頃ノホト、ギスニ自轉車日記ト云フ名文ヲ已ヲ得ズ草シ
 テ載セタカラ見給ヘ甚ダ上品ナラザル文章ダガ中々ウマイヨ
 君教授ノ傍支那語ヲ勉強シ給ヘ君ノ様ナ無器用ナ者デモ熱心ニヤレバ上達スルドラウソシテ
 支那ノ書物ヲ讀メ僕ハ支那文學ハ大スキダガスキダ抔ト云フ程知ツテハ居ラナイヨ

僕大學ヲヤメル積デ學長ノ所ヘ行ツテ一應卑見ラ開陳シタガ學長大氣箴ヲ以テ僕ヲ萎縮セシメ
 タソコデ僕唯々諾々トシテ退クマコトニ器量ノワルイ話シチヤナイカ
 狩野も大塚も藤代も相變らん

藤代は君ノ心配スル程ナリハナイダラウ、大塚モソソナニ落膽シテ居ナイ様ダゼ尤モ是ハ僕ノ
 様ナ不人情ナ人間カラ見ルカラ左様ニ見エルノカモ知レナイ狩野ハ狩野サ萬古不易ト云フベキ代
 物ダ然シ熊本時代ヨリモ元氣ガアルラシイ山川ハドウナルカ僕モ近來面會シナイ僕ハナマケル方
 ニイソガシイ男ダカラ御無沙汰ヲスルノサ大ニ盡力シテやレツテ中々氣ガ進マナイ様ダカラ一寸
 ムヅカシイソレニ周旋シ様ト思フ口モナイ實ハ甚ダ氣ノ毒ニ存ジテ居ルガドウモ仕様ガナイ君ノ
 方ニ口ガアレバ夫コソ結構ダガ當分夫モ六ヅカシイト云フナラ仕方がナイ

近頃梅雨ノ天氣鬱陶數甚ダ困リ入ル平生ノ物草太郎ハ益物草太郎ニナル(樂寢晝寢われは物草
 太郎なり)抔とすまして居る内に天罰觀面胃病、腦病、神經衰弱症併發醫者モ匙ヲ投ゲルト云フ
 始末ハ近キ將來ニ於テノ出來事ト察セラレ

山川ハ近キ將來ニ於テ氣狂ニナルト?ドーダカ分ラナイ普通ノ人ハ大概氣狂ダ自分デ氣狂デナ
 イト自信シテ居ル許リサ何ノ事ハナイ世ノ中ト云フ者ハ氣狂ノ共進會ト云フ様ナ物サ其中ノ大氣
 狂ヲ稱シテ英雄トカ豪傑トカ天才トカスベツタトカ轉ンダトカ云フ迄ダラウ御前サンダノ吾輩ノ
 如キハ小氣狂ダカラ駄目サ鳥渡泥棒ノ様ナモノデ大泥棒ハ人カラ崇拜セラレ小泥棒ハ牢屋ヘ入ル
 世ノ中ハ種類ノ差デナクテ單ニ程度ノ差デ反對ノ物ニナツテ仕舞フ黑白ナカト云フノハソレサ
 支那ヘ行カナクツテモ豚ト同化スル位ノ決心ガナケレバ世ノ中ハ渡ツテ行カレヤシナイ幸ニ南

京迄出張シタノダカラ可成豚ヲ觀察シテ歸ルトキニハ立派ナ豚ニナツテキ給ヘ御前サンノ様ナ潔癖家ニハイ、訓練ダ是カラ禪學ナンドヲやメテ豚學ヲヤルベシダ吾輩ハ唯ゴロノシテ居ル所丈ハ豚ヲ學ビ得テ其骨髓ヲ得テ居ルト自ラ信ジテ居ル其他モ追々稽古ヲシタラ遼東ノ豚位ニハナレルダラウト思フ

明日カラ入學試験デ朝七時カラツラマル譯サ七時カラツラマルニシテモ試験ヲスル方ハマダイイガサレル爲ニツラマルノハタマランネ然シソレモ自分ノ得ノイクコトダカラ誰モスルノサ馬鹿ニシテイラ

君ハ時々菊謙ト議論ヲスル相ダナ兩方共剛情ダカラ面白イダラウ僕君ヲ失ツテ悪口ノ相手ガ居ナクナツテ甚ダ寂寥ノ至ニ堪ヘン僕モ支那ヘ行キタイヨ

今度ハ此位ニシテ置カウ又改メテ現參スル先身體ヲ大事ニ氣樂ニ暮シ給ヘ 勿々頓首
七月二日夜 金之助

虎 雄 様

菊謙ヘヨロシク、アイツ四百元ノ月俸デ大得意ダラウ

一四八

七月三日 金 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 熊本第五高等學校奥太郎へ

漸々暑氣相催シ候處御清勝奉賀候次に小生不相變碌々消光罷在候間乍憚御休神可被下候目下入學試験にて随分多忙毎日朝七時より出校には恐入候御校にても同様定めて御いそがしき事と遙

察候小生は高等學校と大學とかけもちにて兩方とも碌な事は致せもせず致さうともせず勝手好加減主義にてやり居候大兄などの様な眞面目な人より見れば墮落の極に候御地景況如何に御座候や御序の節御もらし被下度候あまり御無沙汰致候間一寸御左右伺上候 勿々

七月三日 金

奥 様

榻下

一四九

九月十四日 月 午後二時五十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 清國南京三江師範學堂菅虎雄へ

〔封筒の表に「菅虎雄大人虎皮」とあり〕

漸々秋冷の候と相成候處愈御清勝奉賀候小生不相變神經衰弱意氣銷沈と申す次第に御座候過日侯野生參り大兄大分得意のよし承り候船遊山親睦會の事なども傳聞致候小生夏中籠居大塚は一家引きまとめ鎌倉へ參り候狩野は避暑のかはりに學校へ通勤致候先日は結構なる菓子折頂戴難有存候愚妻先日より又歸宅致居候大なる腹をかへて起居自在ならず如何なる美人も孕むといふ事は甚だ美術的ならぬものに候況んや荆妻に於てをやかね學校も漸く始まる講義も例の如く不得要領底にて御免蒙るつもり之君の法帖はまだ拜見致さず實は御留守宅へは御無沙汰をして一向參らん其内行かうと思ふがまづあてにならない天下にあてになるものは金だけだから金をため給へ菊地は矢張元氣であらう是へも無沙汰をして居る君からよろしく頼むよ、何だか「御座候」に始まつ

て「頼むよ」に了る手紙杯は實に前後一貫せぬ様だが龍頭蛇尾は僕の大得意の處だから其積で讀み給へ、

其外何にもかく事がないから是でやめる 失敬

九月十四日

虎雄様

金

山川は淨土宗の學校へ行く一週八時間程 (オハリ)

一五〇

九月十五日 火

午後五時十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 熊本縣球磨郡湯前村井上藤太郎へ

拜啓秋氣相催ふし候處愈御清適奉賀候御刊行の白扇會報每度御送にあづかり難有存候過日は蕪稿御求めに相成候處近頃俳神に見離され候せいか一向作句無之不得已其儘に致し置候不惡御容赦可被下候先は右御禮旁御挨拶迄 勿々不一

九月十五日

夏目金之助

井上藤太郎様

貴下

一五一

十月十四日 水

午後五時十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 宮崎縣宮崎郡宮崎町杉田作郎へ

貴翰拜誦仕候拙句わざ／＼御所望により惡筆をかへり見ず御一笑に供し申候御落手可被下候當時多忙にて俳界とは絶縁の姿に有之候故別段の好句も無之慚愧の至に存候先づは御返事まで如此に御座候 以上

十月十四日

夏目金之助

杉田作郎様

座右

一五二

十二月十九日 土

本郷區駒込千駄木町五十七番地より 岸重次へ [封筒なし]

其後御模様如何かと存候處益々御健勝御精勤のよし奉欣賀候札帳よりは其後返事参り當分の内經費の都合にて任命六つ〔ケ〕敷由申來候

小生依然碌々消光罷在候間乍憚御休神可被下候先は右御返事迄 勿々拜具

十二月十九日

夏目金之助

岸重次様

明治三十七年

一五三

一月三日 日 午後八時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 下谷區谷中清水町五番地橋口貢へ〔繪はがき 自筆水彩畫 盆栽の松水仙背景は屏風らし〕
人の上春を寫すや繪そら言
漱 石

一五四

一月十七日 日 使ひ持參 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 田中政秋へ〔封筒なし〕
拜啓今朝御編輯の納豆會俳句稿落致候處右は如何取計可申や同會に關しては小生只今迄何等の關係も御座なく候一寸迷ひ居候御指教被下候はゞ幸甚
十七日
夏目金之助

田中政秋様

一五五

二月九日 火 午前零時二十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 小石川區原町十六番地鹽谷方寺田

寅彦へ〔はがき〕

水底の感

藤村操女子

水の底、水の底。住まば水の底。深き契り、深く沈めて、永く住まん、君と我。
黒髪の、長き亂れ。藻屑もつれて、ゆるく漾ふ。夢ならぬ夢の命か。暗からぬ暗きあたり。
うれし水底。清き吾等に、譏り遠く憂透らす。有耶無耶の心ゆらぎて、愛の影ほの見ゆ。

二月八日

一五六

二月十四日 日 午前十一時十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 本郷區臺町三十六番地同學舎内

野村傳四へ〔はがき〕

小生の下駄無事に消光罷在候御休神可被下候大兄の足の裏の直覺誤りなき事を保證致候間右主婦へ御申聞可然と存候

一五七

三月二十七日 日 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 小松武治へ

拜啓先日御持參のリヤ王物語拜見一々原文と對照候爲め存外手間どり候原今分にては他の分も相應に時日を要すべきかと存候乍失敬少々添刪を施し申候へば御披見の上御取捨可被下候 以

上

三月二十七日

小松様

夏目金之助

一五八

四月二十一日 木 午後五時十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 麻布區三河臺町島津男爵邸内野

問真綱へ

拜啓伊豫國西條の中學に於て Practical English の出来る文學士一名入用のよし至急申込有之月俵は七拾圓なり校長は松平圓次郎と云ふ二十六年出の文學士なり御心當なきや否や御返事を待つ草々

四月二十一日

金之助

野間兄

御閑なときに御遊に御出可被成候

鳩鳴いて烟の如き春に入る

杏として桃花に入るや水の色

一五九

四月二十七日 水 (時間不明) 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 新潟縣新發田中學校黒木千尋へ

〔うっし〕

拜啓御校英語教師採用の件につき御問合せの件拜承仕候只今一二の候補も有之候へども他の中學との交渉中に御座候間右相判り次第確たる御返事可申上候間暫くの間御猶豫相願度先づは右御答まで勿々

四月二十六日

黒木千尋様

夏目金之助

一六〇

四月二十八日 木 午後六時四十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 新潟縣新發田中學校黒木千尋へ

拜啓先般御照會の英語教師の件二三の心當り相尋ね候處其内の一名は深江種明氏にて同君は既に大兄より直接に御談判相成たるやの由廻答有之候他に二名は新發田の方にてあまり意志なき由に候深江君方の模様は如何か不存候へども出來得るなれば同君御採用可然か目下の處小生方にては他に候補者無之候尤も狩野君にはまだはなし不申候 以上

四月二十八日

黒木様

金之助

一六一

四月 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 小松武治へ
御依頼の冬物語閱了御急ぎの事と存候間召使を以て御送り申候御落掌可被下候
是にて沙翁物語も一先結了一寸一服出来る譯に候 以上

小松 武 二様

夏目金之助

一六二

五月三十日 月 午前零時二十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 麻布區三河臺町烏津男爵邸内野
間眞綱へ

啓上

君病氣のよしにて日比谷中學をやめるとか代理をさがして居るとか聞けり實事にや病氣とは
何病なるや少しの事ならば辛防しては如何學校を卒業した許りの者が二十五六時間の授業に堪え
ぬ杯云ふ様な事では駄目に候君の年輩より言へば三十時乃至四十時の働きは多きに失せずと思
ふ

夫とも他に大功名心でもあつて自分の勉強が必要とあらば特別なり又家族其他に不愉快な事又
は心配ありて精力を其方に消耗すとあらば是も格別なり去れど常態にあるものが僅々二十五六時
をもて餘すとは情なき次第ならずや

且島津家の授業は一年限にて御免蒙るを得べし中學の口は今やめればすきな時に手に入ると限

らず此點より云ふも辛防肝要なり或は地方行を希望するやも知らねど地方は俗務の爲め二十五六
時間の授業よりも困難なるべし

右は入らざる事ながら御忠告迄に申上候何卒御一考ありたし

五月二十九日

金

眞 綱 様

一六三

六月三日 金 午後七時二十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 本郷區臺町三十六番地同學舎内野

村傳四へ〔はがき 表の宛名に「野村傳四仁兄大人閣下」とあり〕

只今高等學校にて島田三郎君の演説を聴て歸れり僕も駄辯を弄する事は人に負けぬ積りだが斯
程迄に駄辯は振り舞はせない彼の辯は雄辯でも巧辯でも能辯でもない要するに平なる板辯と云ふ
ものなり僕の講義中の駄辯と異なる處なし

太陽にある大塚夫人の戦争の新體詩を見よ、無學の老卒が一杯機嫌で作れる阿呆陀羅經の如し
女のくせによせばいゝのに、それを思ふと僕の従軍行杯はうまいものだ。行春や重たき琵琶の抱
心とは蕪村の秀句に候。橋口は又繪葉書をよこした

一六四

六月四日 土 午後六時四十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 本郷區臺町三十六番地同學舎内野

六月十七日 金 午後零時二十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 本郷區臺町三十六番地同學會内

一六六



六月四日 土 午後六時四十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 本郷區臺町三十六番地同學會内野

村傳四へ (繪はがき 自筆ペン畫 表の宛名に「野村傳四先生」とあり)

一六五



村傳四へ (繪はがき 自筆ペン畫 表の宛名に「野村傳四先生」とあり)

野村傳四へ「はがき 表の署名に「千駄木の住人某先生」とあり」
昨日散歩の序同舎の前を通り、没趣味にして且汚穢極まる建物なり傳四先生此内に閉居して試験の下調をなしつゝあるかと思へば氣の毒の至なり

傳四先生の答案を瞥見せり傳四先生のバラフリーズはバラフリーズにあらずミスブレースなり日本の運送船がまたやられた金洲丸事件に鑑みざる日本人はさすがに大國「民」の襟度を具したるものか持ちたくなきものは大國民の襟度なり

昨日ハンケチ一ダースとビスケット一箱をもらふハンケチで汗をふきビスケットをかぢる
轉居せんと思ふがよき家はなきか

一六七

六月十八日 土 午前九時五十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 本郷區臺町三十六番地同舎内

野村傳四へ「はがき 凡て赤インキにて認めあり表の署名に「某先生より」とあり」

ビスケットをかぢりて試験の答案を検査するにビスケットはずん／＼方付くけれども答案の方向は一向進まない、物徂徠云ふ炒豆を喫して古人を罵るは天下の快事なりと余云ふビスケットをかぢつて學生を罵るは天下の不愉快なりと傳兄以て如何となす

僕は一文なしの癖に近頃しきりに住宅の圖案を考へて居る夫故に書物を讀んで居つても茶座敷や築山が眼に映じて書物がわからん、かゝる先生に答案を聞せらるゝ學生は幸かはた不幸か傳兄以て如何となす

君が英文が下手なのは書物を澤山讀まんからである、小言を申す我輩も決して上手ではないが日進月歩の今日弟子たるものは先生を凌がなくてはいけないから其積りで多少工夫して書物を讀まねばいかんよ傳兄以て如何となす

橋口が又繪端書をくれた靜かな海に雲の峯それに白帆甘いものだ僕の手腕よりも少々上等の様だ傳兄以て如何となす

どこか善い借家はないだらうか休暇の始めに引越してそこで夏中勉強を仕様と思ふ傳兄以て如何となす

そして君は手傳に來て呉れるだらうね傳兄以て如何となす

一六八

六月二十二日 水 午後二時四十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 本郷區臺町三十六番地同舎内

内野村傳四へ「はがき 凡て赤インキにて認めあり」

君が遠慮して來なくとも毎日来客で繁昌だよ

ビスケットは事件頗る進行して最早一個もない

其代り答案の方は到底豫定の如く行動する譯にいかない、君の答案は存外マツイ此次にはもつとうまくや「ら」なくてはいかんよ 小山内や中川の方が餘程よろしい

二十二日

先生

一六九

六月二十七日 月 使ひ持参 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 本郷區駒込西片町十番地柳都太郎へ
梅雨漸くはれて少々うれしき天氣と相成申候植物研究も定めてはかどる事と存候ちと氣儀を吐
きに御光來可被下候小生轉宅の野心を起し本郷小石川は勿論四谷麻布青山邊迄詮索甚だ汗の出る
事に候

採點それこれにて存外手間どり御迷惑の事と存候別紙御廻付及候間可然御取計願上候 以上
君に櫻の實をもらひ其後ある人よりピスケツトを貰ひ兩三日前乙なる西洋料理を御馳走にな
り果報相つゞき候結果下痢を催ふし試験調もものうく候

金

芥舟先生

二の組の西村の點なし欠席かしらん

一七〇

六月二十八日 火 午後二時四十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 小石川區小日向臺町一丁目三
番地川淵正幸へ

先日は突然まかり出失敬致候借家早速御報知被下難有存候右御宅へ上候前に見たる家にて牧野
と申す華族の家に候新らしけれど屋敷狭く格別に不廉と存候間やめに致候其他諸々詮索致し候へ

ども思はしき家も無之につき目下ある處へ交渉中まよれば夫へ移る積に候

御病氣精々御加養可然と存候氣分の上よきときは遊びに御出可被成候

先は御禮まで 勿々

二十八日

川淵様

夏目金之助

一七一

六月二十九日 水 午前零時二十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 麻布區三河臺町島津男爵邸内
野間眞綱へ

先日は失敬諸々ぶらつきの上西洋料理の御馳走に相成候處其翌日より下痢を催ふし今に至る迄
粥を食ひ居候餘り食ひなれぬものを食ひし爲か將御馳走しつけぬ人が奮發した爲か主治醫には分
りかね候

一昨日家をさがし候處偶然川淵正幸の家の前へ出候故訪問致候去年から髪をからず髭を剃らず
と申しまことにいやはや二十世紀の俊寛に御座候君や僕の心經衰弱も漸々斯様にハイカラに成る
事と存候明星の投書家杯の新體詩の主人公となり候へば少々位の病氣は我滿致すべく候先は運引
ながら御禮旁下痢御報迄 勿々頓首

二十八日

眞綱様

金

一七二

七月一日 金 午前零時二十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 赤坂區水川町十八番地彌富濱雄へ
拜啓昨日は遠路御光來の處何の風情も無之失敬此事に御座候其節御申置の貸案件につき御配慮
を煩はし難有存候空家二間の繪圖面其他詳細御申越被下御手数數の段恐入候實は只今寄寓致居候家
の家賃は二十五圓に有之目下の處夫より多額の屋賃は拂ひがたくと存候尤も二家の内Bの方は稍
低廉とは存候へども是亦二十五圓を超過致候故先今回は御斷り申上候右御禮旁御返事迄勿々如斯
に候 以上

三十日

彌富様

座下

夏目金之助

一七三

七月三日 日 午後三時五十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 麻布區三河臺町烏津男爵邸内野間
眞綱へ

昨日は御光來の處何の風情もなく失敬此事に候其節御話の島津家家庭教師の件只今湯淺生參り
候につき一寸申談じ候處大に志望の由につきもし大兄御辭任の際は同人御推舉被下度右御含迄至
急申入候

昨夜皆川氏方へ參る筈の處寺田生來訪又々新體詩杯の批評にて遂に遅く相成失敬致候
別紙繪葉がき御注文故差上候中々うまく出來候實物よりはよろきる處御賞瓶可被下候 以上

七月三日

金

眞綱様

一七四

七月九日 土 (時間不明。但「東京駒込未納」の印あり) 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 宮崎縣宮
崎郡宮崎町杉田作郎へ

拜啓御依頼により蕪句二御令父の壽として御一祭に供し申候近來俳句てふもの作り不申候につ
き二句とも句をなさず慚愧の至に候 以上

七月九日

夏目金之助

杉田作郎様

一七五

七月十六日(?) 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 皆川正禧へ (うつし)
拜啓去る地方より新文學士一名招聘の件小生方まで申來候につきては一寸御面會の上御相談申
上度に付御ひま有之候はゞ御光來被下度候實は參堂可仕筈なれど目下顔に腫物生じ鼻まで漆喰を
塗りをり候故乍恐縮御足勞を煩し度候 以上

一七六

七月(?) 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 下谷區谷中清水町五番地橋口清へ (繪はがき 自筆水彩

畫)

繪はがきを難有

あの色が非常に氣に入つたが全體あれは何の繪ですか一寸見當がつかない

是は久し振でかいたら無暗にきたなくなつた夜だか晝だか分らないから(春日影)とかいた

一七七

七月十八日 月 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 小石川區原町十二番地菅虎雄へ

君から貰つた紙へ君から貰つた筆を以て君から授かつた法を實行してかくと斯様なものが出来る才子は違つたもので一時間許り稽古するとすぐ此位になるうまいものでせうほめてくれないと進歩しない

此詩は僕が洋行する時に作つた傑作で書と共に後世に傳ふるに足るから君に進呈する

君の處へ行く^原と何が取得がある僕は魏故南陽張府君墓誌を習ふ事約三時間君の傳授は實に窮窟千萬のものたる事を悟り得た 以上

十八日

虎 雄 兄

金

座下

生死因縁無了期

色相世界現狂癡

迤邐校屨塵中滯

迢遞正冠天外之

得失忘懷當是佛

江山滿目悉吾師

前程浩蕩八千里

欲學葛藤文字技

一七八

七月二十日 水 午前九時五十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 麻布區三河臺町島津男爵邸内野

間眞綱へ

尊書拜見島津家の方は今一年繼續の事と相成候よし湯淺の方は多分神宮皇學館の方へまとまる事と存候へば御心配被下間敷候日比谷の方も十時間御受持のよし承知致候可相成は二十五六時間御持ち可被成候浮世はウン／＼働くものに候皆川君一昨夜來り何か發句をかいてくれと云ふから詩箋に十五葉無茶苦茶にかいてやり候是は近頃習ひたる漢魏六朝の筆法にて凄^原いものに候一牧十圓宛とすれば何でも百五六十圓の商賈に候鼻上の漆喰自然剝落もとの如く玉子の如くうつくしき

美男に相成候へば御安神可被下候暑中如何御暮し被成候や一日がりにて寐轉びに御出掛可相成候

俣野大觀先生卒業彼云ふ訪問は教師の家に限るかうして寐轉んで話しをして居ても小言を言はれないと僕の家にて寐轉ぶもの曰く俣野大觀曰野村傳四半轉びをやるもの曰く寺田寅彦曰く小林郁危坐するもの曰く野間眞綱曰く野老山長角

橋口は屢繪端書をくれる中々うまいもので僕の御手際では到底競争が出来ん野村が静岡から端書をよこした曰く濛雨しきりにてマダム フジの曲線美を賞する事が出来ませんと柄にない圖案と存候

不相變金ほしく金なく涼を欲して涼を得ず

涼しい處で美人の御給仕で甘い物をたべてそして一日遊んで只で歸りたく候 以上

七月二十日

金

眞綱様

漢魏六朝の筆法も暑氣の爲め少々崩れ申候

無人島の天子とならば涼しかる

一七九

七月二十四日 日 午後六時三十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 下谷區谷中清水町五番地橋口

貢へ〔繪はがき 自筆水彩畫 西洋人の肖像〕

名畫なる故
三尺以内に近付くべからず

一八〇

七月二十五日 月 午後五時(以下不明) 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 下谷區谷中清水町五番地橋

口貢へ〔はがき〕

昨日君の所へ繪端書を出した處小童誤つて切手を貼せず定めし御迷惑の事と存候然し御覽の通の名畫故切手位の事は御勘辨ありたし

十錢で名畫を得たり時鳥

一八一

七月二十七日 水 午前十一時十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 神奈川縣葉山岩倉家別邸小松

武治へ

拜啓其後起居如何當時岩倉家の別荘に御消光のよし避暑の爲め良策と存候

却説湯淺生件につき種々御配慮を煩はし感佩此事に候實は當人も在京を希望し從來の研究を續け度素志切なりしも鼻の下要求もだがたく先般文部省澤柳氏の周旋にて伊勢神宮皇學館へ高等官六等年俸八百にて略内定致したるやに承はり居候然る處貴君よりの手紙にて在京の望も萬更にあらざるを知り當人の爲甚だ遺憾の至に不堪因て澤柳及神宮皇學館の方へ不義理を醸さざる程度

内に於て當人今一應熟考の餘地を與へたくと存候就ては岩倉家の方の職務繁簡性質等待遇等今少し委細の所承知致し度と存候につき御多忙中甚だ御氣の毒と存候得ども右御聞合せの上湯淺方迄直接に御報被下間敷くや當時彼は横濱市伊勢町二丁目官舎内に起居罷り在候只今落手の書翰は愚見附記の上同人方へ廻付致置候間左様御承知置被下度候
臨終本件につき御配慮を煩はしたる岩倉家の人々並び家扶君へよろしく御禮御傳被下度候 以上

七月二十七日

小松 武治 様

夏目金之助

一八二

八月十五日 月 午前十一時十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 下谷區谷中清水町五番地橋口貢

へ〔繪はがき 自筆水彩畫 模様化されたる流水と落葉と〕

先日はまかり出御邪魔致候

不忍池畔の散歩に躑を見て御歸りの由そんなものが繪の材料にも文章の材料にもなります、近頃散歩には出るが根つから材料がない

繪葉書はやめにしやうと思つたが又謀叛心を出して此度は自製ならぬ一牧八厘のやつを十枚許買つて來ました其二枚へ少し風替りのものを書いたから送ります素人くさい處が好い所です褒めなくてははいけません

秋立や斷りもなくかやの内

ばつさりと後架の上の一葉かな

漱石

一八三

八月二十七日 土 午後二時(以下不明) 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 下谷區谷中清水町五番地橋

口貢へ〔繪はがき 自筆水彩畫〕

其後繪端書は澤山書くが送るのはやめにして仕舞た君は試験の準備で急がしい事です

先日高濱虚子に遇ふ十月からほととぎすの號をかへる其時同紙の上部四分一許の處へ廻り燈籠の様な影法師の行列を入れたい僕にかいてくれといふから僕は駄目だからといつて君の駱駝を見せたら君に逢ふ機會があつたら頼んで見て呉れといふ君の駱駝に感服したものと見える、一つかいてやりませんか

二十七日

御舍弟の停車場のスケッチを寺田寅彦に見せたらターナーの色彩の様だとほめました

一八四

八月二十九日 月 午前零時二十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 下谷區谷中清水町五番地橋口

貢へ〔繪はがき 自筆水彩畫〕

御返事ありがたく候御舍弟でも無論よろしく候書いてやつて下されば高濱は大に喜ぶべく候

一八五

九月四日 日 午後七時二十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 麻布區三河臺町烏津男爵邸内野間
眞綱へ〔はがき〕

トラホームは長い病氣です然し死ぬ事はない藥なんかはあてにならない只急劇に醫して仕舞へばよろし慢性になると終涯かゝるあぶない

九月四日

阿矢仕醫學博士

一八六

九月二十二日 木 午後三時五十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 下谷區谷中清水町五番地橋口
貢へ〔繪はがき 自筆水彩畫 朝顔の花を五つ六つ大きく描きあり其中に洗髮の女圖 扇を手にして横向きに立つ〕

試験が済んだら樂になりましたらう小生大多忙閉口
奈良の模様頗る面白く候
是は朝貌の幽靈なり

一八七

九月二十三日 金 午後六時四十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 本郷區臺町三十六番地同學會
内野村傳四へ

ブリタニカヲ見レバアルダラウ

拜啓僕或人からたのまれてモロッコ國の歴史の概略をしらべる事を受合つたが多忙でそんな事が出来ない君二三時間を潰して圖書館に入り五六ページ書いてくれ給へ御願ひだから古來からの政體等の變遷が一寸分ればよい右至急入るから其積りで御願申す左様なら

九月二十三日

夏目金之助

野村傳四君

是非やつてくれなくてはいけない、いやだ抔といふと卒業論文に零點をつける

一八八

九月二十四日 土 午後六時四十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 下谷區谷中清水町五番地橋口
貢へ〔繪はがき 自筆水彩畫〕

虚子から手紙をこころして橋口君の所へ出て御願するのだが明日から用事で京都へ立つから先日願つた廻り燈籠の畫を僕から今一返願つてくれと言います、僕は橋口君の弟は今奈良へ修學旅行中だから駄目かも知れぬが何しろ今一返話して見様と返事をしました、ほとゝぎす來月の十日頃出板と記憶して居ます夫に間に合ふ様にかいてもらへませうか

二十四日

一八九

九月二十九日 木 午後六時四十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 麻布區三河臺町島津男爵邸内

野間眞綱へ〔はがき〕

先達の君の發句は中々面白いうまいものだちと再興してやり給へ虚子に見せたらほめた

秋風のしきりに吹くや古榎

御朱印つきの寺の境内

老僧が即非の額を仰ぎ見て

餌を食ふ鹿の影の長さよ

二十九日

漱原 石

一九〇

九月三十日 金 午後(以下不明) 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 小石川區原町十六番地鹽谷方寺田

寅彦へ〔繪はがき 自筆水彩畫〕

大變な事が出来たといひながら大變な事を話さずに歸るのはひどい

一九一

九月三十日 金 午後六時四十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 下谷區谷中清水町五番地橋口貢

〔繪はがき 自筆水彩畫〕

漁師がふごをかつぐ畫は御説の如く面白く候

昨夜深江参り是亦落第のよしに候御仲間は澤山あれば決して落膽すべからず

今日は御令弟の御蔭にて色々説明を承りありがたく候

一九二

十月二日 日 午後零時二十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 下谷區谷中清水町五番地橋口貢へ

〔繪はがき 自筆水彩畫 木の幹大小五六本大きな紅葉所々に散る、前景に洗髪の水横向に

立つ、女の着物の模様は紅葉散らし〕

昨日はほととぎすの挿畫御送被下難有存候

早速虚子の所へやり申候御多忙中嘸かし御迷惑の事と存候 あの畫はほととぎす流の畫に候明

星流に無之面白く存候先日虚子と連句をしたる時丁度あの様な句を咏みました

此は紅葉の精に候無暗に赤くて大俗極まる所が却つて雅趣ある所に候繪畫の戸迷ひしたる如き

畫端書に候 以上

十月二日

一九三

十月九日 日 午後三時二十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 下谷區谷中清水町五番地橋口貢へ

〔繪はがき 自筆水彩畫〕
昨日の孔雀は結構に候僕なんかにはこんな思想は出ない
虚子が来て色々繪をもらつたといつて喜んで居りました

一九四

十月十一日 火 午後五時十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 麻布區三河臺町島津男爵邸内野間

眞綱へ〔繪はがき 自筆水彩畫〕

君の畫端書は何を寫したのか知らぬがあれは實景だ留學中の事を思ひ出す僕はあのあたりを
よくぶら付いたものさ

君の連句を高濱に送つてほとゝぎすへ載せる事にした今度に出るよ見給へ「諸國一見」の句
は甚だ佳と思ふ、昨夜野村がきた柿と林檎を食はせてやつた 何か持つて來給はん事希望致候

「行春や未練を叩く二十棒

青道心に冷えし田樂

此頃は京へ頼(頼)の狀もなく

兀々として愚なれとよ

僧堂と焼印のある下駄穿いて

門を出づれば櫻かつ散る」

今に別莊を建るから君を番人にして月給百圓賜給すといふ辭令をあげます

金

一九五

十月十二日 水 午後七時二十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 下谷區谷中清水町五番地橋口貢

へ〔繪はがき 自筆水彩畫〕

鶏の畫は頗る瀟洒蕙齋の様な風があると思ふ發句の前の句は調が整はぬ後の句は「時雨るゝや
庚申塚に鳴く狐」としたらものになります、君中々見込がある少し發句をやり給へそして君の令
弟にも是非勸めてくれ給へ、わけはない少しやるとちき上手になる、畫の趣味のある人が發句を
やつて發句の趣味を西洋畫でかいて貰ひたい、

白馬會に一人位發句をやる人があつてもよからう

一九六

十月十五日 土 午後三時五十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 下谷區谷中清水町五番地橋口貢

へ〔繪はがき 自筆水彩畫〕

夕風の句面白し笈と須須須との配合も黒人じみたり然し時候がいつだか分らぬ發句に季のものを
入れるのは感情を強くせん爲なり「夕風に笈を下すや須磨の秋」とでもすれば判然する宴やんで
の句も景色よけれど是も時候がわからぬ故「春寒の細殿もるゝ灯影かな」と位に改正然るべきか
夜嵐の句も同様の非難あり且是は句調とゝのはず秋風の句は季あれども景色明瞭ならず去りと

て情趣も見えず候むしろ考へて理に落ちたる句と思はれ候拙句に日の入や秋風遠く鳴つて來るといふがある是は別段の句にてはなけれども理窟なき故まだよろしく候こゝに理窟と申すは「一うなりして古葉かな」と如何にも秋風が一度吹くと木の葉がちると云ふ景色をことさらに人に示さんと工夫して不自然に陥入れるをいふ、人を泣かすも笑はすもさあ泣け、さあ笑へといふのは妙ならず泣き度ば笑ひ度ばと抛り出したる泣かせ方笑はせ方が上手の所に候繪にてもどうです美いでせうと繪が故意に己れを廣告して居るのはキザではありませんか、牛の繪は昔しの俳畫を見る様にて面白く候妄言多罪氣にかけずにもつとどん／＼御作りあらん事を希望致し候

十五日

金

一九七

十月十七日

午前零時二十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 新潟縣古志郡六日市村字蛇山細

貝勝逸へ

尊書拜見仕候征露帖とか御製作のよしにて小生發句揮毫御求め相成候處小生當時は發句を廢し候のみならず征露の句などは一句も無之候然し切角の御所望故舊句二句戰爭に關するもの相認め御送申上候一葉はかき損ひ候故裏にも申し申候御ゆるし可被下候子規の短冊は小生懇望せざりし爲生前親交の割合に存外無之只今僅かに二三枚有之候是とも留送別の句にて皆小生の身上に關するものゝみに候へば他人に差上る譯に參りかね候右不惡御承知被下度候 以上

十月十六日

夏目金之助

細貝勝逸様

一九八

十月二十日

午後七時二十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 麻布區三河臺町島津男爵邸内野

間真綱へ〔封筒表側に「平信凡音」とあり〕

先達は譯文の俳體詩御送拜見致しました處があれは白芙蓉のよりも甚だ劣りて見ゆる様なり翻譯などは駄目だから創作をどし／＼やつて送り玉へそうして俳體詩の大家になるさ君のほめて呉れた俳體詩は寅彦も大變ほめてくれたが四方太が來て大嫌だといつた俳體詩を作り得るものがこんなものをどうして作つたといふ評は少々恐縮した、近頃尼が尼になる來歴の長い奴を俳體詩で虚子と試みて居るが中々困難でちつとも進歩しない、こんだ君と遠足でもして俳體詩の記行文でもやらうではないか、ちと落雁でも以て御出掛なさい 勿々頓首

十月十九日

金

奇瓢先生

一九九

十月二十二日

午後零時二十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 小石川區原町十六番地鹽谷方

寺田寅彦へ〔繪はがき 自筆水彩畫 赤衣の少女白き鷄に餌を與へつゝあり、背景に

木立と碧空〕

君がくると近頃は客が居る、君は勉強がいやになつた時に人を襲撃するのだからたまには此位な事があつてもよろしいと思ふ
此繪はまづいが色が奇麗だと思ふどうだ

二〇〇

十月二十四日 月 午後三時五十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 下谷區谷中清水町五番地橋口
頁へ「繪はがき 自筆水彩畫 裸體の女の半身、背景は森」

君の句の見付所は皆艶麗なる點なり君は奇麗な事が數奇と思ふ。句々皆前回よりは大進歩なり可賀、不産女の句だけは俗なり故らなり、水牛の句新らしくて面白し、濡小袖の句配合物はよけれど鏡臺の上に小袖あるは如何草庵の句よろし但し少々陳腐也、緋の袴の句はもつるやの四字わろし意匠はよろし、此等の趣味さへあれば發句は何でもなしやり給へ

二十四日

二〇一

十月二十五日 火 午後三時五十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 小石川區原町十六番地鹽谷方
寺田寅彦へ「繪はがき 自筆水彩畫」

此畫は昨日も一牧書いて橋口に送つた兩方共同様の出来である
後世の好事家一方を見て贋物といふ重野成齋なるものあり兩方共うそなりといふ^原漱石といふ發

句を作る人は居るが端書に畫をかけた漱石とは別人である云々

二〇二

十一月六日 日 午前零時(以下不明) 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 下谷區谷中清水町五番地橋口
頁へ「繪はがき 自筆水彩畫 寺の屋根、右手に高く杉木立、左上に圓き月、月と杉木立との間に句あり」

御示しの句趣好は皆取り所あり句法は未だ調はざるもあり、「城高し」の句難なし但し大なる景色也先日のは大に異なれり一番槍の句に季なし雜の句とすべきか今少し調子をととのへ度ものなり、夜寒の篝火といふより夜寒に篝かなとする方可ならんか萩たるは何となく調はず姫瓜垣といふもの小生は知らず、東屋には句法調へり然し「しのぐ」といふは夕立の如き感あり且東屋のある菊島ならば雨に逢ふとき母家に歸り得るなるべし實際にあらず妄評多罪

〔繪の中に〕

名月や杉に更けたる東大寺

君の繪端書を散らしにしてワクに入れんと思ふ金ピカノ物を下さい先達ての梅の青軸に雀がまだあるなら頂戴

二〇三

十一月七日 月 午後五時十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 小石川區原町十六番地鹽谷方寺田

寅彦へ〔繪はがき 自筆水彩畫〕

昨夜は御馳走になりました

今度は本郷座をおごる積りですか

蒲團を干してランプを明るくして長烟管でボン／＼やれば天下は太平と御承知あるべし

七日

金

二〇四

十一月十一日 金 午後七時二十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 下谷區谷中清水町五番地橋口 貢へ〔繪はがき 自筆水彩畫〕

先達て頂戴したる繪端書黒ん坊の圖は傑作に御座候珍藏可致候、是はまづい方の傑作故御挨拶として進呈致候

金

二〇五

十一月十一日 金 午後七時二十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 麻布區三河臺町島津男爵邸内 野間眞綱へ

拜啓金澤地方小松とか申す所に年俸九百圓英語教頭の口あり行く人なきや淡路の先生は熊谷へ移りたるや山口の美禰に口をかけて見んと思ふ如何其他ゆき度人あらば教へ玉へ

それから又寶亭へ行きましたボアソングラタンの方は如何

十一月十一日

金

網 様

二〇六

十一月十八日 金 午後五時十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 小石川區原町十六番地鹽谷方寺 田寅彦へ〔繪はがき 自筆水彩畫〕

先達は晚餐會の爲め失敬然し僕のフロックコートの出立を見ろといふのに見ず歸るのも失敬だ

本郷六丁目二十五番地藪中といふ女髮結の隣りに新らしき貸二階あり一寸見て御覽

金 公

寅 さん

二〇七

十二月一日 木 午前零時(以下不明) 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 下谷區谷中清水町五番地橋口 貢へ〔繪はがき 自筆水彩畫〕

又々名作を頂戴難有候額を作らうと思つてまだ作らない
是はミレの尼の鸚鵡を勝手に寫したらこんな頓ちんかんなものになつたのです

二〇八

十二月七日 水 午前十一時十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 下谷區谷中清水町五番地橋口貢

へ〔繪はがき 自筆水彩畫〕

先達ては難有^二牧共洒落て居る

是は例の如く亂暴な畫なり然し傑作とほめてくれれば結構也

二〇九

十二月十二日 月 午前十一時十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 下谷區谷中清水町五番地橋口

貢へ〔繪はがき 自筆水彩畫〕

近頃多忙で畫をかくひまがない。皆舊作です。先達ての上野の冬枯は意匠は頗る面白い。鴉に少々文句をつけたい。

二一〇

十二月十九日 月 午前十一時十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 麻布區三河臺町烏津男爵邸内

野間眞綱へ〔はがき〕

端書と雑誌と正に落手候今日は本屋の主人と皆川と若月の二氏参り候倫敦塔は未だ脱稿せず然しものになります御一覽の上是非ほめて下さい雑誌の批評は當つてるのか間違つてるのか分らな

い僕の事が雑誌に出る度に子規が引き合に出るのは妙だとにかく二代目小泉にもなれさうもない
スピフトにもなれさうにない僕の様な善人をシニツクの様にかくのはよくありませんよねえ君
昨夜の牛乳は非常にうまかつた僕は是から牛乳生活をやつて横隔膜の呼吸法で大文學者にな
るつもりだ

二一一

十二月二十二日 木 午前零時(以下不明) 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 麻布區三河臺町烏津男爵

邸内野間眞綱へ

一昨夜橋口の宅へ招かれて雁を食つた雁は生れて始めて食つて見た頗る甘ひ雁の羹は橋口の家
に限る

去る本屋が大坂の蕪漬を送ると云ふて来た

倫敦塔は出来上つたあとから讀んで見ると面白くも何ともない先便は取り消す

浦島を讀んだある部分はうまいある部分はまづい残る部分はうまくもまづくもない

十二月二十一日〔封筒の裏に〕

金

眞 綱 様

只今手塚がきた不相變ひげが長い

今日は是から攝津大掾をきまに行く、連中の中に女が二人居る

二二二

十二月二十二日 木 午後三時五十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 下谷區谷中清水町五番地橋

口貢へ〔繪はがき 自筆水彩畫 池、緑の土手、土手の上左端に立木一本、垣、土手の向ふに赤き屋根見ゆ、鷺鳥が群がつて土手を池の中へ馳け下りる〕

雁の御馳走は大變うまかつた此度はこゝに書いてある様な奴を一疋しめて食ひたい
空也堂の菓子は頗る洒落たものですな

二二三

十二月三十一日 土 使ひ持參 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 本郷區駒込西片町十番地畔柳都太郎へ

昨日は失敬其節申上た大坂の蕪漬乍輕少御目にかけて候間御風味可被下候多いと石を壓す方があ
ちが變らんでよいさうだけれど少し許りだから夫にも及ばぬ事と存候
蕪を送ればとてかぶを食つて新年に羊にでもなりたまへといふ謎ぢやない度々櫻坊の御馳走に
なるから御返禮と思つて差上りますのですよ

蕪居士

櫻坊 大人

座下

明治三十八年

二二四

一月一日 日 午後(以下不明) 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 麻布區三河臺町島津男爵邸内野間眞

綱へ

先達ての龍土軒主人の歌は頗る面白いから虚子の所へ送つた虚子曰く以て二月のほとゝぎすを
飾るに足ると但し雁の肉我に何ぞは何か改めたい皆川は逗子へ行つて氣に喰はんとかで房州へ
行つた當日来て洋書を二冊僕に托して君にやつてくれろといひ置いて行つた一冊はハーンの怪談
で御蔭で之を通讀した猫傳をほめてくれて難有いほめられると増長して續篇續々篇杯をかくきに
なる實は作者自身は少々鼻について厭氣になつて居る所だ讀んでもちつとも面白くない陳腐な戀
人の顔を見る如く毫も感じが乗らない。小野小町は僕も驚ろいたね。萬事控目が難有い 實は出
鱈張る學問も精力も無いのだから已を得ざる譯だ猫傳中の美學者は無論大塚の事ではない大塚は
だれが見てもあんな人ぢやない。然し當人は氣をまはしてさう思ふかも知れぬがそれは一向構は
ない。主人も僕とすれば僕他とすれば他どうでもなる。兎に角自分のあらが一番かき易くて當り
障りがなくてよいと思ふ。人が悪口を叩かぬ先に自分で悪口を叩いて置く方が洒落てるぢやあり

ませんか

昨日は傳四が来る寅彦が来る四方太が来る。晩に眼がさめたら百八の鐘をつく所であつた昔しなら感慨云々の場だが何ともない只聞いて居たら寐て仕舞つた。元日も好い天氣で結構だ。今日は何だかシルクハットが被つて見たいから一つ往來を驚かしてやらうかと思ふ 左様奈良

元日

金

眞綱様

二一五

一月二日 月 午前七時五十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 麻布區三河臺町島津男爵邸内野間

眞綱へ〔はがき〕

今日はなぜ上らずに歸つた。傳四が来て雑煮を食はせろといふから一所に晚餐を食つた。君も雑煮を食ひに来給へ可成晩食の時が落付いてよい

本郷駒込千駄木町五七

一日夜

夏目金之助

二一六

一月二日 月 午前七時五十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 小石川區原町十六番地鹽谷方寺田

寅彦へ〔はがき〕

君年始をやめて雑煮を食ひにこぬか可成晩食の際が落付いてよい。

本郷駒込千駄木町五七

夏目金之助

二一七

一月二日 月 午後五時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 下谷區谷中清水町五番地橋口貢へ〔繪は

がき 自筆水彩畫 左端下に灰吹、灰吹から蛇が二匹出て棒を形成る、棒の中には男が

机に頬杖をつく、机の上には硯と筆〕

灰吹から蛇が出ました一寸驚かせるね

二一八

一月四日 水 午後五時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 麻布區三河臺町島津男爵邸内野間眞綱へ

君がくれた猪肉で傳四を御馳走し。昨夜は又虚子四方太橋口兄弟を御馳走した昨夜は大分面白かつた是も君の御蔭と敢て一書を奉呈して感謝の意を表するいづれ八日過になつたら來給へ皆川と三人で雑煮でも食ふかね。今朝小野君が來て英米名家詩抄といふのを一部くれた。

人のところへ手紙をよこすに名宛人の名前をかいて自分は姓丈かくなつてえのは失敬だよ。自分の事は大抵の場合には〔眞綱〕とばかりかいて姓もかゝないのが禮義である。先方を尊敬し様とする場合には向ふの姓丈かいて名を略す或は其人の號をかく。自分の號を書くのは矢張失禮に

なる

第一號

一月四日

夏目様

眞網

合場の敬尊

第二號

一月四日

夏目金之助様

野間眞網

合場の等同

一月四日

金之助様

眞網

は又合場の意懇極
合場るやへ下目

是が昔しの禮義であります

一月四日

眞網様

金之助

二一九

一月四日 水 午後五時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 本郷區本郷六丁目二十五番地藪中方野村

傳四へ

昨夜は虚子と四方太と橋口兄弟を呼んで猪の雜煮を食はした。君はもう二返食つて居るから呼ばなかつた。虚子と四方太に君の文章を見せたら四方太曰く是は寫生文ぢやない三十七年十二月三十一日の雜錄だと傳四君にさう傳へてやり玉へと僕は此一言に避易してほとゝぎすへ出せとも云はなかつた 草々不

一月四日

傳四兄

金

二一〇

一月六日 金 午後零時三十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 熊本縣球磨郡湯前村井上藤太郎へ
新年の御慶目出度申納候白扇會々報每號御寄贈にあづかり奉謝候拙稿屢御求めの處いつも御斷りのみ致甚だ濟まざる儀と存候間今日は無理やりに妙なものを作り供貴覽候御一笑可被下候何だ

か譯のわからぬものに候へば御取捨は御隨意に候 以上

一月五日

夏目金之助

井上微笑様

元日や歌を咏むべき顔ならず

胃弱の腹に三椀の餅

火燧から覗く小路の靜にて

瓶に活けたる梅も春なり

山妻の淡き浮世と思ふらん

厨の方で根深切る音

専念にこゝろ爛ぐは女の童

黄なものを溶けて鍋に珠ちる

じと鳴りて羊の肉の煙る門

ダンテに似たる屑買が来る

二二一

一月十日 火 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 本郷區駒込迫分町三十番地奥井館皆川正禧へ

拜啓只今野間眞綱君参り雉子一羽もらひ候間ひる飯をくひに御出被下度右御案内申上候 以上

一月十日

夏目金之助

皆川様

貴下

二二三

一月十五日 日 午後六時四十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 麻布區三河臺町島津男爵邸内野

間眞綱へ〔繪はがき 自筆水彩畫〕

其後何にも出来ないかね。どうも君の作は着想は面白い所があるが言葉が平凡な所が多い今一といきと云ふ處で氣がぬける。端唄でも俳體詩でも澤山作つて御送りなさい。

猫の續篇先達脱稿虚子に交付したり見て文句をいつて下さい。

今日頃から休業前の僕に返つた様だ。

鴛鴦博士とは艶な名だ。

此繪端書は舊作です。

昔し大變な罪惡を冒して其後悉皆忘却して居たのを枕元の壁に掲示の様に張りつけられて大閉口をした夢を見た。何でも其罪惡は人殺しか何かした事であつた。

先達の雉子は大變うまかつた。

二二三

一月十八日 水 午後二時四十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 下谷區谷中清水町五番地橋口清

猫の畫をかいて被下よし難有候。
可成面白い奴を澤山かいて下さい。
鬼と佛の繪端書は上出来と存候
〔繪の肩に〕

あるは鬼、あるは佛となる身なり
浮世の風の變るたんびに

二二四

一月十九日 午後五時十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 麻布區三河臺町烏津男爵邸内野間眞綱へ

〔繪はがき 自筆水彩畫〕

君がほめて呉れたので倫敦塔が急にうまくなつた心持ちがする。然し世に稀なる文學者は少々驚ろいたね。何しろ此繪端書を以て御禮を申し上げねばならぬ。
支那の織物は僕がもらふよ。僕は太抵のものもらふ主義だ。
時間さへあれば僕も稀世の第^一文豪になるのだが。時が乏しいので、ならず死んで仕舞ふのは残念だか幸福だか一寸自分には分らない

二二五

一月二十日 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 本郷區駒込追分町奥井館皆川正禧へ

倫敦塔の御批評難有候實は稿を草する折は多少逆上の氣味にて自分でも面白いと思候處脱稿の上通讀したらいやな處が多く且今一いきと云ふ所で氣が抜けて居る様で我ながらいやに成つて居たのです。然る所本日奇飄先生から手紙をくれて大變ほめてくれたので又少し色氣が出た處へ君の端書が来たものだから當人大得意で以前の逆上に戻りさうに成つて來ました。

ダンテの句は仰せの如く故意とらしく候。あれはあまり句が長すぎる爲もあります何だか知つて居る事を氣取つて無理に挿入した様な感じがある。少し氣ざと思ふ。あの句を二句位につめれば色彩として存してもよからうと思ふ如何。番兵を褒めてくれ手はないと思つて居たら飛んだ處から喝采が出て大に面目を施こす譯です。首斬りの段は一番面白いかね。僕自身はあすこが一番よく書けたとも思つて居らん。

倫敦塔で君を免職させるのは御氣の毒だから當分君を寐過させる様なものはかゝない積りに候。二月のほとゞぎすには猫の續きが出ます是は健康に害のある程のものではないから讀んで下さい。先は御禮迄 勿々頓首

一月二十日

皆川兄

座下

金

四人が舟から上る所はわざと突飛にかいて驚かして見たのです。あれは突飛な所を買つてもらひたい

二二六

一月二十三日 月 午後五時十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 麻布區三河臺町烏津男爵邸内野
間真綱へ〔繪はがき 自筆水彩畫〕

織物到着難有候。あれは書齋の小机の上に敷て見たら丁度うまく一杯になつた。誂へた様で結構上等なり。あれは西洋物で全く支那物ではないと思ふ。I came up hand over fist, doing my five knotsと云ふのは熟語ではあるまい。拳を握つてと云ふ意味ではないか「ノット」と云ふのはコブが出来るから云ふのではないか doingとはロシアヘルト云フ意味ではないか、猶よく考へて見様。

御禮旁御返事迄 勿々

Hand over fist へ片方の拳を片方の手でつゝむ意味ではなきか

二二七

一月二十三日 月 午後五時十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 本郷區追分町奥井館皆川正壽へ
〔繪はがき 自筆水彩畫〕

Corettiといふ字存し申さず Correntiト云フ以太利の政治家兼志士あれども綴が違ふ様なり。僕の事を評するときは誰でも必ず上田君を引合に出す上田君は迷惑なるべし。あまり讀賣で學者の様に吹聴されると大學の講堂で講義がやりにくゝて困ります。白鳥子は一而識なき人なり先

達て尋ねてくれた時は歌舞伎座へ行つて留守であつた。近い身より杯より却つて知らぬ他人の方が時々は買被つてくれるものに候。

君がほめたから倫敦塔を澤山書いて君を免職させ様と思ふがひまがなくてかけない。

二二八

一月二十三日 月 午後五時十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 小石川區原町十六番地鹽谷方寺
田寅彦へ〔繪はがき 自筆水彩畫 僅に紅味を帯びたる淡黄にて、頭髮口髭頬髯頸鬚の半白なる、鼻眼鏡かけて面長なる、西洋人めく肖像を描く〕

ぼろを買ひ、ぼろを食い而る後尻からぼろを出せばあとは晴々して遍照金剛の身となる。大に御奮發可然候。必ず〱小生の様にぼろの内証せぬ様御活動相成度候。是は君の御親父が財布を首にかけて上京する圖なり

二二九

一月三十日 月 午後五時二十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 小石川區原町十六番地鹽谷方寺
田寅彦へ〔繪はがき 自筆水彩畫〕

傑作到着鹿の畫は倭習を帯ぶ。砂漠の圖の方思ひ切つてよし但色わろし。文章は明星派の系統を引く。いやはや。夫より飯田河岸の事もかけばいゝ

二三〇

二月二日 木 午後六時四十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 仙臺市大町三丁目土井林吉へ〔繪はがき 自筆水彩畫〕

〔上段に〕

君は僕の氣箴に驚くと云ふが僕は君の健筆に驚ろいて居る。此頃の文藝の雜誌に君の詩が載つて居ない事はない。何しろ大にやり玉へ筆硯萬歳可賀可賀し

昨夜は雪 僕の前の家から火事が出て夜に焼けて仕舞つた。今朝起きて始めて知つた。雪中の火事は詩題になると思ふ。それを知らずに寐て居るのも詩になると思ふ

〔下段に〕

自分の肖像をかいいたらこんなものが出來た何だが影が薄い肺病患者の様だ。君が僕を鼓舞してくれるから今にもつと肥つた所をかい御目にかける現在の顔は此位だ

二三一

二月七日 火 午前九時五十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 小石川區原町十六番地鹽谷方寺田寅彦へ〔繪はがき 表の署名には「千駄木 力學士」とあり〕

漱石が熊本で死んだら熊本の漱石で。漱石が英國で死んだら英國の漱石である。漱石が千駄木で死ねば又千駄木の漱石で終る。今日迄生き延びたから色々の漱石を諸君に御目にかける事が出

來た。是から十年後には又十年後の漱石が出来る。俗人は知らず漱石は一箇の頑塊なり變化せずと思ふ。此故に彼等は皆失敗す。漱石を知らんとせば彼等自らを知らざる可らず 這般の理を解するものは寅彦先生のみ

恐惶謹言

Dynamic Law

on

Mr. K. Natsume.

二三二

二月九日 木 午後一時二十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 芝區琴平町二番地朝陽館野間眞綱

手紙を度々難有う無精だからいつも返事を出さない先達は火傷をしたさうだ其時の俳體詩は一寸面白さうぢやないか一寸行き度いがつい色々ごた／＼して居るものだから失敬して居る。今日から三日間學校をやすんだよ。別段病氣でもないがまづ病氣の心持で居るそれで萬事自ら病人風に所置する積りで晝は牛乳と玉子で間に合せたら三時頃腹がへつて驚いた。矢張無病だと見えるまぼろしの楯といふ文章をかゝうと思つて大體趣向は出來たがうまく行きさうにない。僕は贅澤である字はいや此句はいやと思ふものだから容易に出來ん苦しい。今日は朝からかく管の處を色色雑用で晩に一ページ許りかいたらどうも氣に入らんからやめた。出來上つたら見て批評しても

らほう

傳四の二階の男はまだ見ないみんな何でも蚊でも書いて／＼世間を壓倒すればいゝ君も何でもいゝからやり給へ。

皆川君は倫敦塔はほめてくれるが猫は宗旨違ひだからだめだらう。猫の材料も出来たから又あとをかきたいが閑がないから四月位にのせる事に仕様と思ふ 左様なら

二月八日夜十時半

金

眞 綱 様

二二三

二月十二日

午後一時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 下谷區谷中清水町五番地橋口清へ〔繪はがき 自筆水彩畫〕

ホト、ギスの挿畫はうまいものに候御蔭で猫も面目を施こし候。バルザック、トチメンボー皆一癖ある畫と存候。外の雜誌にゴロ／＼轉つては居らず候。是でなくては自分の畫とは申されません。孔雀の線も一風有之候。足はことによりしく候。あれは北齋のかいた足の様に存候。

僕の文もうまいが橋口君の畫の方がうまい様だ

右御禮迄 勿々

昨日は失敬。

二月十二日

金

浅井の口繪畫の百姓の足はうまいと思ふ如何。君の裏畫の馬の首がねぢ切れさうに思ふが如何

二三四

二月十三日

午後五時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 小石川區原町十六番地鹽谷方寺田寅彦へ〔繪はがき 自筆水彩畫〕

浅嘉町へ花を買に行つた留守に寺田さんが御出になつたといふから、もう病氣はよいのかと聞くといふと云ふ。なんだもう直つたのか馬鹿な奴だと云つてやつたよ。

浅井の口繪の百姓の足は非常に甘いと思ふ。橋口の挿畫は特長がある無暗に他の雜誌杯には載つて居ない。あれは慥かに橋口の畫で他人の畫ではない。僕は非常に感服した。僕の文章よりもうまい。どうかあれを新聞かなにかで評してやつてくれゝばよい。然し僕の猫傳もうまいなあ。天下の一品だ。十錢均一位な所にはあたる。……時に續々篇には寒月君に又大役をたのむ積りだよ

二三五

二月十三日

午後五時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 本郷區駒込追分町奥井館皆川正昭へ〔繪はがき 自筆水彩畫〕

君が大々的贊辭を得て猫も急に鼻息が荒くなつた様に見受候。續篇もかき度〔い〕杯と申居候。

いづれ四月はホト、ギスが壹百號ださうですから其時迄に椽側で趣向を考へて置くと申す話です。日本文壇の偉觀は少々恐縮す〔る〕から御返却したいと申します。皆川さんは倫敦塔の様なものではなくては御氣に入らないかと思つたら吾輩の様なものも分るえらいと猫は大喜悅に御座候。同じ駒込区内にかう云ふ知己があれば町内の奴が野良と云はうが馬鹿猫と申さうが構ふ事はないと満足の體に見えます。此猫は向三軒兩隣の奴等が大嫌ださうです

二三六

二月十六日 木 午後五時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 本郷區本郷六丁目二十五番地藪中方野村傳四へ

村傳四へ (はがき)

只今學校の歸りに七人を買つて二階の男をよんだ。サラノ、トよくかいてある。強いて非難をすると一篇の山がない。まともりがわるい様だ。然し中々名作だ。大にやり玉へ。

二三七

二月十七日 金 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 横濱市元濱町一丁目一番地渡邊和太郎へ

其後御無沙汰をしました。御變りもない事と思ひます。新年は御禮狀を頂戴したけれど今年はどこへも略したから失禮をしました。

先達てアメリカの傳ちやんがホト、ギス社へ宛て、態々美しい繪端書を送つてくれました。私は此繪葉がきが大ききで机の上へ置いて眺めて居ます。禮をいひ度が所が分らないからあなたが

此次手紙を出す時右の事をかいて禮をいつてくれませんか。これ丈の御願です 左様なら

二月十七日

金

渡邊和 三郎様

二三八

二月二十二日 水 午後十一時十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 本郷區本郷六丁目二十五番地

藪中方野村傳四へ

君が虚子の所へ談判に出懸けたのは一寸驚いた虚子が既に廣告をした杯と斷つたのも驚いた。廣告杯はどこに出て居るかね。切角の御依頼だから七人へ何か書いて出してもらひ度が色々事もあるし少しは本もよみ度いからうまく時^原日内に出来るかどうか受合ふ譯にもゆかね君から小山内君へさう話して置いて呉れ玉へ

先日寺田が七人を借りて行つて左の端書をよこしたから一寸報知をする

「○村○四さんの「二階の男」面白く拜見しました中々うまいものです。格別の山もなく谷もないかわりに厭味もなく近來兎角溜飲につかへる文壇には大に歓迎すべき一服の清涼劑であると考へます猫傳以來の出色の文字感服しました猶進んで二階の女か何かかいて貰ひ度者です。さうすると私も何か一つ「床下の狸」でも書く。洛陽の紙價が十四パーセントあがる愉快ぢやありませんか……」

僕も猫のつゞきを書かうと思ひながらついで筆を下さない今度は實業家の妻君の事をかくよ

左様なら

二月二十二日

野村傳先生

座下

夏目金

二二九

二月二十三日 木 午後十一時十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 芝區琴平町二番地朝陽館野間

眞綱へ〔はがき〕

明後二十五日土曜日食牛會を催ふす 鍋一つ、食ふもの曰く奇瓢曰く傳四曰く眞拆曰く虚子曰く四方太曰く寅彦曰く漱石。午後五時半迄に御來會希望致候

二十三日夜

二四〇

二月二十三日 木 午後十一時十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 本郷區本郷六丁目二十五番地

藪中方野村傳四へ〔はがき〕

明後二十五日土曜日食牛會を催ふす、鍋一つ、食ふもの曰く傳四曰く奇瓢曰く眞拆曰く寅彦曰く虚子曰く四方太曰く漱石。午後五時半迄に御來會を乞ふ牛の外に何の食ふものなし

二十三日夜

二四一

三月四日 土 午前九時十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 芝區琴平町二番地朝陽館野間眞綱へ

〔はがき〕

盾のうた面白く出来候最後の二句は不賛成に候。何とか改め度候。傳四丸一日をものし候よし。明星と七人は喧嘩をはじめの由。柳村宅で文士會合の節白鳥來り候よし

栗原古城といふ先生も其席上にありし由白鳥をひやかしたかどうだかあやしきもの也

二四二

三月五日 日 午後六時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 本郷區本郷六丁目二十五番地藪中方野村

傳四へ

本日野間の家から君の原稿を二つ郵便で送つて來たから只今拜見したが満一日より月給日の方が餘程うまく出来て居る中々面白い。満一日はゴチャ／＼だ。同じ様な事が必要もないのに無暗に重複して出て來るあれをものにするなら諸々を削減しなくてはいかん。虚子が二三日中に來ると云ふから來たら意見を聞いて見やう

君が一月のホト、ギスを虚子にもらう筈にしたさうだが都合がつくなら僕にくれ玉へ深田文學士からたのまれたのだよ。猫傳は脱稿した。出たら読んで下さい

二月四日
傳 四 先生

二四三

三月十一日 土 午前零時十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 本郷區駒込曙町十一番地大谷正信

拜呈明星御親切に御送被下難有存候早速教師の一日と申すのを拜讀致候前半教科書の譯を挿ま
れ候は御趣向に候へども小生には別段の感も無之只後半書齋中の出來事より食事、及び晚餐後の
御相手の邊は甚だ興味を以て讀了致候小生の事を態々御推服の様に御記載被下候は難有仕合に候
へども少々赤面致候人間に敬慕杯と申すは知らぬ昔に遠方から見た時のみの迷かと存候釋迦も孔
子も十年も同棲致候は凡庸の匹夫なるべきかと存候。是よりは再々御光來の上敬慕する。漱石を
うんあの漱石がといふ様に變化する迄御交際被下度候。敬慕とは遠慮と評判と未知とが重なり合
ふとき發生する化物に候御高見如何に候や御禮旁妄言かきつらね申候御海恕被下度候 早々頓首

三月十日

金之助

繞石學兄

座下

二四四

三月十一日 土 午前零時十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 本郷區本郷六丁目二十五番地數中
方野村傳四へ

昨夜キヨ子が來て君の月給日を見せたら面白いといった但し前の方が餘慶な様だと云ふた。満
一日は時間がなくてよむひまがなかつた。然し虚子は兩方とも持つて行つた。虚子が猫をよむ僕
がきく二人でげら／＼笑つて御蔭で腹がへつた。

先〔は〕御報知迄 勿々

三月十日

金

傳 四 兄

妻君が夫の手をあたくめる所は先達てはいけぬといったが昨夜傍聽した所では大に振つて居
る。毫も厭味も乙な色氣もなく出來て居る大に佳也。結末の「此事件は此で結了した」といふ
意味の語は尤もうまい。ちつとも洒落ても氣取つても居らん。極め「て」平凡極めて眞面目な裏
に大に奇抜なとぼけた様な馬鹿にした様な所がある。結構です。僕は全體からいふと二階の男
より月給日の方がよいかんじがする

二四五

三月十三日 月 午後三時十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 芝區琴平町二番地朝陽館野間眞綱

へ〔はがき〕

繪端書頂戴致候寺田の宿所は小石川區原町鹽谷方に候哲學館の北方なり。寅彦は今日も來て文

章を朗讀してゆきました。

二四六

三月十四日 火 午前零時十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 本郷區本郷六丁目二十五番地藪中
方野村傳四へ

本日七人を發行所から送つてくれたから君が小山内君に逢つたらよろしく禮をいつてくれ玉へ
疵を探せばみんなあるだらうが皆僕よりうまい所がある後進の人が勢よくやるのを見て居るのは
甚だ愉快だ。松浦の英詩杯も感心なものだ。ホト、ギスを見たかね。四方太の稻毛をもう一返よ
んで御覽何の奇もないが嫌味がない虚子の石棺は奇な代りにどこか不自然で嫌味がある。今の
はとかくあゝ云ふものをほめる。僕の倫敦塔をほめてくれるのも全くその爲である。巴の助とい
ふ人のコマイ釣は面白い末段杯はことに振つて居る。小泉先生の文をよむ様だ。卷末の百號廣告
は少々山師的だね。僕もあの位かつがれゝば澤山だ。尤もあれで人が讀んでくれなければ僕の名
聲も地に墜ちる譯だなあ！

世間は存外静かだのに虚子一人が騒いで僕を吹聴して居る様な氣色だハ、、、

十四日

金

傳 四 兄

寅彦の團栗はちよつと面白く出來て居る

二四七

四月一日 土 午後六時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 芝區琴平町二番地朝陽館野間眞綱へ
昨日は失敬

日向のくに都の城にて文學士一名千圓にて雇たき由心當りはなきや可成は英文學科の人を周旋
したしと思ふ

尤も首席にて教育に經驗ある人を要する由也

四月一日

金

眞 綱 様

〔封筒の裏に〕

明日天氣無覺束

二四八

四月二日 日 午前十一時五十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 本郷區本郷六丁目二十五番地藪
中野村傳四へ

集簡書

ホト、ギスに出て居る碧梧桐の五形花といふのと、八千代さんの鶏鳴といふのを比較して御覽。
五形花は渾然としてすこしも痕迹がない。作つたものとは思はれない。強いて人の感を挑撥しや
う杯といふ拙な巧が見えない。あれをまづかいたら毒々しいやなものになるにきまつて居る。

趣味の正邪は此二篇を對照すれば分ると思ふ。才のある人が邪道に入つて居るのは惜しいものだ。鏡花の銀短冊といふのを讀んだ。不自然を極め、ヒネクレを盡し、執拗の天才をのこりなく發揮して居る。鏡花が解脱すれば日本一の文學者であるに惜しいものだ。文章も警句が非常に多いと同時に凝り過ぎた。變挺な一風のハイカラがつた所が非常に多い。玉だらけ疵だらけな文章だ。僕杯のいふ事は門外漢の言葉として彼等は首肯しないだらう。然し僕はあの人々の才が悪い方へ向いて居るのを非常に残念に思ふばかりで一才君に洩らすのさ。君のは正路だから結構だ。此度のホト、ギスに出て居るのは皆面白い。虚子も、碧梧桐も、四方太、寒月先生も、君も、投稿のカルタ會もみんな面白い。ホト、ギス萬歳だ。

四月二日

金

傳 四 先生

二四九

四月四日 火

午後三時五十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 本郷區本郷六丁目二十五番地藪中

方野村傳四へ〔はがき〕

傳四先生足下。昨日虚子が来て今月末に文章會をやりたいと云ふから引きうけて拙宅で催ふ事にした。君も何か持つて御出席下さい。

四月四日

二五〇

四月六日 木

午前九時十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 本郷區本郷六丁目二十五番地藪中

野村傳四へ〔はがき〕

君の丸一日を虚子が送つて来て曰く傳四君の文章一應御返草申上置候勢猛烈當るべからざる感有之候とある。原稿は君が来る迄僕が保管して居る

四月五日

二五一

四月十日 月

午後一時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 本郷區駒込曙町十一番地大谷正信へ

拜啓昨日は御光來被下候處生憎他出失敬此事に御座候 目下小生知る人の中にて地方行志願の人は左の如くに候

一昨年卒業副島松一今四月迄宮崎中學にて教頭をつとめ居候人此男は至急片方ねばならぬ人に御座候

同年卒業撰科生堀川三四郎此人は今年四月迄宮城縣角田に奉職只今他の口搜索中。小生より廣島在の中學へ紹介中なれど成否分りかね居候

第三は目下長野縣長野中學に奉職中の日野健四郎氏はは矢張同年の卒業に候が郷里が香川縣故老母を迎ふる爲今少し便宜の地に轉任致し度希望に候

英文にては右三名文承知致居候幸に大兄の御周旋にてどこかへ片づく事が出来れば幸甚に候一
骨御折被下度懇願致候 勿々

四月十日

金

大谷賢兄

座下

昨日は四方太が来て一所に上野をぶらつきました

二五二

四月十三日 木 午前十時(以下不明) 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 本郷區曙町森巻吉へ

拜啓先日は失敬君のくれた菓子に僕が大概くつて仕舞つた。小供もたべました。

君の號の事を考へても中々面白い奴は出ない。君の名は巻吉だから巻といふ字を二字にしたら
よからうと思ふ。魔奇。馬奇。麻期。磨綺。等色々出来候。内海月杖といふ人は月末に困るか
ら月杖としたさうだ。嵩山堂といふ書店は書物が高いからといふて徂徠がつけてやつたと云ふ。
僕の號は蒙求にもある極めて俗な出處でいやになつて居るが仕方がないから用いて居る。

僕も君の様に泥棒に這入られた綿入がなくて拾で少々寒いです。

先は閑用迄 勿々頓首

四月十三日

金之助

森巻吉様

二五三

四月十六日 日 午後一時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 神田區五軒町十六番地飯島鶯郎へ〔繪
はがき〕

猫の繪端書ありがたく頂戴致候

四月十六日

漱石

二五四

四月二十三日 日 午前十時四十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 芝區琴平町二番地朝陽館野間
眞綱へ〔はがき〕

繪端書拜見。来る二十九日土曜日文章會を開き候につき名文御携帯の上御出席願上候(但午後
五時より)

二五五

四月二十三日 日 午前十時四十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 本郷區本郷六丁目二十五番地
藪中方野村傳四へ〔はがき〕

只今君の名文三篇を拜誦しました。皆々傑作結構です。つぎの土曜の午後五時から文章會を開
くから名文御携帯の上御來會願上候

四月二十七日 木 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 若杉三郎へ

御手紙拜見仕候此方も存外の御無沙汰御ゆるし下され度候拙作御懇篤なる御批評を蒙り難有存候大體に於て大兄の御考は正鵠を得たるものと存候盾は禮服塔は袴猫は平常服の喩尤も得吾意申候。盾の廣告は出鱈目ですよ。あれが出た時天下は安泰だのに虚子が獨りで騒いで居ると笑つた位です。先達て新小説に出た嬉劇は拜見しました。面白いと思ひます充分此方面で御盡力を願ひたいと思ひます。君の兄弟分は皆片づきました。みんなが片づくと僕も安心する様な心持です。君は結婚したさうですね。一寸御祝辭を申し上げ様と思つて遂々忘れて仕舞ひましたよ。

モリエルは君の繩張内だから僕より君の方が精しい譯ですが御尋ねの *La Comédie des Fâcheux* はね *The Comedy of the Boreds* といふのでせう。ボアと云ふのは話しをしても面白くない欠伸がしたくなる様な厄介な御客さんや人間を云ひます。又は積極的に出しや張つて、うるさくて堪らんといふ様な人間も云ひます。夫から自分が世の中に厭き果て、酒も面白くない女も妙でない何もかも乙でげえせん杯と願を撫る様になつた心の状態もボアと云ひます。モリエルのは人間の意味の方でうるさい厄介者が澤山出て来て其が爲に迷惑をするといふ筋ぢやありませんか。たとへば君が新婚早々僕が君の家へ行つて五時間も六時間もくだらぬ事を話して居ると僕は君等御夫婦にとつて大ボアになる譯でせう。先此位な邊で御免蒙りますよ。モリエルに關する書籍は一向知りません其内見當つたら書いて上げます。さし當り一つ見付けましたがくだらぬものらしいですよ。

い

四月二十七日

若杉君

金之助

四月三十日 日 午後一時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 芝區琴平町二番地朝陽館野間眞綱へ

昨夜は五六人集つて十一時頃迄談話をしました虚子は短篇を作つて來た虚子一流の面白い處がある僕は琴のそら音と云ふ小説を讀んだ七人に出す積だから讀んでくれ給へ。

島津家の若様が病氣で君が看病に行く由嘸御心配の事だらう。休學と事が極つても妹さんの方を教へて居れば當分困る事もないだらうと思ふがどうだらうさう云ふ談判にしたら約束期限内は何とかなりさうなものだと考へるがどうだらう

昨日君は野村の所迄行つたさうだから或はくるかも知れんと思つて居たいづれそちらの方で閑が出来たら來給へ

四月三十日

眞綱様

金

五月九日 火 午前九時(以下不明) 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 愛媛縣温泉郡今出町村上半太

郎へ

其後は存外の御無音奉謝候先達は御用にて東京向迄御上りの處色々用事の爲め御面晤の機を得ず遺憾此事に存候拙文につき御批評たまはり難有拜讀致候あんなものにては知人杯よりほめられりと愉快なものに候小生は教師なれど教師として成功するよりはへボ文學者として世に立つ方が性に合ふかと存候につき是からは此方面にて一奮發仕る積に候然し何しろ本職の餘暇にやる事故大したものも不出來只御笑ひ草のみに候。俳句は近頃頓と作らず時々短冊杯をよこして書けといふ注文杯参り候節は困却致候。松山に居た頃の事を思ふとまるで夢の様に候一度は又遊びに行き度感も有之候道後の湯は實にうれしきものに候。筆硯の中常に俗塵を混じ起居常に倉皇寧處に違なき有様に候御惘然可被下候先は御返事まで 匆々頓首

五月八日

金

霽月老臺

座下

二五九

五月十二日 金

午前零時十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 本郷區本郷六丁目二十五番地藪中方野村傳四へ

東京座も見たいが論文も見なければならん。英文科の諸君が大に力を奮つて作つたものをいゝ加減に見ては濟まん。中々面白いよ。二十五日迄に採點をすると云ふのだから夫迄に是非眼を通

さなければならん。中々多いページを書いた人もあるから讀むのに骨が折れる。

東京座は右の譯だから今度は御免を蒙ります諸君へよろしく願ひます。其内一所に御伴を願ひます。ドラマ會とはどんな會かね。先達文科の教授連が觀劇會をつくつたと聞いたが君の方は學生連らしい僕は其會に就ては今始めて聞くのですよ。左様なら。

五月十一日

金

傳四先生

僕は芝居を見て面白くなる迄には三十分かゝる漸く面白くなつたと思ふと幕になる。厄介な

男さね

二六〇

五月十八日 木

午後六時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 芝區琴平町二番地朝陽館野間眞綱へ

〔封筒まで朱にて認めあり〕

本屋は君のとこへ行くと云ふて居た。來たらよい加減に話をし玉へ。向のいふなり次第になつてはいけない。本屋はズルイ者だから減多な言をすると致される

看病面白く候余の意に滿たぬ所朱點を施こして御再考を煩はす。直して今一遍御送りありたし。此兩三句願くは今少し俗ならぬ、新しき、句にしたしと思ふ 如何

五月十八日

金

眞綱様

二六一

五月二十二日 月 午前零時十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 本郷區本郷六丁目二十五番地
中野野村傳四へ〔はがき〕

御ほめに預かつて甚だ難有い。實は昨夜讀んで何だか氣がぬけた様な氣合であると思ひ且つ「婆さん」が不自然の様な感じがして居た所です。僕來客の爲めに卒業論文をよむ事能はず。時は通る。不得已明日と明後日缺講をすると松永へ注進に及んだ。今日は午後から高濱に招かれて能を見に行つた。君の小説は出来る。寺田の龍舌蘭は出来る。野間皆川の兩君も新體詩をつくる。今度の文章會は大分賑か面白いらうと楽しんで居る。僕も猫のつゞきが書きたい。

五月二十一日

昨日は野間と皆川が來て午過から夜迄遊んで行つた。七人を三冊くれたから兩人に一部宛やつた

二六二

五月二十六日 金 午前零時十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 小石川區小日向臺町三丁目七十七番地山縣五十雄へ〔はがき〕

拜復小生の文章を二三行でも讀んでくれる人があれば難有く思ひます。面白いと云ふ人があれば嬉しいと思ひます。敬服する抔といふ人がもしあれば非常な愉快を覺えます。此愉快はマニラ

の富にあつたより、大學者だと云はれるより、教授や博士になつたより遙かに愉快です。小生は君の手紙を得て此大愉快を得たのだから御禮は此方より申さなければならんと考へます 勿々

五月二十五日

二六三

五月二十七日 土 午後三時五十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 本郷區本郷六丁目二十五番地
藪中野村傳四へ

高作拜見致候

丸一日抔よりはすつと上等に候。二階の男よりも遙かに小説的に候。最後の一節よろしき情景の處に候。あそこが一番詩的かと思ひ候。然し全體の上から云ふと所々白玉の微瑕と云ふ様な點有之候。病がぶり返す處抔はぶり返した様に無之。當人が死ぬ所はまだ死にさうもなく候が如何に候や。今度は一字一句の間に餘程念を入れられたと見えて警句所々に散見致候。母の會話少々妙過ぎると思ふ所は二三ヶ所筆を入れ候が是は御容赦を願ひ候。今迄君の書いたものゝ内で一番手間がかゝつたものと存候今前の七人の鳥の事が五六行かいてあつたのは甚だ小生の氣に入候。今度の感じは鳥の感じよりよろしくなく候 妄評多罪

五月二十六日

金

傳 四 兄

二六四

五月二十七日 土

午後三時五十分

本郷區駒込千駄木町五十七番地より

本郷區本郷六丁目二十五番地

藪中方野村傳四へ〔はがき〕

次回土曜六月三日午後正二時より文章會相開候間御出席被下度候。追て晩食を共にする計畫故御出缺の有無其前一寸御報知願上候

御高作可成御持參願上候。時間は可成正しく御入來願上候

二六五

五月二十七日 土

午後三時五十分

本郷區駒込千駄木町五十七番地より

芝區琴平町二番地朝陽館野間

眞綱へ〔はがき〕

來る土曜日六月三日午後正二時より文章會相催し候につき御出席願上候。朗讀後晩食會を開き候間御出缺の有無前以て一寸御通知被下度候。時間は正に二時、先日の俳體詩面白く候今日虚子へ送り申候

二六六

六月十一日 日

午後二時二十分

本郷區駒込千駄木町五十七番地より

本郷區駒込追分町奥井館中川芳

太郎へ〔はがき 表の署名に「金やん」とあり〕

先刻は失敬歌舞伎座行は色々故障で延引の處今度の火曜は僕の方であまり氣が進まなくなつたから僕はやめにして。いづれ此次でも御同行仕る事にしやう。左候へば君は朝から諸君と御詰掛可然。必ずノ、學校前にて待伏せ杯と云ふ手敷をやり給ふな。色々御心配を掛けた上でこんな我儘を云つては濟みませんが、まあ勘辨し給へ。

御令妹の御上京は別段悪い事でもないでせう。

僕今日胃がわるいが天氣もわるいから運動を見合せて居る。

二六七

六月二十七日 火

午後二時二十分

本郷區駒込千駄木町五十七番地より

本郷區本郷六丁目二十五番地

藪中方野村傳四へ

貴翰拜讀玉稿の事につき虚子は君の所へでも來て意見を述べたのか。虚子が君の小説を持ちあつかつて居る居らんは暫く措く。彼がもし君の作に就て意見を述べに來たら充分意見を聞いて參考にするが必要なり。君位の作は現今の文學雜誌に出して別段持て餘さるゝ程のものにあらず然し之を云々するのはホト、ギスであるからである。他の雜誌が歓迎さへするものを獨りホト、ギスが兎や角云ふとすれば其裏には何か曰くがなければならぬ。ホト、ギスの主張と趣味が一般と異なつて居ると云ふ事に歸着する。世間の人にはそこが呑み込めない。君も或は此點に關して一寸可笑しいと思ふ點があるかも知れない。若しさうであるならば是は好機會である充分虚子の意見を叩いて彼の一派の主義主張を聞いて置くのは充分參考になる事と思ふ。つまらん事に氣を悪

くするより君の考も述べ人の考をも容れて利害を比較するのが得策である。ホト、ギスは方今の文壇で獨毛色のちがつたものである。明星其他の文章家から見ればホト、ギスの文章は文章でないかも知れないがホト、ギス連から見ると明星流は又文章にならるのである。レトリック許りだと思つて居るかも知れん。僕はどつちがいゝとも云はぬ然し君の文章に於る智識及び趣味は色々な人の説を参考して啓發すべき時期であつて悪口をいはれて氣をわるくする時代ではない。虚子は學問のない男である長い系統の立つた議論も出来ぬ男である。然し文章に關しては一隻眼を有して居る。ある方面に癖して居るかも知れんが彼の云ふ所は理窟も何もつけずして直ちに其根底に突き入る斷案を下すに於て到底大學の博士や學士の及ぶ所でない。かゝる人の云ふ事は傾聴すべき價値がある。かゝる人にくさゝれたら其くさゝれた理由を知るのは作家にとつて寧ろ愉快である。虚子は今迄の所で小説家でも何でもなし然し彼の小説に對する標準で現今の小説に對する考を遠慮なく云はせると小説らしい小説はないと思つて居る。此點に於て虚子も四方太も碧梧桐も一致して居る。彼等の注文に應ずる小説のないのは當人等自身がかゝない否かけないので分り切つて居る。然し世の中が鏡花をほめ風葉をほめ其他の小説家をちやほや云ふのに彼等が振り向いても見ないのは彼等が全然没趣味か又は一見識あるかに相違ない。是を探求するのも自作の上に多大な影響を生ずるに極つて居る。

文章は苦勞すべきものである人の批評は耳を傾くべきものである。たま／＼一篇を草して世間庸衆の譽を買つたとて毫も誇るに足らんのみか却つて其人をスポイルして仕舞ふのみだ。小山内様なのは多少其氣味である。小山内があの儘で通したつて立派な文學者にはなれないと思ふ。

然しあゝなると到底他人の云ふ事は聞く氣づかひはない。君が虚子から小言をいはれるのは君に取つて結構な事だと思ふ。あの連中は無論缺點のある見方をするが。ある點から云ふと僕杯より遙かに見巧者である。僕は嚴酷な様で却つて大概の作に同情する弱點がある。是は自分がよく出来んと云ふ事に心が引かれるからである。

一の垣隣りがホト、ギスでどうならうとも構はん、僕は此際に於て君が文章に對する心懸に就て以上の希望を述べたのである。實は僕の家で文章會を開く事にしたのも多少此主意であつたが皆が遠慮するものだからついこんな事になつた。君と虚子の間に立て切つてある障子一牧をあげ放つて見よ。春風は自在に吹かん。妄言多罪

六月二十七日

金 生

傳 四 先 生

梧 下

二六八

六月二十七日 火 午後六時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 松山市松山中學校小島武雄へ

拜啓先達ては貴翰に接し拜讀御申越の件委細承知致候借本年卒業の英文學士中吉松武通氏は去年は首座本年は二位にて成績可良其上大學入學前岐阜にて中學に「教鞭をとり居候事として經驗にも不乏本日同人に相談致候處今治へ赴任の儀承諾仕候に就ては先方へ御推舉相成度右御返事迄申上候

卒業生成績発表の手間どりしと二三年前の卒業生の他に移りたき志望のものを聞き合せ居りたる爲め返書遅延不悪御海恕。

試験がすんだら來客にて忙殺せられ候追々暑氣に向ひ讀書も苦しく候御自愛專一に候 以上

六月二十七日

夏目金之助

小島武雄様

二六九

七月二日 日 午後三時五十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 本郷區本郷六丁目二十五番地敷中

方野村傳四へ〔はがき 朱書、署名には「先生」とのみあり〕

御 届

一 パナマ製夏帽 一

右者本日本郷唐物店にて相求め爾後カブツテあるき候間御驚きにならぬ様致度右御届及候也

二七〇

七月十三日 木 午後三時五十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 本郷區本郷六丁目二十五番地敷

中方野村傳四へ〔はがき〕

龜拜見面白く候垣隣りよりあの方が感じがよろしく候。あれはホト、ギス向きかき隣りの方は

却つて帝國文學むきと存候 以上

二七一

七月十五日 土 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 淺草區田町一丁目六十九番地豊田方濱武元次へ

〔うっし〕

拜啓庄内中學にて英語教員一名入用の由にて相談をうけ候月給は六〇のよし或は六十五位になるかも知れず小松の方も未決中なれば此方へも履歴を出して置いては如何石川へかゝり合ふ事は小生より先方へ通知致候今度推舉致す人は佐治氏金子氏と君三名を擧ぐる積りに候もし御覺召もあらば履歴書一通郵便にて御廻付願上候 以上

七月十五日

夏目金之助

濱 武 君

座右

二七二

七月十六日 日 午前零時十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 名古屋市西瓦町百五番戸中川芳太

郎へ

手紙を頂戴難有拜見しました其後君は大分勉強の由結構です何もする事がないとか外に面白い事がないと勉強するものだから學者になるには君の様な境界が第^原番よいと思ふ。交際が多かつたり女に惚れられたりして大學者になつたものはない。

僕も勉強はしたいがいやはやの至りだ。一昨日迄は入學試験の監督を仰せつけられる。うちへ歸ると今年卒業の諸先生が口の爲めに談判にくる。支那から友人が歸つてくる。新小説の社員が來て戦後の文壇に對する所感をきかせろなといふ。中學世界で世界三十六文豪を紹介するから沙翁を受持てといふ。中央公論のチヨイン先生がきて何かかけといふ。隆文館が來て猫を出版させろといふ。金尾文淵堂なるものが何か出版するからかけといふ。而して來學年の講義は作らねばならず。明治大學の試験の答案は見なければならず。そこへ持つて來て胃が悪いから眠くなる。本を讀むと批評的に讀むから少しも面白くない。作中から自分の作の事を思ひつくから少しも抄取らず。ピヤホールへも行かないが晩にはよく寅彦先生や四方太夫人それから傳四君は無論奇蹟眞拆兩文豪も御出になる。是で大學で一人前の事をして高等學校で一人前の事をして明治大學で三分一「人」前の事をして文士としても一人前の事を仕様といふ圖太い量見だから到底三百六十五日を一萬日位に御天と様に掛合つて引きのばして貰はなくつちや追ひつかない話しさ。先達日本新聞がきて何でも時々かけといふから。僕もつくづく考へたね。毎日一欄書いて毎日十圓もくれるなら學校を辭職して新聞屋になつた方がいゝと。然し是は日本新聞で承知する譯のものでないから矢張り赤門の中で妙な事を云つて暮らす積りです。然し猫をかいいて先月十五圓貰つたから早速バナマの帽をかつて大得意で被つて居る所などは随分小供の様だ。然るに先日友人が支那から歸つて來て同じくバナマの帽を被つて居る然も僕のものよりすつと上等であるのを見て猫をかくより支那へ出稼ぎをする方が得策だと思つた。

不平をいふと人間は際限がない僕杯も不平だらけだが妙なもので不平ながらピン／＼實在して居るから不思議だ。今にハムレット以上の脚本をかいいて天下を驚かせ様と思ふがいくらえらいものをかいても天下が驚きさうにもないから已め様とも思ふ。以上

七月十五日

金

中川先生

二七三

七月十七日 月 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 若杉三郎へ

尊翰拜誦御問合せの件は別紙に於いて差し上げます。是で御間に合ひますか知らん。君はモリエルの専門家になつてモリエル全集の翻譯と云ふ奴を御出しなさい。僕は翻譯は嫌だ。骨が折れる許りで思ふ様にうまく行かない者ぢやないですか。ホト、ギスの猫の一二は此正月と三月の號だと記憶して居るが兩號共賣切れで一部も残つて居ません。皆川のソラブトラスラムあれは御意に逆ふ様だが面白くない小生は一二頁讀んで御免蒙つたです。僕なんかは矢張先生の俳體詩の方がいゝ。元來今の新體詩と云ふ奴は言葉許り飾つて何を云つてるのか分らないのは閉口します。あんなものより。平々凡々調で趣味のある嫌味のない事を歌ふ方が洒落て居ますよ。一體小説でも新體詩でもいやにしつこい、あぶらこい奴が流行するのは時節柄胃囊へ納りきれません。僕米が食へれば教員をやめて明治の文士とすす所ですが此様子では猫の續きもかけさうにありません。失敬

七月十七日

金之助

若杉モリエル様

二七四

七月二十四日 月 午前九時—十時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 丸龜市土居鹿間千代治へ〔繪

はがき 朝顔の畫 表の宛名に「鹿島松濤樓」とあり〕

朝良の葉影に猫の眼玉かな

漱石

二七五

七月二十五日 火 (時間不明) 赤坂區新坂町六十番地永井方野間眞綱へ〔繪はがき〕

〔繪の下に〕

野村君が遊びにいらしやつて日野君が遊びから歸らしやつてわが輩がひるねから御さめ遊ばして

眞拆

肉を焼くシチリンの炭の火がパチ／＼と宜い音を御立て遊ばして

傳四

こんな時野間先生が入らしやれば宜いと皆川君が仰しやつて、

健

僕も遊びに御出で遊ばして

金

〔繪にかけて〕

圓左會に美人が御出遊ばしました。此次に是非行つて御覽

〔繪の上に〕

僕はこんな宜い繪はがきを人に送る氣はしないなとおもひ遊ばして

傳

野間君は此を見てよろこび遊ばすだろ

拆

七月廿四日

二七六

八月三日 木 午後二時二十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 神奈川縣大磯町北本町田村屋野村

傳四へ〔はがき〕

『垣隣りで七圓龜の子で五圓都合十二圓では心細いなあ。あすここに白百合が見える。一つ白百合と云ふ題でかゝう。是が十圓か。うまい事に氣がついた』

八月三日

二七七

八月三日 木 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 淺草區田町一丁目六十九番地豊田方濱武元次へ〔う

つし〕

先刻は失敬本日午後庄内中學校長羽生慶三郎氏來訪貴君の事を話したからともかくも逢つて見

た玉へと云つたら明日晩八時頃ひまがあるなら左記の處で逢つて見たいと云ふた。當地は築地明石丁四十九番地屋代芳亮方(ラス、ベ商會の裏)

先方では大に希望があるが七十圓出すのを困難に感じて居る。僕は七十以下では英文卒業生は庄内杯へ行かぬと云ふて置いた。兎も角君をとるかどらぬか分らぬ。君も行くか行かぬか分らぬが逢つて様子を見るのもよからうから定刻に出掛けて見給へ先方から君を尋ねてもよいと云ふたが下宿だから本人が出る方が便利だらうと申した。此會見はきめる爲めの會見でないから月俸其他で不調になるかも知れない其代り君も斷はる事は自由である。

八月三日

夏目金之助

濱武元治様

二七八

八月四日 金 午後六時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 神奈川縣大磯町北本町田村屋野村傳四へ

(はがき 表の署名に「こまる先生」とあり)

事業如山多く時間かくの如く短かし僕が二人になるか一日が四十八時間にならなくて「は」到底駄目だ。猫も何も書けさうにない。圓左會へも行かれさうにない。岩崎が避暑にきて居るならよろしく。

神泉は出ない方がいゝ。僕の筆記杯は何かかいてあるか分らない

千駄木は不相變豚臭くて厄介だ。

二七九

八月六日 日 午後二時二十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 神奈川縣大磯町北本町田村屋野村

傳四へ「封筒の名宛に「野村傳四先生」とあり裏に「東京は本郷區駒込の千駄木夏目金之助なる者より八月六日」と三行に認めあり」

一寸申上げますが

あなたの浴場スケッチは第一第二ともうまいものですあゝ云ふ奴がつゞくと名文が出来ます。あゝ云ふ呼吸を飲み込んだ人は名文家です、従つて君も名文家だらうと思はれます。今の文章家といふのは心掛がわるいと思ふ。あれはあれ丈でよいから長いものであゝ云ふ山をこしらへ玉へ。神泉は出た巻末の本郷座の合評は當時愚なものだと思ふたら中々君面白いぜ。岩崎に逢はなければよろしく云はんでもよろしい。序ながらあの別荘を作るに何圓か、つたか一寸取調べて頂きたい。風葉先生は此前もツルゲネーフか何かを済して自作の如く御吹聴に相成つたのだから今回の荒野のりやも御驚きになる事はない。人殺しも毎日あると平氣になるものだ。今の世は度胸が大事です。然し僕は所謂荒野のりやなるものを拜見仕らんのだがね。十頁許り讀んで何でも西洋物と氣がついたが興が乗らんから御やめにした其代り山岸荷葉君の藥屋の若旦那といふ奴を通讀したがあの若旦那の言葉は頗る氣に入つたね。僕の細君の妹の亭主に工學士が居てね、其工學士先生がまるであの若旦那だから餘程僕は愉快によんだ。僕春陽堂から反物一反を頂戴仕つた戦後文壇の趨勢は遠からず單衣に化ける事と存じて居る。神泉に出て居る梨雨先生の春の夜と申

す新體詩を御覽下さい。あれは往來を色眼ばかり使つてあるく女學生位な程度だ。其他色々あるが御やめ。

寒月君は葉書のこときもの、小説をよこす。何でも夫婦の中に子なきを憂ひて大磯へ貝を食ひに行くこと云ふ趣向だがね。頗る振つたものさ。是はゾラ君の翻案ださうだ。

八月六日

傳 四 先生

二八〇

八月七日 月 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 下谷區中根岸町三十一番地中村鉦太郎へ

拜啓御歸朝後一寸機會なく御面語の折なく打過候處愈御清穆奉賀候

借今回ホト、ギス所載の拙稿を大倉書店で出版致し度と申すについては其内に挿畫を入れる必要有之之を大兄に願ひ度事小生も書肆も一樣に希望につき御多忙中甚だ御迷惑とは存じ候へども御引受け被下間敷や實は製本も可成美しく致し美術的のものを作る書店の考につき君の筆で雅致滑稽的のものをかいて下されば幸甚と存候猶委細は此手紙持參の番頭より御聞取被下度條件も同人と御とりきめ願候 以上

八月七日〔封筒には八月八日とあり〕

夏目金之助

中村不折様

二八一

八月九日 水 午後三時五十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 神奈川縣大磯町北本町田村屋方野

村傳四へ〔はがき 表の「田村屋方」の下に括弧して「岩崎男爵様御別邸傍」とあり署名に「空氣風呂發明者」とあり〕

拜啓今日晴天大風にて障子を立て切り密室内にて空氣風呂に入浴仕候處至極工合宜敷早々御歸京の上御試験相成度先は右御案内迄 勿々頓首

二八二

八月九日 水 午後三時五十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 下谷區谷中清水町五番地橋口清へ

〔はがき〕

昨夜は失禮致候其節御依頼の表紙の義は矢張り玉子色のとりの子紙の厚きものに朱と金にて何か御工夫願度先は右御願迄 勿々拜具

二八三

八月十日 木 午後二時二十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 赤坂區青山南町一丁目五十五番地

板尾内野間眞綱へ〔はがき〕

雨になろかと 君待つ宵は

雨ともならで ほととぎす
君しませずば 寐たものを
あの曉の ほととぎす
これは下手だ君の方がうまいあれを仕舞迄御かきなさい
十日

二八四

八月十一日 金 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 名古屋市西瓦町百五番戸中川芳太郎へ
宮津の御祭の手紙拜見。田舎の事がどうも面白い。御婆さんの鶏は氣の毒だよろしく云つてくれ玉へ。東京は雨ばかり降つて閉口の處二三日前から大分熱くなつて晴天。熱いときに汗をかいて家の内にうん／＼云つて居るのは乙なものだ何だか俳味があると思つて済してゐる。皆川は歸省、傳四は大磯へ避暑寅彦も歸省。僕のうちへくる定連は大分減つたので少々日の長い様な氣がする。ところが來年の講義が氣にかゝつて義太夫の文句ぢやないが食ものんどへ通るまいと思ふ程でもないが實際大學がいやになつて仕舞つた。先日厨川が來てベーターの本を借せと云ふてつて返つた。船へ乗つて月を見て美人の御酌でビールが飲みたい。神泉といふ雑誌の小澤平吾と云ふ先生が來て月見に來いと云ふたが是は御免蒙る。日比谷へ音楽堂が出來た。何だか六づかしいプログラムでやるぜ。傳四は大磯から毎日スケツチをよこす。あれは君無暗に筆まめな男だ。僕本屋の請に應じて猫を出版する二百八十頁位になる。うつくしい本を出すのはうれしい。高く

て賣れなくてもいゝから立派にしろと云つてやつた。何で「も」挿畫や何かするから壹圓位になるだらうと思ふ。到底賣れないね。うれなくても奇麗な本が愉快だ。あとは追々

八月十一日

夏 金

中川芳太郎先生

二八五

八月十九日 土 午後二時二十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 本郷區菊坂町第一菊富士樓高田
知一郎へ

拜啓

先日新潮社の高須賀淳平といふ人が來ましてね、一夕雑談をやつたら、先生すぐ是を文章にして「みづまくら」夏目漱石など、號して此度の新潮へ載せたんですがね。其内に神泉に出た君の春の夜といふ新體詩の批評がまぐれ込んで居るが夫で見ると何だか君を故意に罵詈した様で甚だ恐縮の至ですがね。是は淳平君の口氣が少々悪るので僕の主意ではないのですよ。あんなつまらない話をこんな口調で載せ様とは思はなかつた。かうなつては僕から君にあやまるより仕方がない。どうか御勘辨下さい。尤も春の夜の悪口は少々申しましたよ。

新潮を一部御覽に入れます。他日御面會の節は改めて閉口します。

夏目金之助

梨雨先生

二八六

九月五日 火 午前十時四十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 芝區琴平町二番地朝陽館野間眞綱

へ「はがき」

此前の日曜には四方太と上野の日月會を見て根岸の岡野から中村不折の家へ行つて晩は若竹へ朝太夫をきゝに行つたので失敬しました花の本儘かに落手君の鮎つりは何だか調はぬ感じがある尤も面白い所もあるから再考してはどうだ。神泉はえらいものだ。梨雨先生のダンテはうまい。あとは多忙でよまない。「一夜」の批評難有拜讀あれはだれもほめてくれ手があるまいと思つて居た。秋風が吹き出してから好い氣分だ。吞氣な身分になつて遊山でもしてあるきたい。學校が始まるのは何よりいやだ。草々

僕の神經は學校に適しない様に出來てるんだらう。

二八七

九月十一日 月 午後五時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 本郷區駒込追分町奥井館中川芳太郎へ

「はがき 表の署名に「金やん」とあり」

昨日は野間と野村とが朝から來て晝飯を食つて居たら寅彦が來て四人で神田へ行つて寶亭で晩食をしました。寅彦君が奢つた。中々金持だ。「一夜」の批評拜見大變なほめ方で少々恐れ入つた次第然し悪口されるより愉快です。今日高等學校へ行つたら畔柳がわからないと云ふた「か」ら。

わからんでも感じさへすればよいのだと云ふた。芥舟先生は少しも感じて呉れないらしい。して見ると君なんかは天下の知己ですよ。

二八八

九月十一日 月 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 本郷區駒込追分町奥井館中川芳太郎へ

只今三重吉君の一大手紙を御送りに相成早速披見大に驚かされ候。第一に驚ろいたのは其長い事で念の爲め尺を計つて見たら八疊の座敷を堅にぶつこぬいて六疊の座敷を優に横斷したのは長いものだ。あれ丈のものがかけるなら儘かに神經衰弱ではない。休學などは思ひも寄らぬ事だ。早速君から手紙をやつて呼び寄せ玉へ。僕は來週からでなくては講義をはじめない外の先生も大概そんな事だらう是非出京し玉へと云ふてやり給へ。たとへ只ぶら／＼學校へ出たり出なかつたりして居ても夫で澤山だ。休學した積りで東京に居るがよろしい。親が病氣で一日も早く成業して見せ様といふものが一年間休學する理窟があるものか一日も早く卒業するのが義務である。是は君からは非手紙で云ふてやつてくれ玉へ。僕の考だと云ふてくれ玉へ。何でもかんでも學校に籍さへ置いて居れば自然天然と文學士になる所を休學なんてつまらない。出て來て方々遊んであるいて時々金やん先生の家杯へ遊びに來れば神經衰弱なんかすぐ直つて仕舞ふさ。

それから次に驚ろいた事は三重吉君が僕の事をのべつにかいて居る事だ自分のおやぢの事より僕の事が餘程長くかいてある。あの手紙が三間の長さとする二間は儘かに金やんの事で埋つて居る。僕の様な人間が學生の一人の頭腦を是程迄にオキユバイして居るとは夢にも考へなかつた。

あの手紙を読むと三重吉君は僕の事を毎日考へて神経衰弱を起した様に思はれる。僕が十七八の娘だつたら。すぐ様三重吉君の爲に重き枕の床につくと云ふ物騒な事になるのだが幸ひ吉原から買つて来た油壺なんかを乙がつて居る金やんなので、こつちにとつては薬代も入らずに済みさうなのは先以て結構仕合せの至りである。然しいくら漱石だつて、金やんだつて、講師だつて、髭が生へてたつて、三重吉君からこれ程敬慕せられて難有くと思はんといふ次第のものではない。難有いなどは通過して恐ろしい位だ。三重吉君は僕の細君杯より餘程僕の事を思つて居るらしい。然もそれが學資を貢いだと云ふのでもなし周旋をしたと云ふのでもなし。金を貸した事は無論ないのだから一層難有いと云はなければならぬ。僕は是で中々自惚の強い男だからある人には好かれて然るべき性質を有して居ると自信して居るがね——然しあれ程迄に敬慕され様とは氣がつかなかつた。あれは己惚以上だよ。豫期を超過する事五十六倍だよ。元來人から敬慕されるとか親愛されると急に善人になりたくなるものだ。敬慕親愛に副ふ丈の資格を一夜のうちに作りたくなるものだ。僕も今夜は急に善人になりたくなつた様な氣がする。天下の人がみんな三重吉君の様に僕を敬愛してくれて居たら僕は今頃はとくに孔夫子か基督か乃至釋迦牟尼位にはなつて居るよ。恨むらくは氣に喰はない馬骨野郎が充滿して居るのでかやうの次第で遂には三重吉君の好意にすら負く様な譯に相成るのは汗顔の次第だが考へると是は僕のわるいのではない馬骨君のわるいのだから三重吉君の想像する如き好人物でなくて切角の豫期を失望させても是は僕の責任ぢやないから其邊の所は篤と三重吉君に斷つて置いてくれ玉へ。三重吉は蛸壺をくれる筈の處壺を括つた繩が切れて御ぢやんと相成つた由甚だ遺憾の至だが金やんも其好意に對して何か進呈しや

うと思ふが別段勸業銀行の債券にも當らん事だから思ふものも差し上げる譯に參らんから。近日出版の吾輩は猫である一部を謹呈する事に致すからは御報知を願ひたい。

三重吉は僕を愛するとか敬ふとか云ふ外に僕は博學だとか文章家だとか良教授だとか云ふて居らん。そこで君の僕に對する親愛の情は全くパーソナルなので僕自身がすきなのだと愚考仕る。そこが甚だ他人と異なる所で且甚だ難有い所である。だから僕が「吾輩は猫である」を獻上するに就ても猫の文章を読んでくれるとか滑稽を味つてくれるとか云ふ考で獻上するのではない。單にパーソナル・アツフエクションを表する微意であるからは是も序に御傳言を願ひたい。

あれ丈長く僕の事をかいて居り又あれ丈僕の事をほめて居るが少しも御世辭らしい所がない。昔の文章家の様にウソらしい文句がない。誇張も何も無い。どうしても眞摯な感じとしか受取れん。是が僕の三重吉君に尤も深く謝する所である。

あの手紙は僕がこの手紙と同じくながりがきにかき放したものであるらしいが頗る達筆で寫生的でウソがなくて文學的である。三重吉も文章をかいて文章會へでも出席したら面白いと思ふ。

右御挨拶迄に草々認めた許りであるから前後亂雑で讀みにくく解しにくいと思ふがどうか僕の云ふ事丈を三重吉君に傳へて下さい。尤も望む所は一年間田舎へ引籠るのをやめて出京する様に勸めて下さい。僕には三間の手紙をかく勇氣がないから是で御免を蒙ります。實際三重吉君より僕の方が神経衰弱さ。親分が大神經衰弱だから子分は少々神經衰弱でも學校へ出るがよからう。

九月十一日夜

芳太郎様

金やん

二八九

九月十二日 火 午前九時十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 本郷區本郷六丁目二十五番地敷中

方野村傳四へ〔はがき〕

傳四先生。僕は今週休んで來週から開講と致す積りだから此旨を一寸聽講の諸君子に報知してくれ玉へ。むだ足をさせるのも氣の毒と思ふ。

十二日

二九〇

九月十六日 土 午後九時二十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 本郷區駒込追分町奥井館中川芳

太郎へ

一寸申上ます。昨夜來客があつて歸らうとする時帽子がない。玄關にあつた小生のゴム製の雨具がないよつて泥棒だらうと云ふ鑑定であつた。

所が夜更に及んで月を見ながら椽の下をのぞいて見たら君から來た三重公の手紙を入れた状袋がある。而して中身がない。して見ると是も泥棒君の所爲だと思ふ。三重吉君が三間餘の手紙を天下の珍品と心得て持つて行つたとすれば此泥棒は中々話せる泥棒に相違ない。然し君の所へ來た手紙を僕がぬすまれて平氣で居る譯にも参りかねるによつて一寸手紙を以て御詫を致す譯だがね。どうか御勘辨にあづかりたい。向後氣をつけると申したいが僕の家は是より氣のつけ様がな

い。氣をつけるなら泥棒氏の方で氣を付けるより仕方がない。尤もあんなうつくしい手紙を見たら泥棒も發心して善心に立ち歸るだらうと思ふから其内手紙も自然どこかへ戻るかも知れない。戻つたら正に返上仕るから左様御承知を願ひ度い。先は古今未曾有の泥棒事件の顛末を御報に及ぶ事しかり。是で見ると今迄も色々なものが紛失して居るのかも知れんが少しも氣がつかない。随分物騒な事だ。此つぎは僕の書齋を焚き拂ふかも知れない。泥棒が講義の草稿を持つて行つたら僕は辭職する譯だが泥棒君も中々仁惠のある男だ 以上

九月十六日

夏 金

中川 先生

二九一

九月十七日 日 午後二時二十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 麴町區富士見町四丁目八番地高

濱清へ

啓上文章會開會の議破承仕候小生も今月末迄には猫のつゞきをかく積りに候會日は九月三十日が土曜につき同日午からとしたら如何かと存候。就ては會場の儀今迄小生宅にて催ふし候處細君アカンボ製造中にて随分難儀さうに見受候に就ては今度一寸御免蒙りどこかほかへ持つて行き度と存候會員の宅でなくとも貸席杯可然か是は御撰定にまかせ候。さうなると公然會費を徵集する必要相生じ候。さうなると出るものが少なくなると存じ候。又報知の御手数も大兄を煩はす方がよくなつて参り候。以上につき御考如何。一寸伺上候。

毎日來客無意味に打過候。考へると己はこんな事をして死ぬ筈ではないと思ひ出し候。元來學校三軒懸持ちの、多數の來客接待の、自由に修學の、文學的述作の、と色々やるのはちと無理の至かと被考候。小生は生涯のうちに自分で満足の出来る作品が二三篇でも出来ればあとはどうでもよいと云ふ寡慾な男に候處。それをやるには牛肉も食はなければならず玉子も飲まなければならずと云ふ始末からして遠々心にもなき商賈に本性を忘れるといふ顛末に立ち至り候。何とも残念の至に候。(とは滑稽ですかね)とにかくやめたきは教師、やりたきは創作。創作さへ出来れば夫丈で天に對しても人に對しても義理は立つと存候。自己に對しては無論の事に候。
「一夜」御覽被下候由難有候。御批評には候へどもあれをもつとわかる様にかいてはあれ丈の感じは到底出ないと存候。あれは多少分らぬ處が面白い處と存候。あれを三返精讀して傑作だといふてくれたものが中川芳太郎君であります。それだから昨日中川君と傳四君に御馳走をしました。尤も傳四君は分らないと云ふて居ます。

九月十七日

金 生

虛 先 生

俳佛の御説教中々面白くかゝれ候

二九二

九月二十四日 日 午前零時十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 芝區琴平町二番地朝陽館野間眞

綱へ

拜啓風邪にて御臥床のよし嘸かし御退屈の事と存候たまに病氣にかゝるのは一寸洒落たもの候へども發熱甚しくと有つては随分御苦しみと存候近ければ水菓子でも御見舞に差し上げる所だあまり遠方だから其にも及ぶまいと思ひ差控申候。小生日々來客責めにて何を致すひまもなく候然し來客の三分二は小生にインテレストをもつて居る人々だから小生の方でも逢ふとつい話しが長くなる次第必竟自分で來客を製造して自分で苦しんで居るに過ぎぬ愚見に候。夫故心ばかり狼狽して仕事は一向出来ず愛想がつき申候。學校をやめたら作家になれるだらうなかと己惚るのも矢張り本來の愚見かと存候。只今中川が參り長らく話しをして返り候。橋口の母は死去のよし氣の毒と存候一寸尋ねたいと思ひ候へども是も右の事情にて果さず候。當人甚だ寂寞を感じる由申來候。中學校教師の件病中態々難有候早速心當りへ報知可申候。佐治はどうか口にありつきさうに候。濱武は横濱へ參り候。金子と申す人に相談致さうかと存候。先は御攝養專一に候。病氣で何か不自由な事があるなら手紙で遠慮なく御申聞可被成候 以上

九月二十三日

金

眞 綱 様

二九三

九月 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 皆川正禧へ「うっし」

昨日は二三人の來客あり後寺田寅彦のすゝめにて上野から谷中あたりを逍遙致候留守中御來訪失禮致候暫らく御目にかゝらず候處不相變御機嫌の事と存候小生何だか陸へ上つた魚の如く喘々

として消光一寸免職になつて半年許り休養が致度候
佐治君は浦和中學に内定野間は風邪で寐て居ます中川は眼病で眼鏡をかけて居ます傳四はのん
きな事をいつて居ます白馬會の出品は大概前年の舊作ですこれと申感服したものはありません
近頃は創作をやるひまがないので何だか筆が動かない様な氣持です
其内御面會の上萬縷 草々

二九四

十月二日 月 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 若杉三郎へ

拜啓先達御質問の件は多忙にて御返事を怠たつて申譯がない
コルネイユと申す先生の作は自慢ぢやないが一つも讀んだ事がない。此分では生涯讀む事はな
からうと存じます。そこへコルネイユが出て來たから大恐縮で手紙をポケットへ入れた儘にして
置くと昨日三年生の中川芳太郎と云つて博學の男が來たから君コルネイユを讀んだかいと聞いた
ら讀みはしません學校で調べて上げて宜しう御座いますと云ふから難有い是非願ひ度と君の
手紙を渡しました處今朝中川君は別紙の通デコ／＼な佛文をかいて來ました。夫を早速君の方へ
廻しますから御讀み下さい。

夫からアンドラインのある所はね

Lag. サア金を茲へ置くぞ

Mol. わしの金も茲にある十兩は現金但し九十兩は on Anyuta (on Anyuta) のは僕

にも分らない)

Lag. よろしく

Mol. 異存はない

位な所でせう。よく分らない 先は右用事迄 勿々頓首

十月二日

若杉様

二九五

十月十一日 水 午前零時十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 芝區琴平町二番地朝陽館野間眞綱

君塚の一夜面白く拜見致候。少々主客の言語動作が故意にひねくれて居る所が厭味に候。たと
へばにらめなくともいゝのに河童の畫をにらめたり仰ぐ必用もないのにパイロンの像を仰いだり
する事に候。其他の光景は甚だよろしく候。會話は少々文句有之候。あれは連句丈にあらためた
方がよからんかと存候。あの儘では會話としてあまり振はざるのみか僕の「一夜」中の會話を強
いて眞似た様に思はれ候。兩人が對座して連句をやつて居るやうに少し直して見ましたこんど見
せます。

僕來客に食傷して來客が大嫌に相成候當分こない事に御きめ被下度候

猫出來一部一兩日中に進呈致候

十月十日
眞 綱 様

金

二九六

十月十一日 水 午前九時十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 本郷區駒込追分町奥井館中川芳太郎へ〔はがき〕

猫を三重吉君に送つて下さい。僕は猫を二十二部もらつた。金はまだ一文ももらはない。近來來客に食傷して人が嫌になつたから當分きてはいけません。手紙はいくらでも頂戴

十月十一日

二九七

十月十二日 木 午後三時五十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 廣島市猿樂町鈴木三重吉へ
御手紙は拜見しました休學の件も萬不得已事情ありての事なれば却つて出京を御勧めして一時でも考へ込ましたのは甚だ恐縮の至です。

休學中々學の教師といふけれど教師杯をしては神經衰弱が起る許りで決して休學にはなりませんよ。夫も手近に面白い口でもあれば格別ですがさうでなければ矢張り島へ渡つて遊んで居る方がいゝ。僕も時があれば小笠原島位へ一寸流されて見たい。兩三日前猫が出来ましたから君に一部あげやうと思つて中川君に托して置きました今頃は届いて居るでせう。近來來客が無暗にある

ので大に人間がいやになつたから五六人に手紙を出して當分來てはいけないと通知をしましたら。其通知を受けた一人の寒月君が通知を受けた翌日すぐやつて來ました。是では切角の通知も役にたゝない譯です。中川君も此通知を受けた一人です。

小生も君の様に敬慕してくれる人があると大分えらい様ですが裏の中學生や前の下宿のゴロツキから馬鹿にされる所を見ると一文の價値もないグータラですよ。世の中は妙なものであります。小生も大學を一年休講して君と一所に島へでも住んで見たい。 頓首

十月十二日

金

鈴木三重吉様

二九八

十月十四日 土 午後三時五十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 横濱市元濱町一丁目一番地渡邊和太郎へ〔はがき〕

拜啓するめ頂戴難有候。僕は猫君はするめ各商買道具で贈答をするのは一寸面白い譯ですな。此次ぎ何か書いて一本を献上する際にはどうか正金銀行の株券を下さい。

十月十五日

東京本郷駒込千駄木町五七

夏目金之助

二九九

十月十九日 木 午後三時五十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 小石川區竹早町百二十番地愛知

社内中川芳太郎へ

御手紙拜見、加計先生御出京のよし、田舎へ這入つて適意の書を読んで暮らせれば夫が人間の最幸福だと思ふ。そして年に一度東京へ出て来て遊ばば猶結構だ。僕の音を蓄音機に詰込む事一向差し支無之。然し詰め込むなら詰め込むの文句か音聲がよからうと思ふ。不幸にして歌もうたへず詩吟も出来ず只平生の駄辯より外に能のない人間だから困ります。僕來週は學校の行軍だからひまになる。(僕は行軍へ出た事はない)遊びに來給へ。加計君が其時迄居るなら一所に御出なさい。

今日高等學校で一人の學生を大きな聲でしかり付けてやつた。さうして全級にこんな出來ないと皆落第だと宣告した。こんな人々は生涯僕の聲をきくのが厭だらう。廣島から漱石の聲を詰めに來たと聞いたら吃驚して目を舞はすだらう。 頓首

十八日

金

芳太郎様

三〇〇

十月十九日 木 午後三時五十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 愛媛縣温泉郡今出町村上半太郎

へ(はがき)

霽月先生の芳墨を誦する事前二回。此頃は應答の句も出來ぬ始末なるを深く慚づ。媾和約成

り、天下太平、英艦來泊、素貧如故、秋氣入衣 頓首

三〇一

十月二十日 金 午後三時五十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 熊本市内坪井町百二十七番地奥

太一郎へ

尊書拜見仕候其後は乍存ついで御無沙汰に打過申候熊本も其後大分移動有之候の様子奈須川君には當地にて一寸面會致候山縣君入學は小生の尤もよろこばしく思ふ所に御座候熊本も永く居ると存外あきる所に候が大兄の如き人は始終一日の如く御勤めに敬服の至に不堪小生如きはどこへ参つても教師がいやで生涯覺れない剛突張に候人は大學の講師をうらやましく思ひ候由金と引きかへならいつでも譲りたくと存候御令嬢御誕生の由結構に候中々容易に生長仕らざる様ながらズン／＼のびて行くには一寸驚く事も有之候小生はあとから小供に追ひかけられ居候氣持に候。近來非常の多忙先達中杯は來客ばかり日々兩三名も引き受け實に閉口致し候爲め五六人に手紙を出して當分來てはいけないよと申候處其翌日其一日がすぐ参り候

高等學校は樂なものに候小生は高等學校で食つて餘暇に自分の好きな事を致し度と存候。舎監杯は一日も致すべきものに無之と存候第一高等學校は熊本より大分氣樂に御座候同僚の家杯へ参りたる事無之先方よりも参りたる事無之候。大學も其點は頗るのんきななるものに候。

閑窓に適意な書を読んで隨所に山水に放浪したら一番人生の愉快かと存候。小生は教育をしに學校へ参らず月給をとりて参り候。自餘の諸先生も正に斯の如くに候。以

上

十月二十一日

奥 太一郎様

三〇二

金 生

十月二十一日 土 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 本郷區彌生町廣島縣學生寄宿舎妹尾福松へ

先夜は失禮陳は今般長崎縣立中學玖島學館長米澤武平氏上京同校に英語教師一名入用の由につき大兄がもし行く氣ならよからうと推舉致候君は東京にとゞまる積の由なるが或は色々の事情として行く氣になりはせぬかと思ふたからです。月給は六十圓出すさうです。一つ考へて見ませんか。若し行く氣なら校長へ通知して一寸面會して御覽なさい。伯は神田三崎丁森田館です。行く氣なら校長は時間をきめて逢つて見たいといふて居ます 草々

十月二十一日

夏目金之助

妹尾福松様

三〇三

十月二十三日 月 午前十時四十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 横濱市元濱町一丁目一番地渡

邊和太郎へ〔はがき〕

今日は觀艦式に御招待を蒙つてありがた「く」御禮を申します。小生も一寸参りたいが瀛車が非

常に込み合ふだらうと思ふのと今一つは八時前に尊宅に伺ふ勇氣がないので失敬します。あしからず

三〇四

十月二十九日 日 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 下谷區中根岸町三十一番地中村鉦太郎へ

拜啓かねて御面倒相願候「吾輩は猫である」義發賣の日より二十日にして初版賣切只今二版印刷中のよし書肆より申來候。是に就ては大兄の挿畫は其奇警輕妙なる點に於て大に賣行上の景氣を助け候事と深く感謝致候拙作も御蔭にて一段の光輝を添候ものと信じ改めて茲に御禮申上候以上

十月二十九日夜

金

不折畫伯

座下

三〇五

十月三十日 月 午後一時(以下不明) 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 牛込區市谷砂土原町三丁目八番地内田貢へ

拜啓小生其日／＼に追はれ牛込方面へ参りたる節は何ひ度と存じながらついでに御無沙汰御海
集簡書
恕願上候

本日は友人に誘はれ上野音楽會へ参り日本橋銀座邊のイルミネーションを見て九時頃歸宅書齋へ這入候處机上に大兄より御書面と猫の繪端書二十七葉とが待ち構へ居候
何事かと開封致候處思はざる「猫」に就ての御奨勵の御褒辭讀去讀來甚しき愉快を覺候まゝ直ちに秃筆を染めて御返事を差上候

拙稿は御覽の通りの出鱈目をかきつらねたるものにて最初は別段書物に致す考も無之候處友人等の勧めにて稿を續ける事に相成書肆の催促により出版を急ぎ候もの實は大方諸君の批評如何あらんかと氣づかひ居候處はからざる貴君よりかゝる御言葉を頂戴し非常の慰藉を得たる次第に候
小生は人より物しりなりと云はるゝ事を好まず學者なりと云はるゝを好まず是等は皆中らざる事に候へば只赤面致すのみに候。然し著述はよかれあしかれ著述に相違無之此はきとしたる書物に就ての批評は善惡共に悦こんで甘受する覺悟に御座候。就中公平にして眼識ある人の賞賛は滿腔の感謝を以て拜受致候。既に確然たる一冊の書物ありての上の事故之に對する批評は空漠たる贊辭や虚名とは異な「る」ものとの自信有之候故に御座候。

小生は漠然として學者なり篤學なり抔云はるゝを欲せざると同時に拙稿たりとも世に公に投げ出したるものに付ての褒辭は大に難有くアクセプトする主義に候。而も其難有味は博士に推舉されたり勳章を貰つたりするよりも遙かに優る難有味に候。
大兄は小生をして此難有味を感ぜしめたる知己の一人なれば深く銘して繪葉書と共に此一事を永く抱懷致し可申候
表装の事も小生の注文より橋口氏の工夫したるものに有之此事を同氏に申聞け候はゞ定めし滿

足致し可申と存候

先は右御禮迄匆々如斯に御座候。此御禮は出鱈目の御禮に無之眞劍の御禮に御座候頓首

魯庵先生

坐右

金

猫儀只今睡眠中につき小生より代つて御返事申上候間不惡御容赦願上候

三〇六

十一月一日 水 午後五時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 廣島市猿樂町鈴木三重吉へ〔繪はがき〕
拜啓本一日廣島の柿と嚴島の貝を頂戴。御心にかけれられわざ／＼御送り被下難有存候。
先達加計君がきてとう／＼僕の音聲を蓄音機へ入れて歸りました。
東京は東郷大將の歡迎會やら、ブライアンがくるやら中々賑ひます。
小生は不相變胃病。晚餐を食ふとぐう／＼寐て仕舞ひます。是で大學の教師が勤まるかは頗る疑問です。

三〇七

十一月三日 金 午前零時四十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 本郷區本郷六丁目二十五番地藪
中方野村傳四へ〔はがき〕宛名に「野村傳四先生」とあり署名に「夏目先生」とあり

中央公論が出たから是非買つて読んで。而して。褒めて頂戴。本日本郷の雑誌屋で文庫の六號活字を見た。夏目漱石の吾輩は猫である大牧壹圓、金が餘つて困つて居る人でなければ買ふべからず。く。れ。て。も。讀。む。の。が。惜。し。い。ヤ。と。あ。つ。た。此六號活字先生は買ふ事も出来ず貰ふ事も出来ないのだらうと思ふ。依つて二版が出来たら一部献上し様と思ふがどうだらう。烏みづ先生へ宛て、やればよからうと存するが如何。

三〇八

十一月三日 金

がき

午前零時四十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 廣島市猿樂町鈴木三重吉へ〔は

頂戴仕つた柿を其後食つて見た處非常に旨いですよ。毎日食後に一つ宛たべます。家内のものもたべます。貝は小供がおもちやにして居ます。

餘は後便

加計君によろしく

あすは天長節で休みです。うれしい。

三〇九

十一月五日 日

田儀作へ

午後六時(以下不明) 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 神田區三崎町三丁目一番地前

拜啓高著夏花少女御惠贈にあづかり難有拜受仕候只今少閑をぬすんで一氣に讀了致候小生は多く新體詩と申すものを讀ます詩集を通讀致し候は大兄の御作を以て始めと致候。多く此種の文字に接せざる爲め所々難解の所有之候へども全體の上に於て妖麗瑰琦の感を生じ候爲め不少愉快を覺候。御返禮の爲め拙著至極卑俗のものに候へども一部贈呈致し度と存候處只今再版印刷中にて刻下の間にかね候間是はあとより差上ぐる事と致候こゝには御禮のみ申上候
猶來年新年號に蕪稿御入用のよし拜承は仕り候へども生憎正月は方々より依頼を受け到底一人にて引き受けかね候位先づ義務的のもの一二を除くの外は不得已謝絶致し居候切角の御懇望を空くする段甚だ不本意の至には候へども學校其他多忙にて閑日月なき目下の境遇事情御察しの上あしからず御容赦被下度候 頓首

十一月六日

林 外 先 生

座右

三一〇

十一月六日 月

綱へ〔はがき〕

午後三時五十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 芝區琴平町二番地朝陽館野間眞

僕二重廻しを作りたい。に依つて、君の洋服屋を一寸よこしてもらひたひ。午前は不在、午後二時半過ぎ。但し暗くなつては稿が見えないから駄目。序に洋服屋の名と番地を教へ玉へ。昨

日高田知一郎先生がくる

三二一

十一月 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 皆川正禧へ「うつし」

拜啓先日は蕪露行の批評頂戴難有候今般中央新聞にて文藝に關する日曜附録發刊の計畫ある由にて福原君來訪何か寄稿を求められ候處生憎多忙にて何もかけず因て思ひ出し候は先日神泉へ出す爲に貴兄が岡倉の許へ行つて筆記した原稿はまだあの儘にて御手許にある筈故あれを此方へ御廻し被下候はゞ小生の義理も立ち中央新聞社の便利にもなり福原君の責任も全くなると云ふ次第ですが如何ですか此依頼を御引き受け下さる譯には参りますまいか尤も岡倉君へは是非照會の上許諾を得ねばならん事と存じますが御不都合なきかぎりはよろしく御取計ひを願ひます
猶委細は此次御面會の上萬縷可申上候先日梨雨君來訪明星に何か書いてくれと申され候是も多忙にて乍不本意斷り申候 以上

三二二

十一月十日 金 (時間不明) 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 廣島市猿樂町鈴木三重吉へ

啓

三重吉さん一寸申上ます。君は僕の胃病を直してやりたいと仰やる御心切は難有いが僕より君の神経痛の方が大事ですよ早く療治をして來年は必ず出て御出でなさい。僕の胃病はまだ休講を

する程ではないですが來年あたりは君と入れ代りに一年間休講がして見たいです。大學の教師だとか講師だとか申して評判をしてくれますが一向ありがたくはありません。僕の理想を云へば學校へは出ないで毎週一回自宅へ平常出入する學生諸君を呼んで御馳走をして冗談を云つて遊びたいのです。中川君杯がきて先生は今に博士になるさうですなかと云はれるとうんざりたるいやな氣持になります。先達て僕は博士にはならないと呉れもしない「い」うちから中川君に斷つて置きました。さうちやありませんか何も博士になる爲に生れて來やしまいし。

君は島へ渡つたさうですね。何か夫を材料にして寫生文でも又は小説の様なものでもかいて御覽なさい。吾々には到底想像のつかない面白い事が澤山あるに相違ない。文章はかく種さへあれば誰でもかけるものだと思います。……僕は方々から原稿をくれの何のと云つて來て迷惑します。僕はホト、ギスの片隅で出鱈目「目」をならべて居れば夫で満足なのでそんなの方々へ書き散らす必要はないのです。……文庫といふ雑誌の六號活字がよく僕のわる口を申します。……文章でも一遍文庫へ投書したらすぐ褒め出すでせう。……段々秋冷になりました。今日は洋服屋を呼んで外套を一枚、二重廻を一枚あつらへました。一寸景氣がいゝでせう。猫の初版は賣れて先達印税をもらひました。妻君曰く是で質を出して、醫者の藥禮をして、赤ん坊の生れる用意をすると、あとへいくら残るか聞いていたら一文も残らんさうです。いやはや。一寸此位で御免蒙ります。又ひまが出來たら何かかいてあげます。

集前書

十一月九日

三重吉様

金

三重吉さん。先生様はよさうちやありませんか、もう少しぞんざいに手紙を御書きなさい。あれはあまり丁寧過ぎる

三一三

十一月十日 金 午前零時十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 芝區琴平町二番地朝陽館野間眞綱へ〔はがき〕

拜啓本日洋服屋参り豫定の如く新詔のもの申しつけ候。御手数難有存候。蕪路^原行の批評も難有候。あの手紙は三日の消印あるにも關せず七日に到着馬鹿〔々々〕しいちやげーせんか。附箋も説明も何もありやせん。夫から遞信大臣に逐一事情を報告に及んでやりました。僕が大臣に手紙を出したのは生れて始めてです。尤も遞信大臣の名を知らなかつたから二三人に問ひ合して大浦君だといふ事を確かめてかいてやりました。あの手紙を見て郵便配達^の取締を嚴にして、且延着の理由を僕の所へいふてくれれば大臣だが、平氣で居るなら馬鹿だ——ねー君。

三一四

十一月十一日 土 午後五時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 芝區琴平町二番地朝陽館野間眞綱へ〔はがき〕

野間君。小澤平吾は詐欺師なる事相分り大變な奴ですよ。文科大學助教授文學士小澤平吾なる名刺をふり廻し諸所をごまかしてあるく由。——昨日内田不知庵から注意が参り。本日は神泉に

關係の畫家古城天風二君参り多額の畫をかたられた話を致し候。御用心の事。全體どうしてあんなものを紹介したのかね。僕の名前なんか方々へ行つて振り廻す由

三一五

十一月十三日 月 午後五時十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 本郷區本郷六丁目二十五番地藪中方野村傳四へ〔はがき 表の署名に「なつめきむ」とあり〕

君の盡力に因つて眞砂座を見る筈の處少しく都合が出来て同行が出来ぬから一人で行つてくれ玉へ

手のない人に手を出せといふのは愚物に賢人になれといふ様なものだ是は近頃失敬の至であつた然し僕杯はない學問を出して講義をする位だから學生の方でもない手位はだしてもよさうに思ふ。

三一六

十一月十五日 水 午後五時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 本郷區本郷六丁目二十五番地藪中方野村傳四へ〔はがき〕

昨夜下駄物語をよむ。うまく出来ました。文章が段々上手になつてくる結構々々。あれはあとがあるのだらうね。あれ文では纏まらない。あの茶屋の所は寫生だね。どうも寫生は無理がないから生きて居る。

三一七

十一月二十五日 土 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 大町芳衛へ 「三十九年三月十五日發行『文章世界』(寫眞版)より」

猫は大分諸方で褒められましたから少々痛い處を喫する方が本人の爲と心得ます。善惡に關らず御批評被下たとあれば難有仕合に存じます。然し少しはほめて呉れたんでせうな。呵々

十一月二十五日

金

桂 月 兄

座右

追白大兄の批評は青年界に大勢力ある由なれば滅多に「猫」の悪口杯を云つてはいけません。悪口を云つて仕舞つたら仕方がないから後篇が出たとき大にほめて帳消にして下さい。

三一八

十一月二十六日 日 午前(し)零時十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 麴町區富士見町四丁目八番地

高濱清へ

御手紙拜見文章會を來月九日にしては如何との御問合せ別段差支もなさうなれど夫迄に猫が出来るや否やは問題に候。帝國文學は十五日迄に草稿が入用のよし。實は帝文をさきへ書いて然る後猫に及ぶ量見の處此方が未だ腹案がまとまらずどれをかゝるかあれにせうかこれにせうかと

迷つて居る最中然もこれもこれといざとならぬと纏つた趣向がないのでまだ手を出さずに居る夫故に此方を三四日中にかき出してかりに一週間と見れば大丈夫から猫とするも是も長くなるかも知れないが一週間あれば安心すると九日の開開ではちとあぶない其次の土曜ならよからうと思ひます。尤も小生近來は文章を讀む事が厭きた様だから自分に構はず開いて頂戴猫は出來れば此方から上げます。一體文章は朗讀するより默讀するものです。僕は人のよむのを聞いて居ては到底是非の判断が下しにくい。いづれ僕のうちでも妻君がバカンポーを腹から出したら一大談話會を開いて諸賢を御招待して遊ぶ積に候 頓首

十一月二十四日

金

虚子 先生

僕は當分のうち創作を本領として大にかく積りだが少々いやになつた。然し外に自己を發揮する餘地もないから矢張り雑誌の御厄介になる事に仕つた

此度の猫は色々かく事がある。其内で苦沙彌君の裏の中學校の生徒が騒いで亂暴する所をかいて御覽に入れます

三一九

十二月四日 月 午前零時十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 芝區琴平町二番地朝陽館野間眞綱

へ (はがき)

御邸の御嬢さんが病氣ぢや大變だ。若い美しい女の病氣程世の中に大事件はない。御用心御用

心

十二月三日

三三〇

十二月四日 月

午前零時十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 麴町區富士見町四丁目八番地高濱

拜復

十四日にしめ切ると仰せあるが十四日には六づかしいですよ。十七日が日曜だから十七八日にはなりません。さう急いでも詩の神が承知しませんからね。(此一句詩人調)とにかく出来ないです。今日から帝文をかきかけたが詩神處ではない天神様も見放したと見えて少しもかけない。いやになつた。是を此週中にどうあつてもかたづけける。夫からあとの一週間で猫をかたづけけるです。いざとなればいや應なしにやつけます。何の蚊のと申すのは未だ贅澤を云ふ餘地があるからです。桂月が猫を評して稚氣を免かれず杯と申して居る恰も自分の方が漱石先生より經驗のある老成人の様な口調を使ひます。アハ、ハ、ハ、ハ。桂月程稚氣のある安物をかく者は天下にないぢやありませんか。困つた男だ。ある人云ふ漱石は幻影の盾や薙露行になると餘程苦心をするさうだが猫は自由自在に出来るさうだ夫だから漱石は喜劇が性に合つて居るのだと。詩を作る方が手紙をかくより手間のかゝるのは無論ぢやありませんか。虚子君はさう御思ひになりませんか。薙露行杯の一頁は猫の五頁位と同じ勞力がかゝるのは當然です。適不適の論ぢやない。二階を建て

るのは驚ろきましたね。明治四十八年には三階を建て五十八年に四階を建て、行くと死ぬ迄には餘程建ちます。新宅開きには呼んで下さい。僕先達で赤坂へ出張して寒月君と藝者をあげました。藝者がすきになるには餘程修業が入る能よりもむづかしい。今度の文章會はひまがあれば行くもし草稿が出来ん様なら御免を蒙る。以上頓首

十二月三日

金

虚子 先生

三三一

十二月六日

水

午後五時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 芝區琴平町二番地朝陽館野間眞綱へ

〔はがき〕
御嬢さん御かくれのよし。惜しい事をしましたな。美しい小女の死ぬ程詩的に悲しい事はない。死んでいゝ奴は千駄木にゴロ／＼して居るのに思ふ様にならん。

白菊の一本折れて庵淋し

〔以下行間に認めあり〕

僕は御嬢さんの御墓参りがしたい。いつかつれて行き玉へ。草稿をかくのでいそがしい。十七日頃迄は来てはいかん。

三三二

十二月九日 土 午後三時五十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 本郷區本郷六丁目二十五番地藪

中方野村傳四へ〔はがき〕

傳四先生下駄物語につき明星でわる口をかい居る御覽なさい。今日の文章會は休席。帝文の原稿がまだ出来ない。人がこない様に手筈をすと思ひがけない人がくる。然り而して僕も其實あまりかく氣が御座らん。猫もかゝなくてはならん。

僕は小説家程いやな家業はあるまいと思ふ。僕なども道樂だから下らぬ事をかいて見たくなるんだね。職業となつたら教師位なものだらう。島津の御嬢様はとんだ事をした。僕が代理に死んでやればよかつた。

三三三

十二月十一日 月 午前六時二十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 麴町區富士見町四丁目八番地

高濱清へ〔はがき〕

時間がないので已を得ず今日學校をやすんで帝文の方をかきあげました。是は六十四枚ばかり。實はもつとかゝんといけないが時が出ないからあとを省略しました。夫で頭のかつた變物が出来ました。明年御批評を願ひます。猫は明日から奮發してかくんですが、かうなると苦しくなりますよ。だれか代作を頼みたい位だ。然し十七八日迄にはあげます。君と活版屋に口をあけさせては濟まない。

三二四

十二月十八日 月 午後二時二十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 麴町區富士見町四丁目八番地

高濱清へ

啓 先刻の人の話では御嬢さんが肺炎で病院へつめきりださうです。ね少しは宜いですか。大事になさい。

僕の家バカンボ誕生矢張女です。妻君發熱猫はかけないと思ふたらすぐ下熱先々大丈夫です。猫は一返君によんでもらう積りで電話をかけたのですが失望しました。はじめの方のかき方が少し氣取つてる氣味がありはせんかと思ふ。夫から終末の所はもつと長く書く筈であつたがどうしても時間がないのであんな風になつたんです。

此二週間帝文とホト、ギスでひまさへあればかきつゞけもう原稿紙を見るのもいやになりました。是では小説杯で飯を食ふ事は思も寄らない。

君何か出来ましたか。病人杯の心配があると文章杯は出来たものぢやない。

今日はがっかりして遊びたいが生憎誰もこない。行く所もない。

先々正月に間に合ふ様に注文通り百枚位書いて安心しましたよ

十八日

金

虚子様

三二五

十二月二十一日 木 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 上田敏へ〔封筒なし〕
拜啓伊豫紋會〔の〕事御通知敬承仕候

山妻先日出産、二女發熱ハシカだか何だか分らず。もしハシカが赤ん坊に傳染すると赤ん坊は忽ち成佛仕る由もしさうなると伊豫紋所の騒ぎにあらず然し今日はそんな危険もなささう故席末をけがす積りなれどもし萬一欠席したらそんな事と思つて頂戴。

小生酒の味を會せず歌はラツバ節もうたへず然り而して伊豫紋杯へ參る資格があるものでせうか 匆々

十二月二十一日

金

上 田 君

三二六

十二月二十四日 日 午後三時五十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 廣島縣佐伯郡中村下田方鈴

木三重吉へ

鈴木子の信書を受取りて

只寒し封を開けば影法師

三二七

十二月二十四日 日 午後三時(以下不明) 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 麴町區三番町十番地市來

松風へ

啓

猫のこよみわざ／＼御持參被下難有頂戴致しますあんな妙なこよみは見た事がありません柱にかけて眺めて居ります。

風呂敷を置いて行かれました。當分の間御あづかり申します。其内遊びに入らつしやい。

來年正月のホト、ギスには長いのをかきましたどうぞ讀んで下さい。面白くない所があつたら遠慮なく注意して下さい。先は右御禮迄 匆々頓首

十二月二十四日

金

松 風 雅 兄

三二八

十二月二十九日 金 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 本所區茅場町三丁目十八番地伊藤左千夫へ

拜啓只今ホト、ギスを讀みました。野菊の花は名品です。自然で、淡泊で、可哀想で、美しく、野趣があつて結構です。あんな小説なら何百篇よんでもよろしい。三六頁の 民さんの御墓に參りに來ました

と云ふ一句は甚だ佳と存じます。只次にある「只一言である云々」の説明はない方がよいと思ひます

小生帝文に興味の遺傳と云ふ小説をかきました君の程自然も野趣もないが亡人の墓に白菊を手向けるといふ點に於て少々似て居りますから序によんで下さい。

押しつまつて御多忙の事と存じます。新年は缺禮致します。以上

十二月二十九日

金

伊藤大兄

三二九

十二月三十一日

午後三時五十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ

拜啓本日書店より藝苑の寄贈をうけて君の病葉を拜見しました。よく出来て居ます。文章杯は随分骨を折つたものでせう。趣向も面白い。然し美しい愉快な感じがないと思ひます。或は君は既に細君をもつて居る人ではないですか。それでなければ近時の露國小説杯を無暗によんだんでせう。どつちから来たか知らんが書物か、實地から来たに相違ない。然しあれをもつと適切に感ぜさせるのはあの五六倍かゝないと成程とは思はれないですよ。凡ての因縁ものは因縁がなる程と呑み込める様に長たらくかゝんと面白くゆかぬ様に思ひますがどうですか。あれで悪いといふのではない。長くしたらもつと面白く見えるだらうと云ふのです。あゝ云ふ裏面の消息は表面

の戀をかき盡して種切れになつた時に考へ出すか又は自分が経験を積んで表面の戀が馬鹿々々しくなつた時に手をつけるものだ。君の若さであんな事をかくのは書物の上か又は生活の上で相應の源因を得たのでありませう。ホト、ギスに出た伊藤左千夫の野菊の墓といふのを讀んで御覽なさい。文章は君の氣に入らんかも知れない。然しうつくしい愉快な感じがします。以上

十二月三十日夜

金

白楊兄

今朝又讀み直して見ました。あれを今少々活躍させる工夫があると思ひます。あれ文の短篇では今少々活躍させんと完璧とは云はれない。それでなければもつと長くかく。三十一日

三三〇

一月一日 午前零時—五時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 廣島市猿樂町鈴木三重吉へ

加計君の所へいつか手紙をやりたい。宿所を教へ玉へ

拜啓

御通知の柿昨三十日着直ちに一個試みた處非常にうまかつた。コロ柿は堅過ぎるがあれは丁度好加減です。小供にもやりました。君の神經衰弱は段々全快のよし結構小生の胃病も當分生命に別條はなささうです。君が芝居をやる杯は頗る見ものだらうと思ひます。全體何の役をやる積りか一寸御一報にあづかりたい。今日は大晦日だが至つて平穩借金とりも参らず炬燵で小説を讀んで居ます。ホト、ギスを見ましたか。裏の學校から抗議でもくれば又材料が出来て面白いと思つ

て居る。此學校の寄宿舎がそばにあつて其生徒が夜に入ると四隣の迷惑になる様に騒動する。今夜も盛にやつて居る。此次は是でも生捕つてやりませう。仕舞には校長が何とか云つてくれればいいと思ふ。喧嘩でもない猫の材料が拂底でいかん。伊藤左千夫の野菊の墓といふのをよんだですか、あれは面白い。美くしい感じする。一昨日から雪今日も曇中々寒い。昨日は中川が來ました。君が芝居をやる所を猫にかきたい。多々良三平と自認せる俣野義郎なるもの五六度も親展至急で大學へむけ猫中の取消を申し來る。新聞で廣告して取り消してやらうかと云つたら御免と云ふてきました。當人は人格を傷けられたとか何とか不平をいふて居る。呑氣なものである。人身攻撃も文學的滑稽も區別が出來ないで自ら大豪傑を以て任じて居るのは餘程氣丈の至りだと思ふ。

君早く出て來給へ

早稲田文學が出る。上田敏君杯が藝苑を出す。鷗外も何かするだらう。ゴチや／＼メチや／＼其間に猫が浮きつ沈みつして居る。中々面白い。猫が出なくなると僕は片腕もがれた様な氣がする。書齋で一人で力味ちからあじんで居るより大に大天下に屁の様な氣篋をふき出す方が面白い。來學年からは是非出て來給へ

明日丸山通一といふ獨乙語の先生の所へ午飯に呼ばれた。何の因縁か分らないがまづ御馳走になる方が得策だと思つて承引した。

うれしきも悲しきも眼前の現象。月も花も刻下の風流。定業は何十年か知らないが、御駄佛となる迄はまづ／＼此の如くであらうと思ふ。珍重

三十八年大晦日の夜

金

三重吉様

今日野村傳四と上野を散歩したら、耶蘇教の戶外演説があつた。聞き手は一人もない。大晦日である。人間は衣食の爲めには狂氣じみた事も眞面目にやるものですな。其例澤山あり。

明治三十九年

三三一

一月四日 木 午前(以下不明) 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 松山市下京町小島武雄へ

拜啓賀狀拜見致候吉松氏任地にて評判よろしき由本懐の至うれしく候拙作御通讀彼下候由難有奉謝候本年も相變らずつまらぬものをかゝねばならぬ事と存候御覽被下候はゞ幸甚に候。本年より早稲田文學藝苑其他にて文壇も大分賑やかに候。其間に立ちて出頭没頭の陋態を極め候事大悟の達人より見れば定めし可笑しからんと折々は自らさへも失笑致候先は御返事迄 勿々頓首

三十九年一月三日

金之助

小島様

三三二

一月六日 土 午後四時—六時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 牛込區市谷砂土原町三丁目十八番

地内田貢へ

拜啓イワンの馬鹿御奇贈を蒙り深謝早速讀了致候小生淺學にてイワンの原書をよまざりし爲め

却て一段の興味を覚え候。どうかしてイワンの様な大馬鹿に逢つて見たいと存候。

出来るならば一日でもなつて見たいと存候。近頃少々感ずる事有之イワンが大變頼母しく相成

候。イワンの教訓は西洋的にあらず寧ろ東洋的と存候。右不取敢御禮迄草々頓首。

一月五日夜

金之助

魯庵兄

三三三

一月八日 月 午前(以下不明) 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方

森田米松へ

啓、長い手紙を頂戴面白く拜見致しました。御世辭にも小生の書翰が君に多少の影響を與へたとあるのは嬉しい。夫程小生の愚存に重きを置かれるのは難有いと云ふ譯です。小生は人に手紙をかく事と人から手紙をもらふ事が大すぎである。そこで又一本進呈します。

「野菊」を御讀みの由。詳細の御評拜見御尤もの事ばかりです。今度作者に逢つたら見せてやります。定めし喜ぶでせう。あの男は職業は牛乳屋で子規存生のみぎり一所に歌を研究して今でもアシビといふ雑誌を出して居る。小生は二三度會したがり交際もない人です。あの作も一句一句吟味すると技巧の上では大分足らぬ所があると思ふ。君は讀むまいが矢張り前のホト、ギスに出た寺田寅彦と云ふ人の「團栗」とか「龍舌蘭」とかいふ作の方が遙かに技倆上の價値がある。只野菊に取るべき所は眞率の態度を以て作者が事件を徹頭徹尾描き出して居る點である。あれ文

の材料を普通の小説家にとり扱つたならもつと似非藝術的なものにして仕舞ふと思ふ。そこが頼母しい所だと思ふが、どうです。趣向は仰せの如く陳腐です。寧ろ月並臭を脱しない。然し仰せの如く月並臭くないからいい。それから君の非難をする箇所は一々尤もである。僕も多少さう思ふ。但し女が死んでからの一段はあれでいい、實際です。尤も君の云ふ様にすれば死といふものに對して吾人の態度が違つてあらはれてくる許りである。死に崇高の感を持たせやうとするときは、其方を用ゐるがよいと思ふが、死に可憐の情を持たせるのは、あれでなくはいかぬ。野菊の行きがよりから云ふてあれでなくはものにならない。調和せんと思ふ。死は一つである。然し吾人の死に對する態度は色々ある。此態度如何で讀者の感じが違つてくる。然も其色々な態度が皆眞といふ事がいへると思ふ。

女が猿股をいやがる所や、笠を被らない所は妙ですよ。つまり君の云ふ如く、あんな所で活動すると思ふ。女が死んで寫眞を持つて居るのは寧ろ幼稚です。もつと上等に行けばそんな眼に見えるものを持たないでそれ以上の感じを起させるがいい。然しそれは中々大手腕が入る。前後の關係から云つて、寫眞を握つて居たので一種の趣意が貫ぬいて、女の病死に落ち付きが出来るといふ點から見れば何にもかゝないより善い。

病葉に就いて一言蛇足を添へるが。主人公が何だか六づかしい本を讀んで居る。あれは必要があるのですか。突然あれを讀むと。故意にあんな本を讀ませて居る様な、初心な氣障な感じがする。もつと長いもので主人公が一種の人物であんなものを讀むべき傾向を有して居るか、又はあの本があつた中に一種の關係を有して居るなら故意とは思はれなかつたらう。尤も後段に一寸

關係が出るがあれ丈では、あんな本をよます必用はないと思ふ。

容赦なく云へば君は文に凝り過ぎて失敗しさうな懸念が僕にある。あまり凝ると抜目がない代りに何となく窮屈な苦しい感じがするでせう。第一長いものは到底根氣がつかないと思ふ。

僕は君の文が出る度に讀みます。さうして時間の許す限り、心づく限りは愚評を加へる積りです。其代り悪口を云つても怒つてはいけません。大學では君の先生かも知れないが個人として文章杯をかく時は同輩である。決して僕に對して氣を置いてはならぬ。君はあまりに神經的、心配的、人の心を豫想しすぎる様な傾向がありはせんかと思ふ。他人に對してはとにかく僕に對してはさうせん方がいい。君も氣樂でいいでせう。野村傳四杯は氣樂なものである。あまり長くなるから是でやめます。 不

一月七日

金之助

森田 兄

三三四

一月十日 水 午前零時—五時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 仙臺市第二高等學校齋藤阿具へ

〔はがき〕

集館書

昨冬はわざ／＼御出被下今春は早速御出にあつかり奉拜謝候小生例の如く疎慵欠禮御免可被下候。もはや仙臺へ御歸りと存じ御詫迄一寸申上候以上

一月九日

一月十日 水 午後二時—三時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ

又手紙をあげます。もう少し立つと色々多忙になつて到底返事らしいものはかけないから只今少々ひまのあるのを幸にこれをかきます

君は大分長い手紙をかいてよこしましたね。あれ丈かくのは大分時間をとるに相違ない。僕の爲めに^原なんな勞力を費やしたと思ふと中々頼母しい心持ちで讀みました。何か不平でも氣儘でも洩したい時に時間があつたらいつでも僕の所へ云つて寄こしてくれ玉へ。僕は讀むのを楽しみにして居る。其代り必ずそれに匹敵する長い返事は出されぬかも知れません。

野菊の墓の評をかいて下さる由定めし本人(即ち牛乳屋の主人)はよろこぶだらう。どうかかいてやつて下さい。左千夫なんて聞いた事もない人だから誰も相手にはしてくれん。切角出色の文字でも誰も相手にせんで甚だ氣の毒である。君が評をしてやれば僕も何だか愉快な氣がする。而も君の評は十中八九迄僕と同様であると思ふから猶更愉快である。然しわるいと感じた所は遠慮なく云ふてやつて下さい。本人の参考になります。

牛乳屋が氣に入つたといふのは見上げたものです。牛乳屋の主人の方が大學の講師よりも氣韻があると思ふ。顔も頗る雅な顔ですよ。あんなものがかけさうでもない。

君は衣食の爲めに充分學問が出来んのを苦痛に感じて居る様だが御尤もです。僕も貧乏で十八

九の時から私立學校を教へて卒業迄やり通したが其時分は別に何と云ふ考もなかつたから左程驚きもしなかつた。是が今日の君の様であつたら矢張り大煩悶であつたらう。夏休みに金がなくつて大學の寄宿に籠城した事がある。而して同室のものゝの置き去りにして行つた蚤を一身に引き受けたのには閉口した。其時今の大家君が新しい革靴を買つて歸つて来て明日から興津へ行くんだと吹聴に及ばれたのは羨やましかつた。やがて先生は旅行先きで美人に惚れられたと云ふ話を聞いたら猶うらやましかつた。

僕もその時分から眞の勉強(君の所謂ウイストムを得る工夫)でも熱心にしたら今はもう少し人間らしくなつて居らうと思ふ。其時分は本の名前を覚えて人に吹聴するのが學者だと思つて居た。趣味杯も低いものであつた。物の道理も今の若い人程は到底わからなかつた。要するに今でも愚物であるが當時は猶々愚物であつた。尤も見識はあつたが、只人を下げる見識で自分が證得したポジチヴの見識ではなかつた。

僕もそれだから大に聰明な人になりたい。學問讀書がしたい。従つてどうか大學をやめたいと許り思つて居ます。先達晩翠が年始狀をよこしてまだ教授にならんかと云ふから「人間も教授や博士を名譽と思ふ様では駄目だね。失樂園の譯者土井晩翠ともあるべきものがそんな事を眞面目に云ふのはよくない。漱石は乞食になつても漱石だ……」と云ふ様な事をかいてやりました。あとで成程小供らしい氣儘だと氣がついた。

君が人の作を讀む態度は甚だよろしいと思ふ。それでなければクリチシズムは出来ない。只人の長所を傷けない文の公平眼は是非共御互に養成しなければならん。僕は人の作に對して只面白

く讀みたい。よんでやりたいと云ふ氣が先へ起る。然し讀んで仕舞つて是は敬服したといふ様なものはあまり少ない。矢張り西洋人の方がそんな感じを引き起させる事が多い。然し西洋人だからといつて決して一目置いて讀むのではない。二三日前鏡花の海異記とか云ふものをよんで驚ろいた。どうも馬鹿々々しいと云ふ感より外に起らなかつた。それから彼の文章のかき方がいやに氣取つて居て嫌だと云ふ感じがあつた。警句は無論澤山ある。あれをなせもつとうまく繋げないのかと思ふ。かう感ずるが僕は鏡花に對して憎惡心も何も有して居らん寧ろ好意を以て迎へよむのである。こんなのは矢張り天性の趣味の相違でありませう。

君の手紙をよむと君の人間を賞ぬいて見る様な心持がします。君と二三月交際しても、あれ程には分るまい。人に自己を打ち明けるといふ事は放膽の所爲である。打ち明けられた人は其放膽をほめるのではない。他に打ち明けぬものを自分にのみ打ち明けてくれたと云ふ特許を喜ぶのである。

自分の弱點に對しては二様に取り扱ふ方法がある。一は之を隠して自己の虚榮心を失望させまいとする。是は誰でもやつて居ます。僕もやつて居ます。然し決して満足が得られるものではない。一はコンフェッションである。然し無用の人若しくは此コンフェッションをきいて之を輕蔑する人若しくは之を利用して害を加へやうとする人には自白したくない。だから此場合には己れの信ずる人、若しくは敬する人、或は教を垂れて訓戒してやらうと思ふ人に自白するのである。其時は甚だ愉快を覺えるものだ。單に本人が愉快を覺えるのみならず。相手も快よく思ふ。君がもし君の書中に自己の弱點も構はず吐露したとすれば、其點に於て君は愉快である。僕が君の自白

を聞き得たる相手とすれば僕も愉快である。

これからはいそがしくなるといつこんな長い手紙をあげられるか分らない。一先づ是で擱筆とします。以上

一月九日夜

森 田 兄

金之助

三三六

一月十四日 日 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 清國南京三江師範學堂菅虎雄へ

拜啓平生は御無沙汰をして濟まん。年禮も賀狀も今年は全廢として見たが矢張り中川元さん杯からくるとさうも行かぬ。君の留守宅へも失敬して仕舞つた。いづれ妻がまかり出る。僕のうちでは又去年の暮に赤ん坊が生れた。又女だ。僕の家は女子専門である。四人の女子が次へ次へと嫁入る事を考へるとゾーツとするね。貯蓄をせんといかん。然るに去年の十二月杯は色々かつて三百圓近く仕拂つた。幸ひ著作の印税があつたので間に合つたが何しろ。金の入るのには驚くね。君は出来る文貯蓄をせんとゆかぬ。君に返す金は矢張り十圓宛にして居る今年中位で濟むだらう。東京も別段變つた事もない。近頃は天氣がいゝ。狩野も大塚も藤代も例の如くだ。藤代位學校を欠勤する男は珍らしいね。僕大學をやめて江湖の處士になりたい。大學は學者中の貴族だね。何だか氣に喰はん。ホト、ギスを君の所へ送る様に依頼して置いたが行くだらうね。四月には歸るまいね。居られるならそちらに居るがいゝと思ふ。東京に口はなさうだ。まあ此位にし

て置かう此手紙は君が呉れた純羊毫でかいたのだいづ迄立つても字はうまくならない。君の字は立派なものだ。御寺の額にでもありさうだ。繪端書には堅過ぎて釣り合はない。以上

金

正月十四日
虎雄様

三三七

一月十六日 火 午前零時—五時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 芝區琴平町二番地朝陽館野間眞

綱へ

今夜野村が雉子と巻紙を持って来てくれました。御親切にありがたう存じます。あの紙は妙な紙だね。此紙は寺田が高知から持つて来てくれたものだ。先達ては橋口が白紙の巻紙をくれた。其前は菅が唐紙を支那から持つてきてくれた。僕は紙大盡だ。今年中は紙を買はずに済む。君憂鬱病のよし結構に存候。憂鬱も快活も全く本人の随意と存候。小生杯は一日に兩方やり申候。昨日は野村と日本橋、神田、淺草を散歩致し候。柳橋で藝者に逢ひ候。其外竹本組玉、竹本團洲、都々逸坊扇歌の家をつきとめて歸り候。皆川には頓と逢はず候。頓首

金

正月十五日

眞綱様

島津の若大將には此方から禮狀を出す

三三八

一月十七日 水 午後四時—五時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 芝區三田君塚町十番地行村方皆川正禧へ

尊書拜讀野間は憂鬱病に罹つた由を申來候けしからぬ事に候。三十にもならないで憂鬱病杯と申す贅澤な事を申し候。

其後はしばらく拜顔の期を得ず。不相變餅を食つて御消光の事と存候。小生も例の如く漫然と消光致し居候。其うち會食でも致し度と存候

趣味の遺傳御讀み被下難有候。結末の氣呵成の所をほめて下されたのは望外の幸福と存候。實は時間がたりなくて、かけなかつたのです、仕舞をもつとかゝんと、前の詳細な敘述な比例を失する様に思ひます。

あれは誤植誤字だらけであります。

野菊の墓の末段をわるく云ふ人は君の外にあります。森田二十五絃が同様の事を云つて來ました。僕はさうも思はない。東京邊の家庭にはこんな御シャベリな婆さんがあるものだと思存候。

野間が雉子を届けてくれました。是は島津の若旦那の御見やげです。昨夜無暗にたべた所今日腹がわるく候。

いづれ其内 草々

十六日

金

皆川 兄

三三九

一月二十六日 金 午後三時—四時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 麴町區富士見町四丁目八番地

高濱清へ

其後御無沙汰仕候二月のほとゝぎすに何か名作が出来ましたか。僕つらく思ふにホト、ギスは今の様に毎號版で押した様な事を十年一日の如くつゞけて行つては立ち行かないと思ふ。俳句に文章にもつと英氣を鼓舞して刷新をしなければいかないですよ。と申して別に名案もないから只主人公たる君が大奮發をするより外に仕方がない。文庫新聲杯一時景氣のよいものが皆駄目になるのは時候後れだからと思ひます。ホト、ギスも賣れるうちに色々考へて置かぬとならんでせう。

先づ巻頭に毎號世人の注意をひくに足る作物を一つ宛のせる事が肝心です。夫から君は毎號俳話をかいて、四方太は毎號文話でもかいたらどうです。四方太は原稿料が出ないと云つてこぼして居るがあの男はいくら原稿料を出しても今の倍以上働くかどうか危しいものだ。とにかくもつと活氣をつけたいですね。小生餘計な世話を焼いて失敬だがホト、ギスが三四千出るのは寧ろ異數の觀がある、決して常態ではない油断をしては困る事になると思ひます。

そんなら僕に何かかけと來るかも知れんが僕は取りのけ別問題です。一寸手紙をかく序があるから是を差し上げます。苦い顔をしてはいけません 頓首

一月二十六日

虚子 様

金

三四〇

二月三日 土 午後三時—四時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 芝區琴平町二番地朝陽館野間眞綱

拜啓

先日皆川君のうちへ行く約束はしなかつた都合によつたら行くと申してやつた。然し待つて居たのは氣の毒である。小生例の如く毎日を消光人間は皆姑息手段で毎日を送つて居る。是を思ふと河上肇など、云ふ人は感心なものだ。あの位な決心がなくては豪傑とは云はれない。人はあれを精神病といふが精神病なら其病氣の所が感心だ。君の憂鬱病はどうなつた。金を百圓許り借りて大に青樓に遊んで見たまへ。大抵の憂鬱病は屹度全快する。放蕩は長く續くものではない。放蕩をつゞけると放蕩の方の憂鬱病が出てくる。さうしたら又勉強をする。又憂鬱病になる。又何か道樂をやる。是で澤山だ。是を姑息手段といふ普通の人間は大概やる。君は此姑息手段さへやらんから病氣になるのである。

近頃は訪問者が少々減じて難有い。忙しい事は依然として忙がしい。生涯此有様であらう。而して生涯落ちつく事はない。僕のキュー／＼して居るのも亦姑息手段に過ぎぬ。要するに大俗物になつて益大俗物たらんとアセルのだね。是ではどこがえらいか分らない。人間は他が何といつ

でも自分丈安心してエライといふ所を把持して行かなければ安心も宗教も哲學も文學もあつたものではない。 頓首

二月三日

眞 綱 様

三四一

二月六日 火 午後三時—四時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 芝區琴平町二番地朝陽館野間眞綱

拜啓陸軍の英語教師の口があつた由何より結構の事と存候實は君の口に就ては内々心配して居つたが是で僕も安心した精出して御勤めなさい決してなまけてはいけません。其内月給が上つて美人の妻君がもらへます。

金がとれて地位が出来ると憂鬱病も退散するだらうと思ふがどうですか。僕なんか百萬圓もらつても憂鬱病だね。 呵々

二月五日

眞 綱 様

三四二

二月七日 水 午前零時—五時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 本郷區本郷六丁目二十五番地敷中

方野村傳四へ

謹白傳四先生足下

僕の友人の西洋人が乃木將軍の傳をかくといふので吉田松蔭の著書を知りたいと申すが君だれかにきくか一寸圖書館で見てくださいか。尤もどこで賣つてるか分れば猶よい。夫から福地櫻癡の幕末記事は今賣つてるかね。いくらでどこに賣つてるか教へてくれ給へ。櫻癡といふ人の逸話を讀んだがあれは駄目な人間だ。然し當人は餘程えらいと思つてる。生前は可成有名でも死ねばすぐ葬られる人だ。一寸學校の成績はよくても卒業して駄目になると同じ事だね。然しあんな淺薄な人間でも人から大にもて囃されるのだから殊に女から屢惚れられるのだから妙なものだね。さうなると女に縁が遠い程えらい人といふ譯だね。君なんか少しは奢つてもいい。

三月には猫のつゞきをかく積りで居る。レクチュアはまだ一枚もかゝない。それで毎日々々何か蚊にか忙がしい。今度の猫に悪口をいふ材料はないかね。落文館なんか相手にならんから今度はやめにして又金田令嬢の御見識でもかゝうかと思ふ。

先達て女から手紙が来たよ夏目先生御許へとかいてある。見たければ御見やげを持つて居らつしやい。但し有體にいふと來ない方がいゝ 再拜

二月六日

傳 四 先 生

金

三四三

二月十一日 日 午前十一時—十二時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 廣島市猿樂町鈴木三重吉へ

昨夜君の手紙がきました。加計君が結婚したのは御目出たい。男爵の娘だなんてそんなものが山の中で役に立つでせうか。然しそれは餘計な事だ。とにかく御目出たい。君小説をかいたら送り玉へ。早く拜見仕りたい。近頃は色々な雑誌屋や何か来ていやになつて仕舞ふ。文章も作るひまがない。芝居は是からやるのですね。東京でも坪内さんの門下生がやりますよ。押入のなかで三味線をひくのは近世奇人傳にでもありさうだ。そんな事が出来れば病氣はまづ大丈夫です。猫の原書をかひにくるのは猫中の材料だ。色々な人があるものだ。大町といふ男が猫をよんで作者は氣の小さい陰氣な少し洒落氣のある男だと二度も三度も繰り返して居る。人民新聞といふのは僕が猫を作つて以來細君と仲が悪くなつたとあるさうだ。すると高等學校で其きり抜きを大事に校長に御目にかける。内田魯庵といふ男は夏目君は金田夫人に談判されて迷惑して居るさうだとある男に話したさうだ。

僕も此位有名になれば申分はないと思ふ。昔はこんな事が氣にかゝつて一々正誤しないと心持ちがわるかつた。今では却つて面白い心持ちがする。是から文章でもかいてながく居ると益僕の悪口をいふものが出て來ます。仕舞には漱石は昨日死んださうだ。いや瘋癲院へ這入つた。華族の御嬢さんから惚れたなんて妙なのが出て來るでせう。

今日は紀元節でいゝ天氣です。一昨日は雪でね。大變積つた。今日も道がわるい。昨夜は中川や何か四人ばかり来て夕飯をくつて快談をして暮らしました。廣島といふ所はどんな所か行つて見たい。廣島のものには僕の朋友が少々ある昔は大分つき合

つたものだ。猫のうちにある甘木先生も廣島の人だ。毎日役々としてくらすのが人間の目的だとあきらめて仕舞つたが本もよめず、樂に坐つて居る事も出来ないとなると一寸弱りますね。

もつと何かかゝうと思ふがいやになつたからやめ。加計によろしく云つてくれ給へ。妻君は美人ですか。 以上

二月十一日紀元節朝

三重吉様

三四四

金

二月十三日 火 午前八時—九時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ

尊書拜見

君の心の状態が果して君の云ふ所の如くなれば君は少々病氣に相違ない。病氣がわるいとも云はぬ。よいとも申さぬがつまり自分が苦しむ文不幸と云はねばなるまい。前の手紙にも云ふた如く君はあまり感じが強過ぎるので其鋭敏な感じに耽り過ぎた結果今日に至つたのであらう。そんな時には人が異見をしたつて慰めたつて容易に癒るものではない。自然に任せて於て同時に氣を晴らすより外に方法はない。そんな時に神経質な文學書杯を讀むと猶いけない。可成方面の違つた人間と話したり丸で趣味の違つた書物を讀んだり。若くは人と喧嘩をしたり。或は借金をして放蕩をして見たり。或は人に手紙を出して鬱氣を洩らすがいゝと思ふ。君は最後の手段に訴へて

手紙をよこしての^原かも知れないが、憍僕が君に同情を表して泣言を並べると君は多少頼りになるかも知れないが、病氣は益はげしくなる。去ればと云つて冷淡な返事をすれば矢張りわるくなる。或は月並な説教がましい事を云つたら何の功能もない事となる。是には僕も少々弱るな。僕も昔は非常に馬鹿で薄志で剛慢でしかも世人が大變恐ろしかったが今は大分變化して仕舞つた。性格は此三四年以來いぢるしく變化した。只氣分丈は矢張り若くて學生なんか友達の様な氣がする。

それで近來は僕が文章をかくものだから人が色々な事をいふ。大町なんかは僕の悪口を二度も繰返して居る。人民新聞では僕が猫を飼いて細君と仲がわるくなつたとかいたさうだ。ある人は僕が金田夫人に強迫されて迷惑して居ると話したさうだ。是が十餘年前なら眞面目に辯解する所だが今日ではそんな氣は少しもない。桂月なんて馬鹿だと頭から思つて居る。新聞なんて何をかかうと構はないときめて居る。なぜこんなになつたか分らない。又これがいゝとも斷言しない。然し昔より太平である。人間は太平の方が難有いに相違ない。人間として僕は決して君の師表たる様な資格はない。然し世の中にこんなえらい人になつて見たいと崇拜する人間は一人もない。だから君も君で一人前で通して行けば夫で一人前なのだから構はないか。人が笑ふから云々と云ふのは尤だが今の文壇で人の笑ふに價せざる者ばかりを作る人は殆んどない。丁度朋友其他の知人中に於て馬鹿の分子を含んで居らんものは一人もないと同じ事であらう。

先づ最前の大町桂月の様なのは馬鹿の第一位に位するものだ。竹風先生だつてあんなものだ。

樗牛なんて崇拜者は澤山あるがあんなキザな文士はない。然しみんな押を強くして平氣で居る。何も君一人が閉口する必要はない。つまらないと感じて文壇を退くなら分つて居るが。何もそんなに自分丈を妙に考へる必要はあるまい。僕なんかは蔭では矢張り僕が桂月其他を目する如く批評されてるのである。然し些とも構はん。蔭で云ふ事なんかはどうでもよろしい。文章もいやになる迄かいて死ぬ積りである。

他人は決して己以上遙かに卓絶したものではない又決して己以下に遙かに劣つたものではない。特別の理由がない人には僕は此心で對して居る。夫で一向差支はあるまいと思ふ。

君弱い事を云つてはいけない。僕も弱い男だが弱いなりに死ぬ迄やるのである。やりたくなくつたつてやらなければならん。君も其通りである。死ぬのもよい。然し死ぬより美しい女の同情でも得て死ぬ氣がなくなる方がよからう。

先達て憂鬱病だと云つた男にかう答へてやつた

「借金を百圓許して放蕩をやれば憂鬱はなほる。もし放蕩を永くつゞけると放蕩の方で憂鬱病が出る。さうしたら又放蕩をやめて勉強をする。是が普通の人間のとる尤も自然の方法である。是は姑息手段であるが誰にでも出来る。然しそんな面倒な事をやつたりやめたりせんで一度に天下太平になるのは。死ぬ丈の覺悟で以て大に考へ込んで近頃はやる自覺でもしなくてはなるまい。自覺になると僕は知らない事だから一言も云へない……」

僕の文章の評をしてくれたさうで寔に難有い。夫は拜見の上にてまた何とか申し上げやう 以上

十三日
森田様

金之助

三四五

二月十三日 火 午後五時—六時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ

今日歸宅の上藝苑を拜見した。僕の文の批評は結構であります。あれは頗る比例といふ點から云つては丸駄目の作である。趣味の遺傳といふ趣味は男女相愛するといふ趣味の意味です。猫は世の中があきた杯といふ事はない。二三の氣短かな連中がそんな事を云ひたがるのだ。猫の讀者はそんなに急にあきやしない。僕のつむじは眞直なものさ。猫をかくのは立派な考だと思つて。決してブク／＼湧いて出ては來ない。只無暗にかいてるとあんなものが出來るのです。

天下に己れ以外のものを信頼するより果敢なきはあらず。而も己れ程頼みにならぬものはない。どうするのがよいか。森田君君此問題を考へた事がありますか 頓首

二月十四日

金

森田君

三四六

二月十五日 木 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 小石川區指ヶ谷町七十八番地姉崎正治へ

拜啓今日は學校で立談の際御互の意志の通ぜぬ所もあるから改めて手紙で愚存を申し上げる。實は〇〇さんが逢ひたいとか又は折り返して罫紙入りの半官文的のものをよこすと又面倒だから君迄申して置く

英語學試験囑托辭任の事はあれで済んだ事と思つて居た所はからずも君等に御心配をかけて相済ん是は大に僕の謝する所である。謝する所であるから腹藏のない所を話して判斷をしてもらはう。

辭任の理由は多忙といふ事に歸着する。僕は一週間に三十時間近くの課業をもつて居る。是丈持たなければ米塩の資に窮するのである而してそれ以外にも用事がある。讀書もしなければならぬ。だから多忙といふのは伴りのない所で尤な理由である。

次に僕は講師である。講師といふのはどんなものか知らないが僕はまあ御客分と認定する。大學から普通の教授以上町重に取扱はれてもよいと考へて居る。大學の方ではさうは思はんかも知れんが僕の方ではさう解釋してゐる。従つて擔任させた仕事以外には可成面倒をかけぬのが禮である。

其代り講師には教授杯の様な権力がない自分の教へる事以外の事に口は出せない。夫等は皆教授會で勝手にきめて居る。語學試験の規則だつても講師たる僕は一向あづかり知らん。いつの間にかあんなものが出來上つて居るのである。

だからあんなものから生ずる面倒は之をきめた先生方と當局の講師が處理して行くのが至當である。自分たちが面倒な事を勝手に製造して置いて其勞力丈は關係のない御客分の講師にやれと

いふ理窟はない。

尤も相談づくならそれでもよい。○○○は僕を以て報酬がないからやらのだと教授会で報告したさうだ。其解釋は至當である。僕自身もさう考へて居る。僕の様なものに手數(擔任以外)をかけるには金銭か、敬禮か、依頼か、何等かの報酬が必要である。それがなくて單に……囑托相成候間右申し進候也といふ様な命令なら僕だつて此多忙の際だから御免蒙るのはあたり前である。

もし僕の辭任に對して學長始め其他の教授が不穩當と認めるならばそれ等の人々は講師と云ふものゝ解釋に於て全然僕と考を異にして居るのだ。僕の考では講師を使ふには教授を使ふよりも遠慮しなくてはならん。見玉へ講師は教授會の事に就て何等の權利ももつて居らんではないか。俸給の點から云つても無給のさへあるではないか。講師は教授に比すれば斯の如く特權が與へられて居らるのであるからして、講師の方では擔任以外の事を命令的に押しつけられてヘイヤ云ふ丈の義理がないぢやないか。

僕は僕の擔任する六時間の講義さへして居れば講師としての義務はそれ以外にはないものと信じてゐる。夫だからして文科大學宛で斷り狀を出した。もし文句がわるいと云ふなら是にも理由がある。文科大學から來たのだから個人に對する様な愛嬌のある文句はかけないのである。文科大學御中としてはあれ丈の表面上の事しか言ひ得ないのである。

君は親切に色々心配してくれるし井上さんもさうだといふから一應僕の考を述べて英斷を仰ぐ譯だ。でとにかく今回は御免蒙るよ。

此手紙は○○さんに見せても井上さんに見せても乃至は教授會で朗讀してくれてもさし差し支ない。君も迷惑だらうが妙に引きかゝつたもんだから宜しく取計つて下さい。以上

二月十五日

金之助

姉崎兄

三四七

二月十五日 木 午後二時—三時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ

又手紙をあげます

自分の作物に對して後悔するのは藝術的良心の鋭敏なので是程結構な事はない。此量見がなければ文學者になる資格はないと思ふ。

自分で自分の價値は容易に分るものではない。古來からちつとも文藝に志さなかつたものが急に筆を執つて立派な作を出した例は澤山ある。夫迄は自分の何物か分らなかつたのである。小説とか何とか云ふものは必ず一足飛びに大作は出來るとは限つて居らん。突然うまいものをかくのは天分の充分に發揮されべき機が熟した時に限るので他の人は書きつゝも熟しつゝも進んで行くのである。

僕の様なものに到底文學者の例にはならないが僕は君位の年輩のときには今君がかく三分一のものもかけなかつた。其思想は頗る淺薄なもので且つ狹隘極まるものであつた。僕が二十三四に

かきかけた小説が十五六枚残つて居た。よんで見ると馬鹿氣てまづいものだ。あまり耻かしいから先達て妻に命じて反古にして仕舞つた。

勿論今でも御覽の通りのものしか出来ぬが然し當時からくらべると餘程進歩したものだ。夫だから僕は死ぬ迄進歩する積りで居る。

夫から今日の事を申すと(例へば猫を一節かくと)此次にはもうかく事があるまいと思ふ然しわざとなると段々思想も浮んでくる先づ前回位なもの出来ぬ。すべてやり遂げて見ないと自分の頭のなかにはどれ位のものがあるか自分にも分らないのである。

君杯も死ぬ迄進歩する積りでやればいゝではないか。作に對したら一生懸命に自分の有らん限りの力をつくしてやればいゝではないか。後悔は結構だが是は自己の藝術的良心に對しての話して世間の批評家や何かに對して後悔する必要はあるまい。

君は自我の縮少を嘆じて居ると同時に君の手紙中には大に自我を立てゝ居る。君の手紙の如く我が立つて居ながら夫でも自から小さいと嘆息するのは必竟幾分かウソが籠つて居る。

コンフェシヨンの文學は結構である。コンフェシヨンの文學程人に教へるものはない。夫で澤山だから立派なものを書けばよい。容れられない事はない君は未だ其方面に於て雄飛して見ないのである。

君の文章には君位の年輩の人にしてはと思ふ様な警句が所々ある。夫丈でも君は一種の寶石を有して居る。君の手紙を見ると言廻し方の中々うまい所がある。他人が後悔せぬ所を恨む邊はうまくかきこなしたものだ。君の手紙のうちには形容の妙な言語もある。ドブ鼠の様に音もたてずに凍りついて死にたい杯は振つたものだ。

君の批評を見ると普通の雑誌記者杯よりも遙かに見識が見える。よくよんで居る。だから自分の作物上にでも其見識は應用され得るに相違ない。

僕は君に於て以上の長所を認めて居る。何故に萎縮するのである。今日大なる作物が出来んのは生涯出来んといふ意味にはならない。たとひ立派なものが出来たつて世間が受けるか受けないかそんな事はだれだつて受け合はれやしない。只やるだけやる分の事である。

衣食は無窮する事位覺悟しなければならぬ。そんなに贅澤をして見たり名文をかいて見たりしては其利がわるい。

此夏は君は卒業する。卒業すればパンの爲に苦しむ。當前である。それがいやなら、すぐに中学校の口をさがして田舎へ行けばよい。

僕の旋毛は直き事砥の如し。世の中が曲つて居るのである。猫は苦しいのを強いて笑つて許ぢやない。ほんとに笑つて居るのである。

此手紙に對して別段返事はいらぬ。只奮つて強勉し玉へ 以上

二月十五日

森 田 兄

三四八

二月十七日 土 午後四時—五時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 小石川區指ヶ谷町七十八番地姉

崎正治へ

拜啓

君の返事は拜見した。個人としての御忠告は難有感謝する。決して悪意を以て見る様な事はしない。たとひ指圖であつても決して怒りはせん。

然し學長からもう一返何とか云つてきた時に何と挨拶するかはあらかじめ君に受合ふ譯に行かん、のみならず僕自身にも分らない。時と場合によつては断然断はらんとも限らない。是は決して君の親切を無にする考からではないから誤解してくれては困る。

高等學校の入學試験が毎年ある。其折には學校長がよく僕の宅へ依頼にくる事がある。然し僕は多忙の故で毎々辭する事がある。それでそれぎりになる。淡泊なものだ。世の中は夫で澤山である。

夫では悪ると云ふのは形式に拘泥した澆季の風習だ。二十世紀は澆季だから仕様が無いが俗吏社會、無學社會ならとにかく學者の御そろひの大學でそんな事をむづかしく云ふのは大學が御屋敷風御大名風御役人風になつてゐるからだよ。

大學で語學試験を囑托する、僕が多忙だから断はる。其間に何等の文句は入らない。もしそれが僕の一身上の不利益になつたり英文科の不利益になれば僕のわるいのぢやない。大學がわるいのだ。

語學試験なんか多忙で困つてゐる僕なんか引きずり出さなくつたつて手のあいて居る教授で充分間に合ふのだ。

僕なんかは多忙のうちに少しでもひまがあれば書物を一頁でも讀む方が自分の爲にも英文學科の將來の爲にもなると思つて居る。語學試験を引き受けないでしからんと思ふなら隨意に思ふがよい。○○さんなんか何と思つたつて困りやしない。少々こんな謝絶に逢ふ方が人間といふものが理解されていゝのだ。學長たるものは只歴史の大家になつたつて駄目だよ。少しは世の中の人間はこんな妙な奴が居つて講師でもそんなに意の如くにはならないといふ事を承知させるがよいのだよ。 頓首

二月十七日

姉 崎 兄

金之助

三四九

二月十九日 月 午後十一時—十二時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 下谷區中根岸町三十一番地 中村鉦太郎へ

拜啓カールライルの家の寫眞は持ち合せずカールライルの家に關する案内記様のものは別封にて入御覽候御参考にも相成候はゞ幸と存候夫から今度の挿繪の事も小生から御願に參上可仕筈の處多忙の爲め本屋まかせに致置候甚だ無申譯次第御容赦可被下候

次に挿繪は別段の望無之只繪として面白きもの價値あるものを御無理にも願度と存候

服部申候には御報酬としては普通の例にならふ必要なしと。去れば御手間のかゝり具合と出來のよき加減にて充分御請求願上候

いづれ拜顔の上「一字不明」御禮可申上候へども以序右迄申上候 艸々

二月二十日

金之助

不折老臺

座下

三五〇

二月二十日 火 午後十一時—十二時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 本郷區本郷六丁目二十五番

地蔵中方野村傳四へ

拜啓君の苦心の作を四方太が失敗だと申し小山内が傑作だと申したので君大に感ふのは尤もだ。然し四方太と小山内と反對の批評をするのは寧ろ當然で驚ろく事はない。小山内のかいたものを四方太に見せ四方太のものを小山内へ持つて行つたら兩方でははだめだといふに違ない。僕はどうかといふと自分でも分らない。然しとにかく見せ玉へ公平なる評番を仕るから。尤も世の中は色々なものでほめてくれても銘々ほめ所が違つたりわるく云つても悪くいふ場所が皆異なつて居る。どんなものでもほめられもするし、くさゝれもする。どんな男でも女を口説いてる内は生涯に女房の一人や二人やもてるものだからな。天下の別嬪だつて難くせをつければいくらでもあるよ。とにかく苦心の御作とあるからは是非拜見仕らうから郵便で送り玉へ 以上

二月二十一日

金

傳四先生

四方太は倫敦塔幻影の盾は面白いといふが蕪露行はわからぬといふ人だ。僕には其理由がわからん

三五二

二月二十二日 木 午前七時—八時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 本郷區本郷六丁目二十五番地

藪中方野村傳四へ

只今一昔を拜讀に及んだから愈斷案を下さねばならぬ
四方太と撫子先生の評を左右にならべてどつちに賛成するかと問はれ、ば余は四方太に賛成する。

然し君の作のうちで尤も失敗の作かといふとさうではない。君は尤も苦心の作だといふけれども僕が見れば他の出來のいゝ諸篇より同等より少し下位の程度のものである。

だから四方太に賛成する爲には失敗といふ意味を大に高くしなければならん。
小山内君がほめるわけは分つた。あの男はこんなものが好きなんだ。あれは趣味が近いからほめるのだよ。

以上謹んで僕の斷案を左右に呈す。此斷案は決して動かぬ斷案であります。君決して疑ふな

拜 今楷火といふのをついだによんだ。楷火も芝居が、りだが一昔よりはよつぽどいゝと思ふ 再

二十一
日
傳
四
様

金之助

三五二

三月二日 金 (時間不明) 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 本郷區臺町二十八番地北辰館川本(當時
横前)敏亮へ

拜啓蕪菫露行御愛讀被下候よし感銘の至に不堪候御尋ねの文句「うれしきものに罪を思へば
罪ながかれと祈る憂身ぞ」と申す句は下の様な意味で使用せる積に候「恐ろしき罪は犯したれど
其内に嬉しき節もあれば其嬉しさに引かされて永く此罪を犯して居りたしと迄戀に心を奪はれた
るうき吾身なり」と云ふ考にて使用致候處生硬なる爲め御疑をまねき候。元來小生のかきたるあ
るものはよく人より難解と云はれ候自からかく折は俳句拵作る折の考にて文章をやり候故此位な
ら通るだらうと考候へども俳句をよむ様な心得にて小説をよむ人は滅多になき爲め六づかしくて
分らぬと思ふ人が多きならんと存候。骨を折つて人にわからぬ様に致すは一方から云へば愚な事
に候。呵々

先は右御返事迄 草々頓首

三月二日

金之助

横前様

題は古樂府中にある名の由に候御承知の通り「人生は菫上の露の如く脆き易し」と申す語よ

り來り候。無論音にてカイロとよむ積に候

自己の作物が讀者に快感を與ふるよりうれしき事は候はず。作物の目的は是に於て完く成就
されたるものに候。重ねて大兄の厚志を謝し候。向後共御氣付の個處も候はゞ善惡にかゝはら
ず御注意願度と存候

三五三

三月二日 金 午後零時―一時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 下谷區谷中根岸町三十一番地中村

鉦太郎へ

拜啓昨夜服部書店主人大兄の挿畫持參逐一拜見致候。いづれも見事なる出來満足不過之と存候。
あれは今迄のさし畫に類なき精巧のものにて出來の上は定めし人目を驚かすならんと嬉しく存候。
夜中にてよくわからざりしかど、かの倫敦塔の圖の如きは着色の點に於いて慥かに當今の畫家を
あつと云はしむるにたる名品と存候。小生日本人のかいた水彩にてあの如きしぶき設色を見ず。
只うまく板に出來ればよいがとそれが心配に候。此邊は大兄よりきびしく服部へ御命じ願上候
其他蕪露行の古雅にして多少の俳趣味を帯べる琴のそら音の幽冥にして迭宕なる。まぼろしの
盾の無邪氣にして眞摯なる皆面白く拜見仕候御蔭を以て拙文多大の光彩を添へ單行して江湖に問
ふの價値を加へ候。先は御禮迄 勿々

三月二日
不折畫伯

金

座右

三五四

三月二日 金 午後零時—一時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 下谷區谷中清水町五番地橋口清へ
 先日は失禮昨夜服部主人來訪さし晝すべて拜見致候。御骨折の段奉鳴謝候。あの様な手のこんだものをかいて頂くのは洵に難有仕合に御座候。御蔭にて拙文も光彩を放ち威張つて天下を横行するに足ると存候。不折のも今迄に比類なき精巧のもの甚だ満足致候。小生あの倫敦塔の色彩を非常にうつくしく感じ候。何だか西洋人の色としか思はれず候。
 小生の尤も面白しと思ふは大兄と不折の晝が毫も趣味に於て重複せざる點に有之候。是一つは兩君の性質が違ふからかとも存候。兩君の晝によつて小生の文集もえらい者に相成申候
 先は御禮迄 匆々

三月二日

金

橋口様

三五五

三月三日 土 午後十一時—十二時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 本郷區本郷六丁目二十五番地
 藪中方野村傳四へ〔はがき 署名に「なつめの金公」とあり〕
 早稻田文學の三號の小説評(先刻は失禮アレカラスグ讀ンダ)

小川未明氏作 未明君獨り感慨を催して居る讀者は何ともない。あんなに感じを人に強いるものぢやない

大塚楠緒子作 筆が器用に出來て居る。苦る文章を考へたものであります。思ひつきもわるくありません。あの人の作としては上乘であります。三小説のうちの傑作である。

小栗風葉作 何をかいたものものやら。あれよりホト、ギスの投書の寫生文をよむ方よろしくと存候。駄作の駄の字であります

〔左上の隅に細字にて〕

僕の薙露行を十二ヘン讀んだ人がある。僕は感謝の手紙ヲ出シタヨ

三五六

三月五日 月 午後十一時—十二時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 熊本市山崎町六十二番地木村秀雄へ〔はがき〕

拜復薙露行の意は薙露行の通に候

薙露行は古樂府の題名也薙露とは薙上の露。人生は薙上の露の如く晡き易し

三月五日

三五七

三月八日 木 午前七時—八時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 小石川區原町十二番地寺田寅彦へ

〔はがき〕

御病氣の由如何毎日いやな天氣風か雨が雪 いやはや。小生不相變原稿にて多忙是もいやはや
あまりたのまれるのもよしあし、でげす

三五八

三月十七日 土 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 本郷區駒込西片町十番地反省社内瀧田哲太郎へ

御手紙拜見中央公論には可成かゝうと思ふが何とも受け合はれない。只今ホト、ギスの分を三十枚餘認めた所。何だか長くなりさうで弱はり候。夫に腹案も思ふ様に調はず閉口の體に候。實を申すと今日杯はぶら／＼白帆の見える川べりでもあるきたい所に候。文章も職業になるとあまり難有からず又職業になる位でないと張合がなし厄介なものに候。漾虚集は未だ校正が廻つてこず。拜借の天外先生の文章も拜見のひまなく候

先は右御返事迄 草々

三月十七日

夏目金之助

瀧田哲太郎様

三五九

三月二十三日 金 午後四時—五時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 麴町區富士見町四丁目八番地
高濱清へ

拜啓新作小説存外長いものになり、事件が段々發展只今百〇九枚の所です。もう山を二つ三つかけば千秋樂になります。趣味の遺傳で時間がなくて急ぎすぎたから今度はゆる／＼やる積です。もしうまく自然に大尾に至れば名作然らずんば失敗こゝが肝心の急所ですからしばらく待つて頂戴出来次第電話をかけます。松山だか何だか分からない言葉が多いので閉口、どうぞ一讀の上御修正を願たいのですが御ひまはないでせうか 艸々

金

虚子先生

三六〇

四月一日 日 午前十一時—十二時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 麴町區富士見町四丁目八番地
高濱清へ

拜啓雜誌五十二錢とは驚ろいた。今迄雜誌で五十二錢のはありませんね。夫で五千五百部賣れたら日本の經濟も大分進歩したものと見て是から續々五十二錢を出したらよからうと思ひます。其代りうれなかつたら是にこりて定價を御下げなさい。中央公論は六千刷つたさうだ。ほとゝぎすの五千五百は少ないといふて居ました。來月もかけとは恐れ入りましたね。さうは命がつゞかない。來月は君の獨舞臺で目ざましい奴を出し給へ。

雜誌がおくれるのはどう考へても氣になる三十一日の晩位に四方へ廻して一日から賣りたかつたですな。

校正は御骨が折れましたらう多謝々々其上傑作なら申し分はない位の多謝に候。
中央公論杯は秀英舎へつめ切りで校正して居ます。君はそんなに勉強はしないのでせう。雑誌
を五十二銭にうる位の決心があるなら編輯者も五十二銭がたの意氣込がないと世間に濟みません
よ。いや是は失敬。

僕試験しらべて多忙しかも來客頻繁。どうか春晴に乗じて一日川があつて帆懸舟の通る所へ行
つて遊びたい。夫から東京座の二十四孝といふものが見たい。

今月は新聲でも新潮でも手廻しがいゝみんな三月中旬に送つて來た。是を見てもホト、ギスは安
閑として居てはいけない。然し夫は漱石の原稿がおくれたからだと在つては仕方がない恐縮。

島村の破戒と云ふ小説をかつて來ました。今三分一程よみかけた。風變りで文句杯を飾つて居
ない所と眞面目で脂粉の氣がない所が氣に入りました。

何やら蚊やら 以上

四月一日

虚 先生

金

三六一

四月一日 午後五時—六時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より

方森田米松へ

本郷區丸山福山町四番地伊藤はる

藝苑毎度御贈にあづかり奉謝候小生は君の作が出るか出るかと思ふて待つて居るが出ない今度

もかゝなかつたですか。破戒は二三日前買ひました。先日紅緑が來て破戒の著者は此著述をやる
爲めに裏店へ這入つて二年とか三年とか苦心したと聞いて急に島崎先生に對し「て」も是非一部買
はねばならぬ氣になりすぐ買つて來ました。是は只買つて來たのです。面白くてもつまらなくて
も構はない買つて來たのです。夫から半分程よみました。第一氣に入つたのは文章であります。
普通の小説家の様に人工的な餘計な細工がない。そして眞面目にすら、すた／＼書いてある
所が頗るよろしい。所謂大家の文辭の様に裝飾澤山でないから愉快だ。夫から氣に入つたのは事
柄が眞面目で、人生と云ふものに觸れて居ていたづらな脂粉の氣がない。單に通人や遊蕩兒や所
謂文士がかき下すものと大に趣を異にして居るからです。まだ後半はよまないから批評は出來な
いが恐らく傑作でせう。今迄の日本の小説界にこんな種類のものはなからうと思ふのです。只一
篇のモチーヴが少々弱いかと思ふ。

輕薄なものばかり讀んで小説だと思つて居る社會にこんな眞面目なのが出現するのは甚だうれ
しい事と思ふ。

僕多忙採點に窮し來客に窮し。色々なものに窮す。君は金に窮する由。もし必要なら少々取り
に來給へ 以上

四月一日

森 田 兄

金

僕ホト、ギスに坊ちやんなるものをかく。どうか御序の節よんで下さい。然し到底君がほめ
てくれさうなものでないから困る。實は藤村先生とは正反對のものです。

三六二

四月三日 火 午後零時—一時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ〔はがき〕

破戒讀了。明治の小説として後世に傳ふべき名篇也。金色夜叉の如きは二三十年の後は忘れられて然るべきものなり。破戒は然らず。僕多く小説を讀まず。然し明治の代に小説らしき小説が出たとすれば破戒ならんと思ふ。君四月の藝苑に於て大に藤村先生を紹介すべし

三六三

四月四日 水 午後零時—一時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 本郷區駒込曙町十一番地大谷正信へ

春暖の候愈御清適奉賀候小生も一寸伺ひ度と存じながらつい色々な雑用にて御無沙汰致し居候拙文御推賞にあづかり感謝の至に不堪候山嵐の如きは中學のみならず高等學校にも大學にも居らぬ事と存候然しノダの如きは累々然としてコロがり居候。小生も中學にて此類型を二三目撃致候。サスが高等學校には是程劇しき奴は無之(尤も同類は澤山有之候。要するに高等學校は校長杯に無暗にとり入る必要なき故と存候。山嵐や坊ちやんの如きものが居らぬのは、人間として存せざるにあらず、居れば免職になるから居らぬ譯に候。貴意如何。僕は教育者として適任と見做さるゝ狸や赤シヤツよりも不適任なる山嵐や坊ちやんを愛し候。

大兄も御同感と存候。右御禮かたぐゝ卑見迄如斯に候 以上

四月四日

繞 石 兄

金

三六四

四月四日 水 午後零時—一時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 麹町區富士見町四丁目八番地高濱清へ〔はがき〕

畑打ち淡々として一種の面白味あり。人は何だこんなものと通り過ぎるかも知れず。僕は笹の雪流な味を愛す。只學士の妻になり損なつたものが百姓になつて畠を打つ程零落するのは普通でない。「小説家」といふ文はわる、達者である。「寮生活」も多少輕薄也。而も兩篇とも僕の文に似て居るから慚愧の至りだ。これにくらぶれば「素人淨瑠璃」杯の方遙かに面白し。

藤村の破戒といふのを讀んで御覽なさい。あれは明治の小説として後世に傳ふるに足る傑作なり。金色夜叉杯の類にあらず。

五千五百部はうれましたか、五十二錢が高いと思つたら明星も五十二錢だ。随分思ひ切つたのが居る。其代り明星はうれません。

四月四日

三六五

四月十一日 水 午後二時—三時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 芝區琴平町二番地朝陽館野間眞綱へ〔はがき〕

拜啓其後久々御目にかゝらず。承はれば島津の若さんは病氣の由皆川より少々よい方との報知ありたり。然し何かと御多忙ならん。小生も是から又多忙にとりかゝる。講義をかくのがいやでたまらない。左様なら

〔以下細字にて行間に認めあり〕

度々御氣の毒の事なりよろしく御傳可被下候

三六六

四月十一日 水 午後十一時—十二時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 廣島市江波村築島内鈴木三重吉へ

御手紙も小説も届いて只今兩方とも拜見千鳥は傑作である。かう云ふ風にかいたものは普通の小説家に到底望めない。甚だ面白い。強いて難を云へば段落と順序が整然として居らん。第一回の藤さんと瀬川さんの會話が少々振はない。(其代りあとの會話は悉く活動して居る)。最後に舟を望んで藤さんを想像する所は少しくど過ぎる(其代り袂の貝をなげる所なぞはうまいものだ)。夫から法學士との問答もない方がいゝ。繪本の御姫さまは前後ともない方が明瞭である。尤もあれば妙な趣味は生ずる。壁の畫が^原ねけ出すのも考へものだ。以上は僕の感じたわるい方だがそれを除いては悉くうまい。會話といひ所作といひ仕草といひ悉く結構である。一つ二つ取り出して

云ふとほかゞまづい様になるから云はない。總體が活動して居る。僕が島へ遊びに行つて何かかかうとしても到底こんなには書けまい。三重吉君萬歳だ。そこで千鳥を此次のホト、ギスへ出さうと思ふが多分御異存はないだらう。構ひますまいな。尤も緒言はぬく積りだ。

どうか面白いものをもつと澤山かいて尻鉾文士を驚ろかして呉れ玉へ。僕多忙でこまる。昨日から講義をかきかけたら半ページ出來た。講義を書くより千鳥をよむ方が面白い。加計の縁談は破談とやら氣の毒な事だ藤さんでも貰つてやり玉へ。血統なんて構やしないよ。別嬪でブイオリンが上手ならわるい病氣なんか出やしない。大丈夫なものさ。先祖代々の血統を吟味したら日本中に確たる家柄は一軒もなくなる譯だ。序によろしく 以上

四月十一日夜

金

三重吉様

三六七

四月十一日 水 午後十一時—十二時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 麴町區富士見町四丁目八番地高濱清へ

拜啓僕名作を得たり之をホト、ギスへ獻上せんとす随分ながいものなり作者は文科大学生鈴木三重吉君。只今休學郷里廣島にあり。僕に見せる爲めに態々かいたものなり。僕の門下生からこんな面白いものをかく人が出るかと思ふと先生は顔色なし。先は御報知まで 艸々

四月十一日

金

虚子先生

座下

三六八

四月十五日 日 午前十一時—十二時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 廣島市江波村築島内鈴木三
重吉へ

拜啓二三日前君に手紙を出すと同時に虚子に手紙を出して名作が出来たと知らせてやつたら大
將今日来て千鳥を朗讀した。そこで虚子大人の意見なるものを御参考の爲めに一寸申し上げる
○全篇を通じて會話が振つて居らん。藤さんのホ、が多過ぎる藤さんが田舎言葉で瀬川さん
が田舎言葉で掛合をしたらもつと活動するかも知れん(漱石曰く虚子の云ふ所一理あり。然し主
人公が田舎言葉でやつけたら下女や何かの田舎言葉が引き立つまい。但し全篇を通じて若い男
女の會話はあまり上出来にあらずと思ふ)
○虚子曰く章坊の寫眞や電話は嶄新ならずもつと活動が欲しい(漱石曰く章坊の寫眞も電話も寫
生的に面白く出来て居る)
○女と男が池の處へしやがんで對話する所未だ室に入らず。且つ其景色が陳腐なり(漱石曰く會
話はある位で上の部なるべし。池の景色鮎の動靜悉く寫生なり陳腐ならず)
○虚子曰く若い男女が相會して互に思ふはありふれた趣向なり但二日間の出来事と云ふに重きを
置いて、それを讀者にわからせる様につとめた所がよし。(漱石曰く趣向は陳腐にもあらず又陳

腐でなき事もなし要するに技倆如何にて極る。此篇の大缺點はどうしても作り物であるといふ疑
を起す點にあり。然し所々に寫生的の分子多きために不自然を一寸忘れさせるが手際なり)

虚子曰く狐の話面白し全篇あの調子で行けばえらいものなり(漱石曰く全篇大概はあの調子な
り)

要するに虚子は寫生文としては寫生足らず、小説としては結構足らずと主張す。漱石は普通の
小説家に是程寫生趣味を解したるものなしと主張す。

以上は虚子の評なり。君は固より僕に示す丈の積りだらうが僕以外の人の説も参考に聞く方が
將來の作の上に利益があると思ふから一寸報知する。虚子と云ふ男は文章に熱心だからこんな事
を云ふので僕が名作を得たと前觸が大き過ぎた爲め却つて缺點を擧げる様になつたので、いゝ點
は認めて居るのである。

それで原稿は一度君の許諾を得た上だと思つたが虚子が持つて歸ると云つたからやりましたよ。
尤も長いから少々削るかも知れない。是も不平を云はずに我慢してくれ玉へ 以上

四月十四日夜

金

三重 吉 様

三六九

四月十七日 火 午後十一時—十二時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 本郷區本郷六丁目二十五番
地敷中方野村傳四へ

拜啓先達て一寸御話を願つた末松先生の著述は愈本屋が著者と相談の上僕の撰定する人に依頼し度と云ふ事になつた。そこで先づファンタジー・オフ・ジャパンといふのから始めるさうでは六月一杯に上梓したいと云ふ見込ださうだ。そこで先方の條件は

○第一、小説風にかいてあるからして、譯文に骨を折つてもらひたい。即ち美文的に譯してもらひたい。

○原稿料は原書の一ページにつき壹圓五十錢拂ふ。

○期限は六月十日迄。ページ数は二百四十八ページ

○譯者の名前は出さず。矢張り末松謙澄著とする事

以上の條件故誰か適任者で小使がとり度人はあるまいか。僕も引き受けた以上は幾分か責任が「あ」る。美文的に且間違のない様に期限に仕上げてくれる人でないと困るが君もう一遍心當りを尋ねてくれないか。

尤も文體が揃へばあなたが一人に限らず二人でも三人でもよし。

僕の希望は小遣の入る人で以上の資格に應ずる人がよからうと思ふ。

先は右相談旁ちよつと御周旋の勞を煩はし度と存候 以上

四月十七日

傳 四 兄

金

三七〇

四月十八日 水 午後六時—七時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 本郷區本郷六丁目二十五番地藪

中方野村傳四へ〔はがき〕

栗原と森田の兩氏が引きうけてくれ、ば結構也。然し論文で青くなつたり黄色くなつたりして居るものがそんな餘裕があるかね。僕は末松先生自身よりもうまい文章をかく人を周旋してやると威張つたから幾分か責任がある。二人でやれば文體も揃はなくてはならん。其邊も話してくれ玉へ

三七一

四月十九日 木 午後十一時—十二時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 下谷區谷中清水町五番地橋

口清へ

拜啓先日御面倒を願ひ候藏書箋の儀兩三日前學校にて本日^原に面會の上相渡し候處大悦びにて篤く禮を申し畫料はどの位なりやと申候故心配に及ばず無料にてよろしと申置候實は大兄に聞き合せたる上クラークに返事を致すが順なれど大兄は無論酬報をとらるゝ事なき事と存じ一存にて勝手に答へ置き候先は右御禮かたゞ御報迄 艸々

四月十九日

橋 口 様

金之助

漾虛集はまだ出來ず本屋がむやみに校正を後らす故に候

三七二

四月二十八日 土 午前七時—八時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 麴町區富士見町四丁目八番地
高濱清へ〔はがき〕

拜啓毎月清國南京へ送つて頂いたホト、ギスは今月から御やめにして下さい。大将事日本へ歸つて参ります。どうか日本の東京の番地へやつて頂戴。其番地は只今一寸忘れた。

三七三

四月三十日 月 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 麴町區富士見町四丁目八番地高濱清へ 使ひ持歸啓

一金 參拾八圓五拾錢也

一金 壹百四拾八圓也

計 壹百八拾六圓五拾錢也

右は吾輩は猫である(十)及び坊つちやんの原稿料として正に領掌仕候也

四月三十日

夏目金之助[㊦]

俳書堂雜誌部

御中

三七四

五月三日 木 午前八時—九時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 廣島市江波村築島内鈴木三重吉へ

〔はがき〕

寺田寅彦が千鳥をほめて好男子萬歳とかいて來た。四方太が手紙をよこして四方太杯は到底及ばない名文である傑作であると申して來た。僕も是で鼻が高い。あれにケチをつけた虚子は馬鹿と宣告してしまつた。以上

三七五

五月五日 土 午後四時—五時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ

君の手紙は昨日拜見仕つた。實は此前二度手紙を出しても返事がないから君は當分手紙をかゝないのかと思つて居たら又突然手紙が來て少々驚ろいた。翻譯の事は實は僕に譯せといふから、末松著で下働きをするなら食ふものに困つた時でなくてはいやだ。然し末松さんより上手な文章家を周旋してくれといふなら教へてやると威張つた結果とう／＼君と栗原君の所へ持つて行く事になつた。原稿料が高いつて本屋杯に嬉しい顔を見せてはいけない。壹圓五拾錢ではいやだが夏目からのまれて仕方がないからやつてやると云ふ様な顔付をして少々本屋を恐れ入らせてやるがいゝと思ふ。

猫の御批評難有頂戴。もう一回でやめる積で居ますが。忙がしくて書けないから閉口だ。所謂寫實の極致といふ奴をのべつに御覽に入れてアツと驚ろかせる積丈は成算が出来て居る。然し實際驚ろかすのはいつの事か分「ら」ない。

坊ちやんも読んで下された由難有う。君の抗議には降参をしない。ほめてくれた所は賛成であります。大に嬉しいのです。

ホト、ギスの挿繪の攻撃は降参をしてもよろしい。あれは僕のかくのでないから、時々僕も悪口したくなる。然し君小杉先生の雲は特別ですよ。あれはたまらないものだ。

左千夫が昌子(昌子)を評したのを明星で「これほど本人の魯鈍を發表せるものなし」とか云ふて居る。左千夫が見たら怒るよ。元來左千夫なんて歌論杯出来る男ではない。只子規許り難有がつて自ら愚なうたを大事さうに作つて居る。

破戒の批評も拜見した。あの位思ひ切つてほめてやれば藤村先生も感謝していゝと思ふ。それでも過ぎたるは何とか云ふなら話せない男だ。詩人ぢやない偽人だ。實は破戒が出ても精細な評が出ないから氣の毒に思つて居たが君のを見ると同時に太陽の早稲田文學の讀賣には前後して三回も出たのを見た。かう續々出ればもう澤山だと思ふ。藤村先生瞑して可なり。

君のこんどの手紙はいつものよりも親しい感じがある。是はいつもよりも遠慮がないからだらう。

僕論文を見るので中々多忙「坊ちやん」をかく所にあらず。今日漸く古城先生を片付けた。凡て十有九人。傳四の如きは御丁寧に二冊つゞきを呈出して居る。

先達てから食後に腹が痛くつて仕方がない。學生が夫は胃ガンだと嚇したので驚ろいて服薬を始めた。是は慢性胃カタルださうだ。腹が重くて、鈍痛で、脊や胸がひきつて苦しくて生きてるのが退儀千萬になつた。近々人間を辭職して冥土へ轉居しやうと思ふ。

五月五日

野武士

白楊先生

藝苑は君もくれるし、社からもくれる。可相成は君から文貰ふ事にして本社の方は断はりた

三七六

五月七日 月 午後四時—五時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 本郷區本郷六丁目二十五番地藪中

方野村傳四へ(はがき)

昨日は近火見舞難有候。あの時やけたら今日は學校を休む筈であつた。

胃カタルで薬を呑むと灰色の糞が出る。不可思議なものだ。ホト、ギスの千鳥を御覽、君より餘つ程うまいぜ。先生一番の奮勵を要す。君のエッセイは英語がまづいね。然し他に御仲間があるから大丈夫だ。然し今少し何とかありたいものだ。意味の通じない所がある。もつと注意して本をよまなくてはいけない

五月七日 月 午後四時—五時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 芝區琴平町二番地朝陽館野間眞綱へ〔はがき〕

昨日は近火の處早速御見舞難有候。實は中川、森兩君と寶亭へ行つて夫から九段へ行つて火事の事などは頓と知らず。一時は大分騒いださうだ。何でも知らずに居るのが一番結構だ。人間もいつ死ぬか知らないから毎日幅をきかして居るのだね。島津さんはどうかね。 艸々

四月某日

只今手紙着神經衰弱がわるい由。近々人間も辭職して靜養可然か呵々。今少し立つと漾虛集が出来るから一部上げます

三七八

五月十五日 火 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 横濱市中村町千四百八十三番地水見方濱武元次へ

〔はがき うつし〕

ピケット一纏わざ／＼御送被下難有拜受致候小生目下胃病服藥中夫でもむしや／＼食ひ候大兄も其後御變りもなくや。随分からだを大事に御勉強願上候卒業論文検査中にて目の廻る程多忙 草々

三七九

五月十六日 水 午前八時—九時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 廣島市猿樂町鈴木三重吉へ〔はがき〕

拜啓寫眞は先日中川君から届けてくれました。難有う。あの寫眞は大理石の像の様には見えな
い。幽靈の様だ。君の顔や咽喉の所があまりやせて居るせむだらう。是も全く十七八の別嬪の崇
と思ふ御用心

三八〇

五月十九日 土 午後十一時—十二時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 麹町區富士見町四丁目八番地高濱清へ

虚子先生行春の感慨御同様惜しきものに候。然る所小生卒業論文にて毎日ギュー「／＼」閱讀甚だ多忙随つて初給の好時節も若葉の初鰯のと申す贅澤も出來ず閉居の體。加之眼がわるく胃がわるく。散々な體服藥の御蔭にて昨今は腹の鈍痛丈は直り大に氣分快壯の方に候。いつか諸賢を會して惜春の宴でも張らんかと存候へども當分駄目。一寸伺ひますが碧梧桐君はもう東京へは來らんですぐ行脚にとりかゝりますか

卒業論文をよんで居ると頭腦が論文的になつて仕舞には自分も何か英語で論文でも書いて見たく
なります。決して猫や狸の事は考へられません。僕は何でも人の眞似がしたくなる男と見える。
泥棒と三日居れば必ず泥棒になります 以上

五月十九日

虚子先生

金

三八一

五月十九日 土 午後十一時—十二時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 伊勢國宇治山田町宇浦田町
百五十番地湯淺廉孫へ

拜啓此春は伊勢迄行かうと思つて居た所例の如く色々の用事が出来て遂に違約と相成残念千萬
に候。此夏もどこへも出られぬかと思へば存分情なき生活なり。新聞の切りぬき御親切にわざわざ
ざ御送難有候拙文があんな所へ引き合に出やうとは夢にも思ひ寄らず。随分妙な所で妙な人によ
まれるものに候。只今卒業論文閲讀中多忙一筆を走らす 失禮御免

五月十九日

金

湯 淺 様

三八二

五月十九日 土 午後(以下不明) 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 小石川區竹早町百二十番地愛知社
内中川芳太郎へ

拜啓 二三日前君の論文をよみたり。通篇自家の英語にてかきこなしてある御手際はえらいも
の也。英文としてあれ文にかき上げられれば結構なり。感服の至りである。只僕の氣のついたう
ちに兩三箇所の誤謬あり。コンサーンといふ字の使用法が違つて居る様に記憶す。内容も博引旁
證少しも胡亂化しなく頗る立派なものなり。只西洋と日本の比較が有機的に發展してこず。御互

に獨立して並んで居る様(な)傾向諸々あるは可惜。然し大體から云ふて大成功である。聊か數言
を陳じて敬意を表す。今から十年もあの方面へ向つて進めば日本隨一の學者になれる怠たり玉ふ
なかれ。老類余の如きは云ふに足らず新進の士正に銳意斯道の爲に貢獻する所あるべし。〇〇君
の論文も頗る面白い。只英語がづぬけてまづいのは困る。

御願の文學論はいそぐ必要なし。面倒なればやめてもよし。僕は是非出版したい希望もない。
通讀の際變な事あらば御注意を乞ふ

エッセイは未だ片づかず

五月十九日

金

芳 太郎 様

三八三

五月十九日 土 午後十一時—十二時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 本郷區丸山福山町四番地伊
藤はる方森田米松へ

拜啓君の論文は大に短かい而してよく釣合がとれてよく纏つて居るあれはマローの脚本が數
に於て少ないのと其數の少ない脚本が三とも同種類の主人公で貫いて居る所爲か又は君の手際が
うまいのか。

文章も君のかいたのと人のを借りたのとは區別出来る様に思ふが君のかいたと思はれる所が中
中面白く出来て居る。但し綴字の間違に亂暴なのがあるのは驚ろいた。第一君の参考書のシモン

ズ Symon とかくのは餘程輕卒だ夫から時々 delineate と云ふ言葉があるが是も困る。其他は略。

然し大體の上に於て成功で結構であります。

五月十九日

金

森田君

五六日中に僕の短篇をあつめたものが出来る。本屋に贅澤を云ふて居たら。出来上つた上が本屋が復讐に大變高いものにしてどうしても是より安くは賣れないといふには閉口した毎度雑誌を頂戴するから御禮の爲め一部献上したいと思ふ
論文は未だ閱了の運に至らず

三八四

五月十九日 土 午後十一時—十二時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 本郷區本郷六丁目二十五番

地蔵中方野村傳四へ

拜啓二宮君の所へ手紙をやりたいが番地が不分明故君に傳言を依頼する。

昨今兩日二宮君の論文をよみたり。泰西の脚本を數多く通讀して材料を種々の方面から蒐集した勞力は大したものにて感心の至である。其議論も西洋人杯のいふ事には耳をも貸さず直ちに自己の胸臆を大膽に述べたる所甚だ可なり。但し英文の拙劣にして而も書法のゾンザイなる事甚し。同氏は無論英文をかく了見もあるまいが、あまり亂暴である故折角の論文の價値を下げる事一方

ならず

面白い事は中川氏の云ふて居る事と二宮氏の説とある箇所が符節を合する様に暗合した。

五月十九日

金

傳 四 様

三八五

五月二十一日 月 午後三時—四時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 麴町區富士見町四丁目八番地

高濱清へ

のせぬ時は御保存を乞ふ

拜啓別紙の如き妙なものが参り候筆者は木村秀雄とて熊本に住む人なれど逢ふた事も話をした事もなければ學生やら紳士やら知らず
只今論文校閲中にて熟讀のひまも無之只御高覽の爲めに御廻し致候。ホト、ギスへのせるともよすとも其邊は勿論御隨意に候 以上

五月二十一日

金

虚子先生

三八六

五月二十六日 土 午後三時—四時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 廣島市猿樂町鈴木三重吉へ

集簡書

拜啓漾虚集が出来ました一部あげます。諸々方々に誤字があり誤植がある様だから見當つたら
教へて頂戴

人間の價値は何かやつて見ないとどの位あるか分らない。君どうぞ勉強してやつてくれ玉へ。
然し世の中には駄目な事が分り切つて居ても眼が見えないのでうん／＼やつてる奴がある。そ
んなものは教へてやつても説諭してやつても分りつこない。矢張自分が斃れる迄やつて念晴らし
が出来ないと氣が済まんものである。勝手に覺りがつく迄やらせるが、はたから見ると憫
然なものだ。是は此間中からたつた一人で感じて居る事だが誰にも云はない。然し文藝上の事
も何でもない。

君にやり玉へといふのは文學の事だ自分で何か作つて見ないとどの位作れるものか自身にもわ
からない。いくら作つてもそのつぎの自分はどんな風にはれるか決して分るものでないから
君も千鳥のあとに萬鳥でも億鳥でも大にかき給はん事を希望する。

僕も漾虚集文でつきた譯でもないから是から又何ぞかく積りで居る。 以上

五月二十六日

夏目金之助

鈴木三重吉君

先日來卒業論文を漸く讀み了つた。中川のが一番えらい。あの人は勉強すると今に大學の教
師として僕杯よりも遙かに適任者でない。しかも生意氣な所が毫もない。まことにゆかしい人
である。只氣が弱いのが弱點である。

三八七

五月二十九日

火

午後十一時—十二時

本郷區駒込千駄木町五十七番地より

麴町區富士見町四丁目八

番地高濱清へ

若葉の候も大分深く相成候小生フラチルの單衣を着て得々欣々として而も服薬を二種使用致し
居候千鳥の原稿料御仰せの通にて可然かと存候

柳絮行はつまらぬ由、小生もゆつくりと拜見する勇氣今は無之候

漾虚集本屋より既に献上仕り候や一寸伺ひ候。まだならば早速上げる事に取計はせませす 以上

五月二十九日

金

虚子先生

三八八

五月三十日

水

午後三時—四時

本郷區駒込千駄木町五十七番地より

下谷區谷中清水町五番地橋口清

拜啓御蔭にて漾虚集も出来ありがたく御禮申上候

楮先日願ひ候ブックプレートの依頼者ある美術的に寫したる寫真を見せるから來いと申す故次
の日曜日朝參る積に候。もし御同意なら御同行如何本人は君にも見せたと申居候。此男の説に
よると日本の寫眞術はまるで駄目のよし。此男は美術がすきでそんなものを調べる爲め半分來朝

丸で日本の生活を送り居候 御舎兄にも御ひまなら御同行を御勸め申度候。先方の都合は八時半から十二時迄のうちならいつでもよき由に候八時頃拙宅迄御出被下候へば幸甚 所は巢鴨に候。先は右用事まで 艸々頓首

五月三十日

夏目金之助

橋口清様

三八九

六月三日 日 午後三時—四時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より

麴町區富士見町四丁目八番地高濱

清へ

拜啓小生近來論文のみを讀んだ結果頭腦が論文的に相成猫などは到底かけさうに無之候へども若し出来るならば七月分に間に合せ度と存候然し是は當人があてにならぬ事故君の方では猶あてにならぬ事と御承知被下度候
薄暑の候南軒の障子を開いて偶然庭前を眺めて居るのは愉快に候。少々眼がわるくて弱はり候。碧梧桐趣味の遺傳を評して冗長魯鈍とか何とか申され候魯鈍には少々應へ申候。大將はいつ頃出發致候やあれは二年間日本中を巡廻する經畫の由なれど屹度中途でいやになり候。もしやりとげればそれこそ冗長魯鈍に候。

近來一向に御意得ずたまへ机上清閑毛穎子を弄するに堪へたり因つて數言をつらねて寸楮を置二階に呈す 艸々

六月吉日

金

虚子先生

三九〇

六月三日 日 午後三時—四時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 小石川區同心町二十八番地森巻吉

拜啓文章世界御送難有候あれは桑木君から僕の事が書いてあると聞いて先日買つて見たもので

す 僕の小兒の時分は楠正成論とか漢高祖論とかいふのが流行つたものだが今どきの小供は妙な事をかく驚ろいた天下は廣いものだ夏目漱石論を草する中學生があらうとは思はなかつた。

白鳥先生のつとめてやますんば云々は老先生から奨励の辭を頂戴した様な感がある實際先方で

は其つもありなのだらう 近來論文ばかり讀んだので頭腦が丸で論文的になつた此様子では創作杯は出來さうにない然し

何も書きかけて居ないと氣樂でいゝ日々是好日といふ語が思ひ合される 此夏は又講義をかゝなければならぬ苦しくて面白くなくてきく人もつまらなくて然もやらね

集簡書 右御禮旁二三迄 艸々頓首 六月二日

金

森仁兄大人

君が西片町へ轉居するといふ話をきいたが事實ですか

三九一

六月五日 火 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 下谷區中根岸町三十一番地中村鉦太郎へ

拜啓 漾虚集御蔭を以て奇麗に出来上り難有候

却説小生友人にてモリスと申す米國人只今第一高等學校の教師に候處日本の美術書畫に多大の興味を有し諸々方々へ出掛候事樂の様に見受られ候故一度大兄方へまかり出て御所藏の畫幅ことに日本のもの又は支那物拜見の上種々斯道の御話も承はり度と存候が御都合は如何に候やもし御迷惑に無之候はゞ適當の日(日曜ならねば午後)御指定被下間敷や尤も此男は非常のパンカラで萬事日本流に振舞ひ居候へば接待等の點については寸毫の御懸念無之候先は右御都合御うかゞひ迄 艸々不一

六月五日

金之助

不折居士

案下

三九二

六月七日 木 (時間不明) 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 廣島市猿樂町鈴木三重吉へ

昨夜君の所へ手紙をかいた處今朝君のを受けとつたから書き直す原稿料は遠慮なく御受取可然。小生杯は始めからあてにして原稿をかきます

漾虚集の誤字誤植御親切に御教示を蒙り難有候。實は僕も訂正の積で一度よんで誤の多いので驚ろいた位人が見たら定めし見苦しき事なるべし御蔭にて僕の見落したる分を大分直す事が出来て結構だ。どうか序にあとも教へて下さい

君は九月上京の事と思ふ神經衰弱は全快の事なるべく結構に候然し現下の如き愚なる間違つたる世の中には正しき人でありさへすれば必ず神經衰弱になる事と存候。是から人に逢ふ度に君は神經衰弱かときいて然りと答へたら普通の徳義心ある人間と定める事に致さうと思つてゐる

今の世に神經衰弱に罹らぬ奴は金持ちの魯鈍ものか、無教育の無良心の徒か左らずば、二十世紀の輕薄に満足するひやうろく玉に候。

もし死ぬならば神經衰弱で死んだら名譽だらうと思ふ。時があつたら神經衰弱論を草して天下の犬どもに犬である事を自覺させてやりたいと思ふ。

大分あつたなつた。拙宅疊替なり。書齋をかへる時は大騒ぎ中川先生と今一人を手傳にたのみたいと思ふ 艸々不一

六月六日

金

三重吉様

三九三

六月七日 木 午後四時—五時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 本郷區本郷六丁目二十五番地敷中

方野村傳四へ〔はがき 全部六朝風の文字にて認めあり〕

啓上來る九日頃愈書齋の疊替を仕るにつき手傳に御出掛願候右用事迄 早々頓首

三九四

六月八日 金 午後零時—一時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 神田區三崎町三丁目一番地前田儀

作へ

拜復漾虚集一部進呈仕候處わざ「〱」御禮にて痛入候實は毎度白百合を頂戴仕り候につき聊か御禮のしるし迄に机下に呈し候までの處御通覽被下候よしにて此上なき仕合に候。然る處校正疎漏にて到る處に誤字誤植有之嘸かし御目ざはりの事と存候

破戒は小生も數日かゝりて通讀致候あれは文章にてよませる小説では無之又局部々々の活動にて面白がらせる小説にも無之辛抱して仕舞迄よませて後感心させる作と存候小生も一いきにはよみかね候へども通讀して感服致候。愚考にてはあれは慥かに明治の作物として後世に傳ふべきものと存候尤も局部々々の刺激を求むる人にはよみ通す事少々如何あらんかと存候

拙作につき御褒辭を賜はり難有奉謝候去れど拙作中には破戒程の大作は無之尤も趣の違ふものみ故此方が大兄の嗜好に投じて却つて分外の仕合せと相成りたるやも計りがたくと存候呵々先は右御挨拶迄 草々不一

六月七日夜

金之助

林外詞 兄

三九五

六月十九日 火 午後六時—七時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 廣島市猿樂町鈴木三重吉へ〔はがき〕

漾虚集の誤植御報知難有候三版には大分正さねばならぬ。

神經衰弱論をかゝうと思つて居る。僕の結論によると英國人が神經衰弱で第一番に滅亡すると云ふのだが名論だらう。いづれ出たら讀んでくれ玉へ

三九六

六月二十三日 土 午後十一時—十二時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 本郷區本郷六丁目二十五番地敷中 方野村傳四へ〔はがき〕

正は勝たざるべからず、邪は斃れざるべからず。犬は殺さざるべからず。豚は屠らざるべからず、猪子才は頓首せしめざるべからず。文は作らざるべからず。書は讀まざるべからず。月給は貰はざるべからず。御馳走は食はざるべからず。試験はしらべざるべからず。人世多事

三九七

六月二十三日 土 午後十一時—十二時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 本郷區丸山福山町四番地

伊藤はる方森田米松へ

拜啓末松の譯完結の由本屋よりも其旨申來候原稿料も御受取のよし承知致候末松先生外題を改めて夏の夢日本の面影としたさうだ。何だか本郷座でやりさうぢやないか。青萍先生も存外話せない男だ

論語を御よみの由小生は丸で忘れてたりニーチェと論語とを比較して見給へ。兩人共人間である。口述試験に慘憺たるものは君のみにあらず。學問の出来る中川と平然たる傳四とを外にしては大概は慘憺たるものである。サンタン豈君のみならんや。試験官たる小生が受験者とならば矢張りサンタンたるのみ。僕はあの試験をして深く感じた事がある。多數の人は逆境に立てば皆サンタンたるものだ。得意の境に立てば愚うたらたる小生の如きものも亦普通の試験官たり。人間を見るのは逆境に於てするに限る。得意に居る奴を見ると大に買ひ被る。當人自身が買ひ被つて居る。氣の毒なものである。逆境を踏んだ人は自ら修業が出来るサンタンたる諸先生も毎日試験を受けて居れば立派な人になれる。天の禍を下す、下せる人を珠玉にせんが爲めなり。禍はないかな。禍はないかな。天下に求むべきものありとすれば禍のパーゲトリなり。

今一つ感じた事がある。純文學の學生は大抵神經衰弱に罹つて居る。是は二十世紀の潮流が自然學生を驅つてこゝに至らしめたるか又は神經衰弱ならざれば純文學が專問に出來ぬのか。未だ研究せず。諸君既に神經衰弱なれば試験官たる拙者の如きは大神經衰弱者ならざるべからず而も當人自身は現に神經衰弱を以て自任しつゝあり。神經衰弱なるかな。神經衰弱會を組織して大に文運を鼓吹せんとす白楊先生以て如何となす。 頓首

六月二十三日

白楊先生

金

三九八

六月二十六日 火

午後十一時—十二時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 本郷區丸山福山町四番地 伊藤はる方森田米松へ

拜啓本日は御來訪の處不在にて失禮致候其節は存じも寄らぬものを山妻へ御惠投被下難有候是は定めて翻譯周旋の御禮と存候があつた位な事で御禮は入らぬ事に候小生はあの事件の爲めに時間も頭腦も使つて居らぬ上に友人の爲めにか程の勞をとるは小生の地位として當然の事と存候もし氣が済まねば鹽煎餅の一袋でも頂けばよかつた君方に十圓と申す金は卒業後の今日大變な價值ある金に候小生に在つては(山妻に在つてはどうか知らず)左程大金ならず。もらつて文句を並べては濟まないが事實は右の通りである。他人への義理ならばとく別三年間顔を見合せたる小生に對しては入らぬ御心配に候。

尤も僕の妻は慾張りなれば定めて嬉しい事と存候。妻の考では君方は既に卒業したのだから大變な金持になつたのだらう位に考へて居るならんと存候。

先は右御禮旁小言迄一言申入候。いづれ其うち拜眉萬縷可申述候。卒業後の經營は口述試験よりも數倍慘怛たるものに有之べく候へば御用心の上しつかり御やり可被成候 以上

六月二十六日

夏日金之助

森田米松様
栗原元吉様

三九九

六月(?) 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 本郷區駒込西片町十番地反省社「中央公論」へ「應問」

七月一日發行「中央公論」より

夏期學生のよみ物御催促にて恐縮別段是と申すとも考に浮ばず、何でも勝手なものをよんだらよからうと存候。小生昨日イーツのストリース、オフ、レッド、ハンラハンと申すものを讀んで非常に面白いと思ひ候。是は大學へ買つて置いたから圖書館へ這入れる人は夏休後に讀んで見たらよからうと思ひ候。

夏目金之助

四〇〇

七月三日 火 午後二時—三時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 麴町區富士見町四丁目八番地高濱

清へ

啓上其後御無沙汰小生漸く點數しらべ結了のう／＼致し候。昨日ホト、ギスを拜見したる處今度の號には猫のつゞきを依頼したくと存候とかあり候。思はず微笑を催したる次第に候。實は論文的のあたまを回復せんため此頃は小説をよみ始めました。スルと奇體なものにて十分に三十秒

位づゝ何だか漫然と感興が湧いて參り候。只漫然と湧くのだからどうせまとまらない。然し十分に三十秒位だから澤山なものに候。此漫然たるものを一々引きのばして長いものに出來かす時日と根氣があれば日本一の大文豪に候。此うちにて物になるのは百に一つ位に候。草花の種でも千萬粒のうち一つ位が生育するものに候。然しとにかく妙な氣分になり候。小生は之を稱して人工的インスピレーションとなづけ候。小生如きものは天來ノインスピレーションは棚の御牡丹と同じ事で當にならないから人巧的ニインスピレーションを製造するのであります。近頃は器械で卵をかへすインキユベトと云ふものがあります。文明の今日だから人爲的インスピレーションのあるのも尤でせう。そこで此七月には何でも四篇ばかりかく積りです。前に云ふ漫然たる惠比壽ぎれの様なもの雲の如くあるが儲まとまつたものは一つもない。どれを纏めやうか、又どう纏めやうか其邊は未だ自分でも考へて居ないのであります。實は來學年の講義を作らなければ大雄篇をかくか大讀書をやる積りだが講義といふ奴は一と苦勞です。是は八月に入つてからかき出す積りです。

傳四は文學士になり候。小生も文學士に候。して見ると傳四と僕とは同輩に候。同輩である以上は是から御馳走の節は萬事割前に致さうかと存候。

小生は生涯に文章がいくつかけるか夫が樂しみに候。又喧嘩が何年出來るか夫が樂に候。人間は自分の力も自分で試して見ないうちには分らぬものに候。握力杯は一分でためす事が出來候へども自分の忍耐力や文學上の力や強情の度合やなんかはやれる丈やつて見ないと自分で自分に見當のつかぬものに候。古來の人間は大概自己を充分に發揮する機會がなくて死んだらうと思はれ候。